

星の巫女は貴方を待ち
続ける

アステカのキャスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

去年大晦日に閃きました。

SAOをアニメで見えていたらキリト、ユージオ、アリスのポジションをギルガメツ
シユ叙事詩で再現出来んじゃね？

と考えてて書きました。

目次

ギルガメツシュ叙事詩

始まりは突然に…… | 1

『天』『地』『人』の3人 | 14

『天』は神に嘘をつき『人』は天に振り

回される | 29

『地』は『天』と『人』に抱かれ空に消

える | 48

『天』は不死を求め『人』は国を背に戦

う | 71

『人』は神の時代を終わらせ『天』は空

を仰ぎ見る | 94

『人』は彼方の『天』に歌を捧げる

134

『天』は託された星を背負い『人』は世

界に微笑む | 170

設定集

星の巫女リエルのプロフィール

202

幕間の物語

貴方を待つのを終えた日 前編

219

貴方を待つのを終えた日 後編

234

イベント会話集

リエル バレンタインイベント

F a t e / Z e r o 編 約束を果たす刻

まで

それぞれの始まり ————— 270

原初の英雄達は来たるべき時に備え
る。 ————— 291

ギルガメッシュ叙事詩

始まりは突然に……

古代メソポタミア文明

神代の時代を綴ったギルガメッシュ叙事詩

神代の時代を統一し、神と人の間に生まれた半神半人

ウルクを治めた人類最古の王、名をギルガメッシュ

彼はあらゆる財、この世全ての財を我が物とした

古今東西、あらゆる贅沢をつくし、あらゆる財を手にした王

しかし、彼にも唯一手に入らなかったものがある

彼は手に入れる事が……いや、彼の手にも余る程のものだったと後に気付く事になった。

英雄王たる彼は欲した

だが、彼女は断った

「私は貴方の財になるつもりなどない」と頑なに断った不敬な女が居た

これは、彼が唯一手に入れられなかった女の話である

「ギル、今日は何処に行くの？」

「そうだな……東の街へ行くぞ。確かあの場所で売る至高の酒は確かに旨いからな。久方ぶりに空を肴に飲むとしよう」

ウルクの王ギルガメツシユは親友のエルキドウを連れて東の街を歩いた。因みに仕事は文官に押し付けたまま、自由奔放にウルクの街を歩いていた。

若き日のギルガメツシユは傲慢独善であり、自由奔放。

しかし実力はウルクの王として君臨するだけのことはある程の傲慢たる強さがある。隣を歩くエルキドウは神に造られた神造兵器。その力は神の折り紙付きだ。

エルキドウは神々が用意した神の兵器、ギルガメツシユを殺さんとばかりに向けられた刺客だ。だが、2人は殺し合いの果てに友となった。互いに互いを認め合つてこそその友だ。

だが、エルキドウは造られてから世界を知らない。

生きる糧であったギルガメツシュの抹殺も失敗に終わり、何をしていたか分からないし、何があるのかさえまだ分からない。

ギルガメツシュはそんなエルキドゥを連れ出し、外の世界を見せているのだ。まあその対価は文官達の胃にストレスをマツハで与えているのだが。

「むっ……？」

「んっ……？」

そんな2人の耳に何か聞いてきた。

綺麗でいて澄んでいるような、優しい声が歌に乗って響き渡る。

まるで癒しそのものを街に届けているようだ。

「これは……魔術？」

「ふむ、恐らく拡声の魔術を使っているのだろう。どれ、少し見に行ってみるか」

ギルガメツシュとエルキドゥは声の発生源の場所に向けて歩き出した。

「~~~~~♪」

長い銀髪が風で棚引いて揺れる。

彼女は歌を歌った。今日もウルクに平和がありますようにと願いを込めて歌っていた。風が歌を運び、太陽が彼女を照らし、大地が彼女を祝福しているかのように騒ぎ出すようだ。

それでいて優しく、海の小波の音より落ち着く声に誰もが癒されながらも暖かさに満ちている。

その声から傷を負っていた者達の傷が癒えていくのをみて、見物していた人々が感嘆の声をあげるのが聞こえた。

それはまるで聖女のように、その声、その蒼い瞳にギルガメッシュでさえ見惚れているのだ。ギルガメッシュには初夜権で抱いた絶世の美女も居ただろう。だがそれとは比べものにならない程の可憐さと儂さのような雰囲気を持つのだ。

隣にいるエルキドゥでさえ、その歌が頭から離れない程の強烈な経験が刷り込まれ

た。その歌声はまるで天上から降りた天使の祝福にも思えた。

歌を終えると、銀髪の少女は一礼して木材で作った舞台から降りていた。

「先程の歌声は貴様のものか」

その言葉に振り向く銀髪の少女。

ウルクの王であるギルガメツシュに目を見開く。いやそもそもこんな所に来ているとは思わなかった。

「……面白い。まだ20も生きておらぬだろうに、そこまでの魔術が使えるとは見事なものよ」

不思議と視線が奪われて離せなくなった。

こんな経験は初めてだ。ギルガメツシュが聴いたどの歌よりも透き通り、ギルガメツシュが抱いたどの女より可憐だった。

ギルガメツシュは銀髪の少女をみると、ふっと可笑しそうに笑った。

「貴様の歌声は何物にも勝る美酒のようだ。良いぞ。貴様にこの私の財となることを赦そう」

ギルガメツシユは銀髪の少女に告げた。

「えっ、普通に嫌です」

「そうかそうか。ならば私の元に……………はっ？」

ギルガメツシユはポカンと呆気に取られた。

自分はこのウルクを統べる王であり、王は絶対の存在でその自分からの命をこの銀髪
の少女は正面から断つたのだ。

隣にいるエルキドゥさえその事に驚いている。

「私の歌は誰か一人の為に歌うんじゃないやありません。私は私が歌いたいから歌ってるだけ
で、強要されて歌うものじゃない」

「お、おい!? この方はこの土地を統べるギルガメツシユ王だぞ!? お前さん死にたい
のか!？」

「この程度の事で殺すなら王の器が小さいだけでしょ」

ブチッとギルガメツシユの何かが切れた。

王を前にしてこの不敬。だが、たかが子供に怒号でも浴びせたら負けな気がするので
黙っている。エルキドゥは中々豪胆な少女だと思いつつも少女は続ける。この不敬
で殺されないか否かと側にいた男の人が心配する。

「私の理想の王は寛大でちゃんと民を考えて行動する人だし、器が狭くて、民に仕事を押し付けて自由奔放な穀潰しみたいな人に仕えたくはないし」

「ぐっ……！」

「それにウルクだつて女神イシユタルが管理しているとはいえ人口が増えて土地も狭くなってるから問題多いし、このままじゃ国全体が人に食い尽くされて自然崩壊、貴方は今何やってるの？」

「ぐぬぬ……!!」

「確か初夜権だっけ？ 抱いた女の人も居るのに見境なく誰かを指名つて猿じゃないんだからそれよりやる事くらいあるでしょ」

「言い方はアレだけど確かに正論かもね、ギル」

「ぐはっ……!?!」

空気の読めないエルキドウが少女の言葉の後にとどめを刺す。

少女の言っている事は紛れもなく正論だ。この程度の不敬で殺せば王の器が知れると言うもの。幾ら天上天下の王とは言え自由奔放が過ぎて、他者に仕事を任せて遊ぶ穀潰しと言えは確かに正論だ。

更にはウルクの土地問題、人口が増え過ぎたせいか土地をどうしても増やさねばなら

ないが、神が管理する土地への侵略は不可能。唯一あるのはフンババの森くらいだが、アレは人が勝てるほど容易い存在じゃない。

更には初夜権にギルガメッシュは寵愛を授けているかもしれないが、見境なく授けているならドン引きである。まるで性欲を処理する道具のように聞こえる（少女の持論）
因みに隣の男の人はガタガタと震えながら何処かに行ってしまった。まあ気持ち分らない事もない。原初の王を前にしてこれだけの不敬をかました少女の未来は無いのかもしれないし、巻き添えは食いたく無いのだ。

流石の原初の王も跪いていた。天に仰ぎ見るギルガメッシュを同じ大地に立たせた上でねじ伏せた。まあ半分は少女が魔術の探知で知った事の愚痴なのだが……

「……………フフ」

何処か壊れたような王は笑った。

「フハハハハハハハハハハハハ!! 良いではないか雑種、どうやら簡単には財にはならんと言う事か！」

「……………? ギル、なんか嬉しそうだね。マゾにでも目覚めた？」

「そんな訳あるか戯け！ この天上天下の王を前にしてこの不敬、本来なら万死に値するが、その姿にして豪胆さは見事と言うべきよ。ならば王命として貴様に命ずる」

「はっ？ 私は別に貴方の命令なんて」

「我が城の宮廷魔導師となれ」

それは少女の予想していたものとは別の命令だった。

少なからず処女を捧げろとか、鞭叩きした後殺せとか言われたら全力で逃げていた。まあエルキドウや至高の財を持つギルガメッシュから逃げられるとは思ってないが。

「私が……宮廷魔導師？ いや、何でそうなった」

「ふっ、貴様の拡声は魔術によるものであろう？」

「まあそうですけど、まさかそれだけで？」

「我にも魔術の心得はあるが、ウルクの中では魔術を使えるものは数少ない。貴様には我が城で宮廷魔導師として働いてもらう。無論、歌いたい時に街に出るのは構わん」

「いやいや、高待遇かもしれないけど、結局は王様の手元に置きたいだけでしょ？」

「その通りだ！」

「言い切っちゃったよこの人!!」

駄目だこの人。結局自分の事しか考えてない。

まあ確かに高待遇ではある。他の所で働くよりかは恐らくいいのかもしれない。歌
いたい時に歌う事が許されているわけだし。

「とは言え、貴様も魔術を独学で学ぶのに限界を感じていたのだろうか？ 我が城や俺の
財には魔術の書物が山ほど置いてある。どうだ？ 悪い条件ではなからう？」

「私を貴方の財に出来なくとも？」

「それとこれとは話は別よ。何せ我でさえ聞き惚れたその美声に容姿、いつか必ず我が
財に加わりたいと貴様から言わせてやるとするよな」

ギルガメツシュが他に目を付けたのは、その魔力だ。

歌が聞こえたのは数キロ先に歩いていた所だ。そこまで声を届けるのは並の魔術師
でも不可能だ。生まれながらにして膨大な魔力を持ち、国全体を見て述べた感想から聡
明さも感じられる。文官に仕事を押し付けた甲斐があったものだ。

「……ハア、分かった。とりあえずはその王命に従いましょう」

悪い条件ではないし、何より魔術の書物には興味がある。

そもその話、歌に癒しを込める自体でも規格外なのだが、銀髪の少女は自ら魔術を生み出したのだ。とは言え独学では手詰まりだ。銀髪の少女も逆にギルガメツシュを利用しようとするのがせめてもの抵抗だった。

「小娘、名は何と言う」

「……リリエルよ」

「ではリリエルよ。貴様は宮廷魔導師として励むがよい。エルキドゥ、一度城に戻るぞ。良い拾い物をしたのでな」

「分かったよ。リリエルもついて来て」

「はいはい。行きますよ」

ぶつきらぼうに答えながらも2人について行くリリエル。

この後に彼女はギルガメツシュ叙事詩において『星の巫女リリエル』と名を綴られるのだが、今はまだ知る由もない。

『天』『地』『人』の3人

「こらー！ 待ちなさい！」

「フハハハ！ だが断る！ 今日には劇を見に行くのでな！」

「仕事サボるんじゃないやありません！ シドウリさんが過労死しちゃうでしょうが！！ エルー！ あの馬鹿王様を止めて!!」

「なっ……！！ 我が友を使うのは狡いではないか！」

「知るかー！ ならせめて仕事してから行きなさい！」

ヴィマーナで逃げるギルガメッシュに音速を超えた速度で追いかけるエルキドウと魔術によって空を駆けるレイエルの姿がウルクの空で目撃された。目撃と言っても民達には目にも追えない速度で昼間から流れ星かと騒いでいる程だ。

宮廷魔導師になってから半年が経った。

レイエルは殆どの書物を読み漁り、魔術の知識は今やウルクで一番と言った所だろう。読んだ魔術も殆ど会得して今では簡易的とはいえウルク全体に魔除けの結界を半永久的に張り続ける事も可能なくらいだ。

だが、宮廷魔導師になってからもギルガメツシユは自由奔放にエルキドゥとどつかに行ってしまうので、実戦的な魔術、『強化』『加速』『相乗』『飛行』と言ったものを覚えてヴィマーナ並みのスピードで追いかけている。

前までは空中散歩で興奮していたし、あまりの高さに恐怖もあったが空を飛べるエルキドゥに支えてもらいながらも今は時速500キロもお手の物だ。少し人間を止めた気がした。

その代わり月一で性能を競い合う約束をした。

今の所全部負けている。しかし、それでも神の兵器たるエルキドゥに善戦したりイエルも強さならウルクで2、3番目に強いだろう。

「ハアハア……捕まえた!!」

「ぬう……!! 貴様! いつの間に『束縛』の魔術を覚えた?」

「王様が仕事サボってる時に決まってるでしょ! ほら戻るよ! 国の為にシドウリさん達が働いてるんだから、王様がそれでどうするのよ!」

「ハハハ……!! もういつもの習慣になって来たね」

「貴様引き摺るではない! この美しい王の玉体に傷でもついたらどうするのだ戯け!!」

エルキドゥ、貴様も鎖で縛るではないわ!!」

ズルズルとエルキドウの鎖で縛りながら魔力枷で四肢の動きを封じて地面を歩く。とりあえず帰り道にウルクスの文官達に差し入れ物を買わないと考えると考えながら辺りを見渡す。

「とりあえず、バターケーキを20ください。勘定は王様持ちで」

「貴様何を勝手に……!」

「シドウリさん達が働いてるんだから、民を愛しているならちゃんと言いなさい!

シドウリさん達王様のせいで睡眠時間削ってるんだよ?」

「……はっ、仕方のないやつよな」

「ギル、それ君が言う?」

空気の読めないエルキドウがツツこむが、実際にリエルの言っている事も確かだ。王の責務には王としての下賜はつきものだ。ギルガメツシユを縛る鎖や魔力枷を外し、ギルガメツシユは立ち上がり、宝石と交換した。

「買わせたのは私だから持つのは手伝うよ」

「はつ、当然だ。我に荷物持ちさせると不敬な事よ」

「ハア……『風のさえずりよ』」

買ったバターケーキが風によつて宙を舞い、浮いている。

魔術師としてのリエルは最早天上の神に届くのではないかとギルガメツシユは遠目で思いつつも、城に帰ったら仕事以上にやらなければいけない事を思いついた。

ウルクの城に帰り、リエルがバターケーキを配ると文官達は泣きながらリエルを抱きしめた。文官達にとつて常識人たるリエルはウルクの天使らしい。

流星に苦笑いしながらもシドウリさん達に癒しの魔術をかけた後、ギルガメツシユはバターケーキを配り終えたリエルの襟を掴みながら王の寢室に引つ張った。

「ちよつ、王様?」

「確か王たる者は王に仕える者へ下賜をやるのが道理だと言つたな?」

「ま、まあ特にシドウリさん達には必要でしょ」

「ならば、貴様にも下賜を与えよう」としよう」

「えっ?」

ギルガメッシュはリエルを思いっきり宝物庫に投げ入れた。

咄嗟に物理保護の魔術をかけて受け身を取ろうとするとそこには既にエルキドゥがいてリエルを受け止めていた。

「あ、ありがとうエル」

「どういたしまして」

リエルが辺りを見渡す。

そこは寝室とはまた違った膨大な装飾が部屋を鮮やかに飾られている。

そしてそれだけの黄金があるのに狭いと感じないただっ広い空間に居た。

リエル、エルキドゥ、ギルガメッシュだけしか居ないし、部屋というより何か巨大な宝物庫を連想させる。広間の床には、無数の武器らしきものが突き刺さっていた。他にも弓、斧、槍、槌、鎌など、剣に至っては種類が多すぎて何本あるのか分かったものではない。

ただ、どれも一本で国が動くほどの価値があるのは素人目で見たリエルでさえ理解

した。

「王様？　なんでこんな所に私を？」

「貴様は分かっているだろう？　近々、我が何をするのか」

少しリリエルは悩み始める。

最近王様はサボってばっかだからやるつもりはないのかと思った。

「……木材や土地の確保……フンババの討伐……」

「分かっているではないか。我とエルキドウ、そして貴様を含めた3人でフンババを討伐する」

ウルクで最近起こっている問題は多いが1番の問題は木材の価格上昇である。木材の用途は建物や家具などでは需要は多い。だが、前回も言った通りウルクの人口は増えてから、現在の木材の量では供給が追いついていない。更には人口に伴った土地の確保もしなければならぬ。

となればフンババが守護する杉の森しかない。だが、フンババは声は洪水、口は火、息

は死、と言われた厄災そのもの。神の一柱や二柱程度跳ね除ける最強の獣だろう。

へえーいつかやると思ってた………

「って私も!？」

「当然よ。貴様は我が友に何度も善戦したではないか」

「いや、まあ確かに善戦したかもしれないけど全敗してるし……」

「貴様が何を言おうがこれは決定事項だ。貴様には我が宝物庫から一つ好きな武器をくれてやる。それを一週間で使いこなしてみせよ。その後、フンババの討伐へ赴くぞ」

その言葉を聞いた瞬間、リエルは叫びだす。

どんな鬼畜だ。私まだ半年しか経っていない街角の小娘にいきなり怪物退治に派遣させるとかどんな無理ゲーだ。

「嫌だ!!」

「戯け! 王命だ!! 何の為に貴様を宮廷魔導師にしたと思ってる!!」

「手元に置いときたいだけでしょーが!!」

「その通りだ!! そして今こそ貴様に知識を与えた意味を存外なく発揮せよ!!」

「理不尽!!」

いやそもそも原初の王だ。理不尽なんて当たり前だ。

おのれ神様、何故ギルガメツシユをこんな性格にした（白目）。このままじゃ私の胃に穴が開き、ストレスで髪が抜けてしまいそうだ。

はっ、ここがローマか（錯乱）。

だがリィエルは諦めずに説得を続ける。まあ半分説得は諦めている。理不尽の塊たるギルガメツシユに説得など無理な話だ。

「いやだつてフンババつてアレでしょ!! 声は洪水、口は火、息は死、とか言うヤバい奴じゃん! 私死んじやう! 16歳で死んじやう!!」

「我は18で年齢も対して変わらんだろが!!」

「仕事は!?! シドウリさん達が過労死しちやうじゃん!!」

「戯け! その事もあつて先の仕事など済ませておいたわ!!」

「嘘でしょ王様!!? 頭でも打った!?!」

「正常に決まっておろが! どう足掻こうがエルキドウと我が引き摺つてでも連れてくわ!!」

「ぐぬう……い……この鬼畜、悪魔、金ピカ！」

「フハハハ！ なんとでも言うが良い！」

リエルの歪んだ顔を見て愉悦するギルガメツシュ。

とは言え宮廷魔導師となった今は民の事も考えなくては行けない。とは言え地獄の具現みたいな怪物に三人で勝てるか不安しかない。

だが、結局いつかはやらなければならない事だ。2人が死ねば国は終わり、ウルクの土地を他国に奪われてしまう。勝率を1%でもあげたければ王様の言う通りにするしかない。

「ハア……ええいこうなったら早速選ぶよ!!」

正直言つてヤケクソになっている。

しかし王様は言い出すと曲げない性格だ。となれば武器を早急に選び、特訓するしかない。

「と言つても……私に合う武器なんてあるのかなあ……」

早めを選ぶと思ったその矢先、一つだけ一風変わった武器が刺さっているのに気がついた。

「ん？　これは……？」

リエルの目に止まったのは魔杖だ。

見た所、自分より身の丈が長い魔杖で装飾は白さが強調されていて、何より自分の瞳と同じラピスラズリの宝石が埋め込まれている。

魔術師において魔杖と言うものは魔力の増幅や、詠唱の省略など様々な効果をもたらすが、リエルはこの魔杖がそれとは全く違う力を持つと直感で理解した。

「……これって、もしかして」

リエルはその魔杖を掴むと、その魔杖から魔力が溢れ出た。

リエルの中で魔杖は何か繋がつた。これは恐らく数多の世界の具現。リエルが触れたのは一つの世界に過ぎない。

「これは……『魔術』を超えた『魔法』の域だ

「むっ……その魔杖に認められるか」

「ギル、あの魔杖はどんなものなんだい？」

「さてな。我が触れた所で何も感じはしなかったが、リエルの才か、はたまた魔杖が主を認めたと言う所か」

自分より大きいのに軽いし、魔力は増幅してさっきの数倍は魔力を感じる。自ずと、これしかないと言う直感があり、これ以上の代物はないと確信した。

「王様、これにする」

「その魔杖にはまだ名がない。貴様が名付けてみよ」

「無いの!? ……そうねえ」

少女は真剣に考えてた。

ラピスラズリが目を惹き、数多の世界と繋がると言う魔術を超えた力を持ち、そして自分が生涯持つとされるこの魔杖の名前だ。

隣にいるエルキドゥを見る。エルキドゥは確か星の力を使う事が出来る神造兵器だ。そして前に立つギルガメツシユを見た。ギルガメツシユは原初の地獄を再現する『乖離剣エア』を持つ原初の王だ。

なら、それに並び立つのにふさわしい名前は……

「『ユニス・パリス・ワシ』……なんてどうかしら？」

「ほう……『世界』と来たか。その名は重いぞ」

ギルガメツシユが『天』の力、エルキドゥが『地』の力であるならば、リエルの持つそれは『人』の力を束ねるものだと考えた。

ギルガメツシユが目を細めながら口にするが、リエルはため息を吐いた後に差も当然のように口にする。

「今更何言ってるの？ 星を見定める王、ギルガメツシユの宮廷魔導師ならそれくらいの覚悟がなくちゃ、笑われるでしょ？」

あくまでリエルは王の財にはならない。

けれど半年が経ってから、色々と背負う物が出来たらしい。

最初の王は星の裁定者であり、その友はエルキドゥ、そして『その王が認めれた宮廷魔導師』こそリエルであるならば、リエルの行く道は世界すら背負う過酷な道になるだろう。

だが、それも不思議と悪くないと思うのはギルガメツシュとエルキドゥという大切と思える存在が出来てしまったからだろう。

「フツ……………」

ギルガメツシュはそれに笑い、王命を下す。

「フハハハハハハハハ!! よくぞ言ったリエル!! ならばそれを使いこなして見せよ! 期限は一週間、それまでにその魔杖を使いこなし、フンババ討伐に行く! その命を曲げる事は赦さぬぞ」

「当たり前前、私も死にたくないしね」

「なら、僕も手伝うとするよ」

「ありがとうエル」

エルキドゥウが手伝ってくれる事にありがたみを感じながら笑うリイエル。因みにギルガメツシュにそれだけの見栄を張ったが実は内心、結構必死だった。死にたくないの
で全力で頑張るしかないと感じているリイエルだった。

その後、エルキドゥウにズタボロにされながらもその魔杖を使いこなし、5日が経った頃、リイエルは初めてエルキドゥウに勝ったのだ。その事に泣きながら喜び、その2日、フンババ討伐は苦もなく行われた。

「何というか……拍子抜けにも感じたのは私だけ？」

「いや、我もそう思うな」

「僕もそう思う。もつと苦戦するかと思った」

フンババの討伐はあまりにも早く討伐された。

その日、人類は初めて『森』という場所へ進出した。森の主人フンババは英雄王ギル

ガメツシユ、天の鎖エルキドウ、星の巫女リエルによつて討伐され、人類が新たな一歩を踏み出したのだが……ギルガメツシユは後に粘土板にこう綴る。

『我、宮廷魔導師としてのリエルがえげつないと思つた』

この時、原初の王はリエルの全力を垣間見た。

あの魔杖を手にしたリエルに逆らつたら死ぬかもと後に酒で酔つたギルガメツシユを介抱するエルキドウが聞いていた。

こうして三人は互いに肩を並べる存在へととなり、『原初の王は国の心臓』、『天の鎖は国の手足』、『星の巫女は国の頭』と言う3人を称えられるようになった。

『天』は神に嘘をつき『人』は天に振り回される

フンババ討伐から数ヶ月が経った。

ここウルクの街は活発になり、木材や土地を増やしてから発展が他国と比べて目を張る物となった。人口問題や資材の確保などは今はとりあえず安定期に入っている。

ギルガメツシユは珍しく暫くの間は自由奔放に城を抜け出す事はなく仕事の粘土板に目を通し、数週間は王としての責務を果たしていた。

エルキドゥについてはリエルと一緒に仕事の勉強だ。偶にリエルと街を回って外の世界を見て周った。暫くギルガメツシユが遊び呆けないようにリエルがエルキドゥに声をかけては外に出てウルクの外に空中散歩に出かけたりなどする。

リエルについては偶にギルガメツシユやエルキドゥ、文官達に歌を聞かせていた。本来なら宮廷魔導師と言う立場は王の仕事までしないし、何より自由をギルガメツシユ自身が保証していたのだが、シドウリさん達を見たらそうは言ってられなかったから手伝っていた。

フンババ討伐から随分と国が落ち着いてきた。
騒がしいウルクの街に平和が訪れていた。

だが、そんな平和は徐々に崩壊へと続いていくことに今は誰も知る由はない。
ただそんな中、リエルは魔杖を持った瞬間に何か繋がっていたのが途切れて消えてしまった事に嫌な予感を覚えながらも、その時はまだ何も分からないまままで何も考えていなかった。

「王様ー？ エルー？ 何処に行つたのー？」

リイエルは2人を探していた。仕事はあらかたリイエルが終わらせたが、ギルガメツシユとエルキドゥは最低限の仕事を終えて何処かに消えていた。前に比べればサボリと言う程ではないが、流石にいきなり消えると心配もする。

面倒だが、探知の魔術で城を見渡したら、城の屋根に2人ともう1人浮遊している女神のような女性がそこにはいた。

リイエルはとりあえず浮遊の魔術で城の屋根にたどり着いた。

「王様、エル、探したよ」

「あつ、リイエル」

「むつ、リイエルか。丁度良い。イシユタル、貴様の婚儀など受ける気はない。何故なら、私の相手は既に決まっているのだからな」

「えっ? どう言う状況? 王様何して——きやつ!」

ギルガメツシユがリイエルを抱きしめる。

エルキドゥとギルガメツシユに会えたと思えば今度は急に抱きしめられ、それを浮遊した美の女神に見せつけているようだ。流石に状況が飲み込まず、抱きしめられた事に驚いたリイエルがギルガメツシユに魔杖の力で繋げて念話を聞いた。

『ちよっ……!! どう言う状況!?!』

『この女神が我に求婚してきたのでな。流星にしつこいと思つたその矢先にリエル、貴様が来たのだ』

『えええ、嫌ならハッキリ断りなさいな。私を持ち出さないでよ』

『戯け。貴様は我が友であり我が財になる予定であろうが』

『友は良くても財になる予定はないよ。ハア……フリをすれば良いの?』

『分かつておるではないか』

『全く……後で何か奢つてよ?』

リエルは内心ため息をつきながらも、目の前に浮かぶ女神に丁重な口調で挨拶をする。

「初めまして女神様。私はギルの婚約者のリエルと申します。以後お見知りおきを」

「なっ……!! アンタこんなガキと結婚する気!?! 悪い事は言わないわ、今すぐ私と婚

約しなさい! 女神と婚約出来る事自体が荣誉なのよ? それを断ると言う事がどう

言う事が分かつてるのかしら!?!」

「そんな栄誉など微塵も要らん。我はこの女と決めたのだ。我と対等に存在し、我と共に世界を背負うと言う覚悟を持った我が妻だ。幾ら貴様とて侮辱は神であろうが万死に値すると知れ」

わあ流石王様。女神だろうと容赦ないな。

と言うか我が妻という言葉は嘘でも照れるからやめて欲しい。自由奔放の王に少しでもときめいたら黒歴史を粘土板に綴っている所だった。

まあ無駄に顔はいいからね。この王様。

「この……!! 覚えてなさい!!」

「フハハハ！ 貴様の事など覚えるつもりは微塵もないわ！」

女神は金色の波紋から天界へと消えていった。

いやー、しかし修羅場だったな。あんな弓みたいな乗り物に乗って金色の波紋から天界まで一直線。何というかお転婆な女神だったなー。

……いやちよつと待て、なんかその女神もの凄い心当たりあるんだけど。

「ね、ねえ王様。今の女神の名前は……?」

「むっ、知らなかったのか? 金星の女神イシユタルだ」

物凄いい心当たりのある女神様だった。

えっ、イシユタル様だったの? 一応、ウルクの土地神はイシユタル様で作物とかが育つのは神の加護みたいなものがあるからだ。そのイシユタル様に喧嘩売った事になる。てか完全に巻き込まれたりリエルにとって中々デカイとぼっちりである。

「何してんのおお!?」

「うおっ!? 急にでかい声出すな戯け!」

「じゃなくて! あれ曲がりなりにもイシユタル神でしょ! 神様に喧嘩売ってどうすんのよ!」 土地や作物とか不作になったら文官達の仕事がまた増えるでしょーが!!」

「戯け! 貴様はイシユタル自身が我など眼中にない事くらい今ので分かったであろうが!」

「いやまあそうかもしれないけどさ……」

イシユタル神の目的はギルガメッシュの容姿につられて求婚を申し出たわけでない。

恐らくはギルガメツシュの『宝物庫』だろう。

ギルガメツシュの『宝物庫』には古今東西、人類が生み出すものであれば、遙か遠い超未来のものまで過去未来の時間軸すら超越して財宝が追加され続ける神秘の蔵だ。

無論、宝石や純金なども山のように置いてある。イシユタルはそれを目当てに求婚したのである。リイエルもエルキドウも何となく察してはいたのだが……。

「……と言いか私結構なとぼっちり食らったんだけど……女神に嘘とは言え恨まれる羽目になったんですけど……」

「知らん」

「横暴!! これでイシユタル様がウルクを襲ったら王様が何とかしてよ!」

「フハハハ!! その時どうせ貴様も対処に回るから不可能に決まってるわ!!」

「大丈夫だよリイエル、その時は僕も何とかするから」

「ううう……エルが優しくて尊い。正直王様よりエルの方が好きになりそう」

「リイエル貴様!! この我のどこが不満か!」

「性格、横暴さ含めて全部だよ!!」

ギャーギャーと騒ぎ合っている2人に笑うエルキドウ。

兵器として心を知らないエルキドゥが作られた心の底から笑う事が出来るようになっていたのを2人は気付いていなかった。

リイエルもギルガメッシュも大切だと思えるからこそ、この暖かい感情を理解して笑いかう事が出来る。エルキドゥ自身の性能を競い合える友が2人もできた。エルキドゥの知らない事を教えてくれる2人に抱く感情はいつたいい何なのだろうという気持ちさえエルキドゥは心地よいものだった。

「エル、王様、仕事も終わったしバターケーキでも食べに行こうよ。私が出してあげるからさ」

「ほう……貴様がか。珍しい事もあるよな」

「いいでしょ偶には。暫く仕事ばかりだったし、シドウリさんにはちゃんと行ってあるんだから」

「ならばよし。エルキドゥ、リイエル、さっさと行くぞ」

「……うん。そうだね」

この3人が揃えば乗り越えられないものなどない。

そう思わされる程、手にした『心』がそう感じさせていた。

イシユタル神の求婚を断ってから一週間が経った。

「つつ……！」

ウルクの天候がやけに酷い。

雨は降り続き、雷が轟き、風が吹き荒れる。しかしリエルがウルク全体に張った強固な結界のおかげで作物や建物の被害やウルクの民達は無事だが、明らかにおかしいのだ。

何せウルクから外れた外側はずっと晴れているのに、ウルク全域のみ天候が狂っている。誰も見た事のない異常事態だ。

「リエル、エルキドウ」

「ああ、巨大な台風が近づいて来てる。それも神が人為的に引き起こしたものだね」

「確定ね。あの台風から神秘を感じるし……」

「イシユタルめ……『天の牡牛』^{グガランナ}を引き連れて来たか」

『天の牡牛』^{グガランナ}

隕石落下にも等しい大破壊を巻き起こすシユメル最大の神獣。暴風だけで物体を吹き飛ばし、雷鳴で神の力さえ打ち砕き、全盛期ならティギリスも干上がらせる力を持っている天災の化け物。

人間にとって事実上無敵の神獣であり、勝ち目がないとイシユタルが自負するほどの究極の暴獣、神々ですら手懐けられないが、イシユタルは時に厳しく、時にもつと厳しく扱うことでグガランナを自在に操れるとギルガメツシユは口にした。

金星の女神だけあってその力は折り紙付きだ。

「やっぱ求婚断ったせいじゃん」

「乗った貴様も同罪だ戯け。どの道このままでは貴様の張った結界が保たぬからな。我とエルキドウ、リエルで大元を叩くぞ」

「はいはい。まあこれだけ強固な結界を維持するのも疲れるし」

「リエル、だんだんギルに似てきた？」

「ヤバい死にたくなってきた」

「貴様後で覚えておけよ……」

いつものように軽口を叩いている。

リエルは2人に風避けの魔術をかけて、ギルガメツシユが出したヴィマーナにエルキドウと一緒に乗って天災の中心地へと飛び込んだ。

「へえ……これが『天の牡牛』^{グガラシナ}」

見た感じ全長100メートルはある巨大な牛、蹄は更に大きく踏み潰されれば即死どころか跡形もなく消滅するだろう。

「へえ、よくノコノコと3人で来たわね」

「イシユタル様、ウルクの土地神である貴方が何故ウルクに『天の牡牛』^{グガラシナ}と言う天災を持ち込んだのですか？」

念の為、リイエルが説得の為に質問する。

まあ何となくだが説得は無理だろうと内心諦めている。だが、会話こそ人間の真心であり優しさだからだ。ダメ元でやってみた。

「決まってるじゃない。貴方達3人を殺すためよ」

「それは何故？」

「神の命に逆らった咎人だからよ。ギルガメツシユは私の求婚を断り、未だウルクの土地に踏ん反り返って、エルキドウはいつまで経ってもギルガメツシユを殺さない。貴方は私が求婚するにふさわしいギルガメツシユを奪った。既に咎人なのよ」

イシユタルは3人を見ながら嘲笑う。

確かにフンババを討伐出来たことは見事と称してやろう。だが、神でさえ手を焼いたグガランナなど幾らあの三人でも倒す事は出来ないだろう。

この中で3人の決断は早かった。

3人の中のイシユタルの意識は「あつ、コイツ敵だ」と言う認識に瞬時に切り替わった。悲しいがイシユタルの考えが大体分かるので冷酷無慈悲である。

「よし、なら遠慮は要らないね」

「ああ。エルキドゥ、リエル、お前達2人で時間稼ぎをせよ。業腹だが、我も宝物庫の鍵を開けるとしよう」

「相変わらず無茶な命令……。もう慣れたけど」

既に戦闘態勢に入り、エルキドゥは大地に手を当てて真名を開放する。

『呼び起こすは星の息吹。人と共に歩もう、僕は。故に——』

エルキドゥ自身の体を一つの神造兵器と化す能力。

アラヤやガイアといった抑止力の力を流し込む光の楔となり、膨大なエネルギーを世界が認識できる形に変換して相手を貫く一撃の再現。

『人よ、神を繋ぎ止めよう!!』

天の鎖でガラランナを縛る。エルキドゥの天の鎖は神性を持つものによく効く。ガラランナは特性上、最強の神獣である以上、エルキドゥの天の鎖には逃れられない。

『私の声は世界を繋ぎ、私の世界は私という可能性の一つ——』

リエルが魔杖をグラガンナに向けて、巨大な魔法陣を組み上げる。込められた魔力量からそれは対軍宝具の域にある。

『^{アナザー・オブ・パビロン}私を繋ぐ世界の全て!!』

リエルの魔杖が真名を解放する。

そして次の瞬間、グガランナの周りに無数の魔法陣が浮かび上がる。それら全てから風の刃が飛び出して、グラガンナの胴体を切り裂いていく。

「ハアアアア!? 何よそれ!？」

イシユタルすら予想していなかっただろう。

リエルの魔杖『ユニバース・ワン白き世界の一つ星』。

その力は「ありとあらゆる世界や可能性に接続」する事だ。

それはつまり自分がこうしていたらというifの世界や、自分に起こり得た別の可能性。即ち並行世界だ。

リエルの魔杖は幾多の並行世界に接続し、自分がこの場所で「こうしていただろう」という「ありとあらゆる結果や過程を現実に引つ張り出す」と言う事が可能なのだ。

勿論、並行世界から大気中の魔力を取り出して持つてくる事や、今みたいにグラガナに「こういう攻撃を並行世界でしていた」と言う結果を引つ張り出して魔法陣を多数、しかも詠唱なしで出現させる事も可能だ。

これは魔術とリエルは称しているが、後世ではこう名付けられる。「並行世界の運営」、即ち第二魔法である。

「うわあ、流石リエル」

「と言つても全然効いてないわ。グガランナにとつて風の刃は切り傷程度にしかならな
いよ。」

——まあ、もう決着はついたんだけどね」

リエルが確信する。

ギルガメツシュが何故時間稼ぎをさせたのか、その意味はギルガメツシュが持ち得る

最大の攻撃の時間を稼ぐためにあったのだ。

『元素は混ざり』

それはリエルの『白き世界の一つ星』とは真逆の性質と言える力。
「全てに繋がる力」の逆は「全ての破壊」司る『乖離剣エア』を引き抜き、掲げるギルガ
メツシユの姿があつた。

「ついでに言っちゃえば王様に強化の魔術もかけたし」

「うん。案外呆気なかったね」

エルキドゥもこの瞬間、勝利を確信した。

リエルは地面に降りて、余波に巻き込まれないように結界を何重にも張る。最大級の宝具にリエルの支援、これで死ななかつたら逆に拍手を送りたいくらいだ。

『固まり』

かつて混沌とした世界から天地を分けた究極の一撃。それは神であろうが星であろうが切り裂く原初の地獄の再現。

『万象織りなす星を生む！』

天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかった原初の地獄そのもの。その道理であるならば、ギルガメツシユは『天の理』によって全てを開闢をもって切り裂く。

『死して拝せよ！』

混沌とした世界から天地を分けた『乖離剣エア』

ギルガメツシユはそれをグガランナに振り下ろした。

『天地乖離す開闢の星!!』

エアから放たれた原初の地獄はグガランナ相手に塵すら残さなかった。

その後、イシユタルを嘲笑う2人の姿とそれに苦笑いしながらも助ける気はないリエルの姿がそこにあつた。嵐は止み、暴風は消え、空が明けたように日が地上を照らす。暖かな空の日差しにリエルは笑いながら2人に抱きついた。

「王様、エル！ 今日飲もう！ シドウリさん達も明日くらいなら休日にするくらい許してくれそうだし！」

「フハハハ!! 良いぞ！ 今日最高に良い気分だ！ 我が蔵からとっておきを出してやろう!!」

「飲み比べと行くかい2人とも？」

「良かろう！」

「いやそれ絶対エルが勝つじゃん!？」

笑い合いながらウルクの城に帰る3人を見てイシユタルは血が滲むほど拳を握り締めた。そしてほくそ笑む。

神でさえ止められる術を知らない3人。この3人なら天上の神々さえ殺せる程、驚異である。と再認識させられたのだ。

これが後にどうなるか、まだ3人は知らなかった。

『地』は『天』と『人』に抱かれ空に消える

それは突然だった。

エルキドウが倒れた。

ギルガメツシユとリイエルと一緒に街を歩いていた時、突如エルキドウは電池が切れたかのように倒れたのだ。

エルキドウの容体は……最初に診察したリイエルが確信した。

それは『神の呪い』だ。

それも神にさえ通用するような高度な呪い。それは宮廷魔導師のリイエルでさえ解く事が出来ない程強く結びつかれた呪いだ。

それを知ったギルガメツシユは、すぐさま天界へと向かった。

エルキドウが倒れて三日後、ギルガメツシュがウルクへ帰還した。

……顔面蒼白な彼の顔を見て、悟ってしまったのだ。エルキドウが助からない事に嫌でも気付いてしまったのだ。

『森番フンババと聖牛グガラナを倒した三人のうち、誰かが死なねばならなかった』

エンリル神から伝えられたのは、それだけだったらしい。

フンババ討伐に協力したシャマシユ神は、グガラナを差し向けたイシュタルの画策によるものではないかと予想を口にしたそうだ。

『リイエル……貴様は出来る限りの事をせよ。我が宝物庫の全ての魔導書をウルクに置いておく。我は必ず……』

イシュタルを見つけてみせる。そう言ってギルガメツシュは執念を燃やしていた。

だが残念な事に結果は得られなかった。いつもなら週に一度は顔を見せるあの女神は、一週間が経つても現れはしなかった。

そして不幸が畳み掛けるように、外交関係も著しい悪化の一途を辿っていたのだ。前にリエルが言った通り一応、ウルクの土地神はイシュタルだ。

そのイシュタルが居なくなつた事により、ウルク自体が『神に見捨てられた国』と他の国がこちらを見下し、輸入や輸出に問題が発生していた。当然だ、神に加護された土地から神が消えるという事は土地自体が加護を失うようなものだ。

アレだけの偉業を成し遂げた三人は動けない。

ウルクの土地の輸出、輸入問題。

イシュタルの失踪による国力の低下。

ウルクは徐々に崩壊への道に足を踏み入れていた。

『アアア——！』

『ニンゲン!! ニンゲンのニクだアア!!』

『キサマ！ ニクタイヲモチナガラ！』

『コノチニアシヲフミイレタフケイ！』

リエルはシドゥリ達に仕事を任せて冥界に来ていた。

クタの地面を魔術で掘り進め、魔杖を持ちながら冥界に足を踏み入れた。しかし居たのは死霊やらクタで死んだ戦士の死骸。

「私があるのは貴方達じゃない。だから退いて」

リエルの忠告を無視して死霊達は襲いかかる。

「……もう一度言うわ。退・け」

力の入った怒気だけでクタの死霊達がリエルの前から消えていた。それにため息をつきながらも冥界の奥に進むリエル。

「……エル、待っていてね」

7つの門を潜り抜けて、襲いかかる死霊は跳ね除けてリィエルは遂に冥界の最深部まで到達した。

「……精霊の反応があつて来てみればこんな場所に何のようかしら？」

冥府の女主人エレシユキガル

この冥界を統べる女神の石柱であり、あらゆる『死』について詳しい存在である。イシユタルとは違い、勤勉でしっかりした女神だ。

だが、その前に一つだけ冥府の女神の言葉に引っかかった。

「精霊？ 私、精霊なんて引き連れてないですよ？」

「違うのだけ。貴女よ貴女。貴女の半分から精霊の血を感じるのだけ」

「精霊の血？ ……じゃあ私は『半精霊』デミ、スピリットと言う事ですか？」

「知らなかったのかしら？ まあいいわ。要件は何なのかしら？ わざわざ冥界に足を

踏み入れるなんて何かあったんでしょ？」

冥府の女神としての彼女は『死』という存在を多数見て来た筈だ。その中には神の呪いで死んだ人間もいる筈だ。だから、リィエルは冥界に赴いた。生者は冥界の法に縛れない。なら、無理矢理権能を使う事はないだろう。

「エルが……天の鎖にして神々が生み出した神造兵器エルキドウが、神々の傲慢によって今、呪われているのです」

「……………」

「画策をしたのはイシユタル神であり、自由気ままなああ女神は我が王、ギルガメツシユの財を狙い求婚を申し出ました」

「ああ女神……本当に自由奔放なのだわ」

エレシユキガルでさえ呆れている。

イシユタルとエレシユキガルは天と地、即ち表裏一体とも言える存在だ。イシユタルが天の女主人ならエレシユキガルは地の女主人、性格すら反対なエレシユキガルはイシユタルに呆れて物も言えない。

「しかし、王はその求婚を断り、それに激怒したイシュタル神は『天グラガンナの牡牛』を引き連れウルクを襲いました。我が王とエルキドゥ、そして私の三人で撃退しましたが、憎しみに囚われたイシュタル神は遂に『神の呪い』を使い、エルキドゥを呪ったのです」

「……事の顛末は分かっていたわ。大体イシュタルが悪い事も、要するに私への頼みはエルキドゥの呪いを解けないかと言う事かしら」

「はい」

「無理よ」

皮肉にもエレシユキガルは即答した。

「対価も無いし、神の呪いは私一柱で解けるものではないわ」

「……私が対価としてなら？」

リエルは自分の身体に手を当てる。

『星の巫女』と称される自分はどうやら精霊に近い存在だ。精霊ともなれば貴重な存在だ。自分の死後売り払う事を対価とするなら、対等な条件にはなる筈だと思ってい

た。

けれどエレシユキガルはそうじゃないと告げた。

「……確かに貴女にはそれだけの価値はあるかもしれないのだわ。けど、それでも無理なの。『神の呪い』は神にさえ通用する呪い、一度かけてしまえば『死』は免れない」

ガラガラと何かが崩れる音がした。

既に魔術を全て理解しているリエルにとって、リエルでは『神の呪い』は解けないと知っていた。

だから神に頼った。その神様でさえお手上げの状態だ。それは余りにも辛い現実だった。

エルキドウは助からない。

それが決まってしまったのだ。

「まあ、私に出来る範囲でなら何とかはしてあげるけど、エルキドウの呪いを解く事は不可……って貴女！ 泣いてるのかわ!？」

「えっ……?」

ポロポロと涙が溢れ落ちていた。

止まらない。止められない。辛い現実を認識してしまったリエルからポタポタと目から雫が落ちていく。

「あ……あ……あ……」

視界が揺れる。

自分の立つ地面さえ分からなくなる程、見えなくなっていく。光が閉ざされていく。魔杖は既に手から離されていた。ガシヤンと言う音さえ彼女には聞こえない。

「……ああ……あ、あ、あ、!!」

嗚咽は、慟哭に変わった。

惨めに泣き叫び、のたうち回り、腕を地面に叩きつける。

何故自分ではなかったのだろうか。何故自分はこんなにも無力なのだろう。何が宮廷魔導師だ。何が『星の巫女』だ。

随分とエルは変わってしまった。緑色で艶やかな髪は傷んで、身体にヒビが入ってしまった。千里眼の無いリエルでさえ、いつエルが死ぬのか分かってしまったのだ。

もう……後、数時間の命だ。

「随分……無茶をしたようだね……人の身で冥界降りなんて……僕も驚きだよ」

「エル……けど私は……私は貴方を救う事が出来ない」

「なんとなくだけでも……分かってたよ。『神の呪い』は強力だ。いくら精霊の半身を持つ……君でも無理難題だ」

涙が溢れそうになった。

アレだけ泣いたと言うのに涙は枯れる事を知らないようだ。エルキドウは知っていたのに少し驚いた。

「……エルは私が精霊の半身である事を知っていたの？」

「僕は大地から……生まれた存在さ。なら……知らない訳がないじゃないか。ギルも……それを知っていたようだけど、口には出さなかった。自分が人ならざる者と知った

ら……リイエルが悲しむんじゃないかって」

「……そんな訳ないでしょ。私は、私なんだから」

「ハハハ……確かに、リイエルはそう言う……人間だからね」

力無く笑うエルキドウにリイエルは優しく手を握る。リイエルはある事を決意し、そしてエルキドウに最後の我儘を口にした。

「エル、最後までもいい。空を見に行こう」

「……ゴメンよ。僕はもう……動く事すら出来ないんだ」

「私が連れてく。……お願い」

「……分かったよ」

リイエルはエルキドウの身体から重力を無くして、エルキドウを抱えたままウルクの夜の空へ飛び始めた。

「エル……見える?」

「ああ……満天の星空だね」

空中にいながらも優しく抱えているリエルがエルキドウに見せたかったのは、この星空だけではない。エルキドウはもう少して死んでしまう。お別れを言わなければならぬ。

けど、一人で死ぬのは寂しい。

寂しいから私達が見届ける。

「エル、見ててね」

リエルが魔杖を振ると、辺り一面が優しい光に包まれていく。ウルクの街が照らされて幻想的な世界を映し出していた。その光は蠟燭のように弱く、蛍のように優しく光る癒しの光。

リエルが宮廷魔導師になった時に最初に覚えた魔術だ。

「ハハハ……綺麗だ。世界が照らされて……見えるみたいだ」

「エル、下を見てごらん」

エルキドウの視線が下に向く。

そこには深夜にも関わらず、ウルクの民達が集まってリイエル達を見届けていた。

「なんでこんなに……もう全員寝ている時間じゃ……」

「私が呼んだのよ。エル、貴方の為にこんなにも人が集まってくれたの」

リイエルの魔杖の力でウルクの民全員と意識を繋げてエルキドウの最後を見届けて欲しいとリイエルは願ったのだ。寂しくないよ、とエルキドウに言いたかったのだ。

神の兵器に『心』はなかった。

何故なら兵器と人間は分かり合えない存在だと、経験した記憶からずっと決め付けていた。

——違ったのだ。

分かり合えないと思ったのは自分自身、人間と分かり合える訳が無い道理など存在しなかったのだ。

「僕は……………」

エルキドウの目からは涙が溢れていた。

やっと気付く事が出来た。これが『心』なんだと、気付く事が出来たのだ。

そして手にした『心』がそれを理解した。

民全員が集まる理由は自分には無いと思っていた。

「……………そっか……………僕は……………愛されていたんだね……………兵器である僕を……………愛してくれる人が居たんだね……………」

「……………当たり前じゃない。私も、王様も、ウルクの民全員が貴方の事を好きでいたの。だからね、エル……………寂しくなんかないよ。私も王様も、決して1人ではない。だからエルも、寂しいと思わないで……………私達がここに居るから……………」

リエルの手が暖かく感じた。

なのに、徐々に自分の身体に罅が入っていく。現実是非情だ。やっと手にした『心』すら、気づいてしまったのは死ぬ前のほんの僅かなのだから。

「……………うん……………リイエル……………」

エルキドウの手は震えていた。

それは、恐怖だった。兵器として『心』がないエルキドウに感じる事が出来なかった生の渴望。死にたくない。死ぬ事がこんなにも怖いと感じてしまうのだ。

「……………死にたくない」

「うん……………」

どうしても本当の気持ちが出来ないでいた。

隠してしまえば、口に出さなければ潔く死ぬ事が出来たかもしれない。それでもエルキドウは本音を隠せなかった。

「死にたくない……………！もつと、ギルと、リイエルと、みんなと一緒に生きていたい……………！もつと……………もつと笑って……………！3人で……………笑い合いながら……………！もつと、生きていたいよ……………！」

生にしがみつくと事の浅ましさがエルキドウの人間としての『心』からの本音だった。まだ3人で笑い合っていたい、終わりなんて来て欲しくなかった。涙が溢れて止まらない。この苦しみさえ人間と自覚させてしまう。

その涙を掬い取って、リエルの反対側からエルキドウを抱える。

「私も……同じだ。友よ」

そこに居たのはエルキドウの最初の1人の友、ギルガメツシュだった。

ギルガメツシュはエビス山の周辺を探していた所をリエルの魔杖の繋げる力によつて、この場所に繋げて転移させていたのだ。

「私も……私もだよ。エル……！」

リエルも泣きながら口にした。

ずっと一緒に笑い合っていたい。それはリエルもギルガメツシュも、ウルクの民達も全員が望む事だ。

だが、エルキドウの身体はヒビ割れて腕は既に風化してしまっている。

「エルキドゥ、お前は1人ではない。私も1人になる事はない。貴様は我が生涯で最初の友であるのだからな。いずれ遠い未来で、また会おう友よ」

それを優しく、そして辛くないようにギルガメッシュは約束をした。

「エル、私達は貴方を愛してる。だから、だからね……！　いつかまた、明日を見に行こう……！」

リエルはいつまでも忘れないように明日をまた生きる事を約束した。

2人は最後まで笑顔で居た。涙に濡れて酷い顔でも構わない。それでも笑って友を送り出したかったのだ。

2人が口にした遠い未来の約束。

人と共に歩む未来の話だ。それはエルキドゥを縛る新しい鎖であり、エルキドゥが望むいつかの未来の話だ。

「……………あつ……………」

リエルもギルガメッシュも忘れない。

「……………そうだね……………僕も……………忘れない……………」

私達にはこんな友達が居たんだよ、と笑って未来で誰かに語れるような。そんな未来の約束を自分は忘れないでいよう。

「……………ギル……………リエル……………ありがとう……………僕も……………2人……………を忘れない……………大好き……………だよ」

最後に人間らしい笑顔で笑った。悲しまないように、忘れないように、笑い合ったあ

の頃をずっと大切に……未来に繋いで行こう。

だから……これは寂しいんじゃない。

未来でまた逢える事の嬉しさだ。

エルキドウの身体は崩れて、土に還っていった。

風化した土は風に運ばれてウルクの街に落ちる事はなかった。

2人の腕にいたエルキドウはもういない。

感じていた僅かながらの重みと暖かさが消えていった。

「……リイエル……」

ギルガメツシュはリイエルを抱き締めた。

力強く抱き締めた、リイエルの有無など気にする事も出来ないまま、それでも抱き締めた。

「……王……様……」

「少しでいい……こうさせてくれ……頼む」

ギルガメツシュが初めて見せた弱みにリイエルも涙を流してギルガメツシュと同じく泣き叫んでいた。

エルキドウは死んだ。死んでしまったのだ。

その温度を忘れないように抱き締めて守ろうとするギルガメツシュと、友を失った悲しみに泣いているリイエルは王様の背中に手を回して抱きしめた。

「……リイエル……」

「……なに……王様……」

抱き締めたまま、ギルガメツシュは口にした。

「貴様は、貴様だけは……我を置いて死ぬな」

ギルガメツシュの唯一はリエルだけになってしまった。エルキドゥはもう居ない。ただ、3人で笑い合っていた事を忘れないように生きていく。ただそれでも同じ思いはしたくない。

だから……ギルガメツシュは口にした。

「約束するよ……ギルガメツシュ」

リエルは初めて、王様と呼ぶ事を止めた。

約束した。決してギルガメツシュを置いて死なないと、リエルがギルガメツシュと

共にあり続ける事を約束した。

『天』は不死を求め、『人』は国を背に戦う

エルキドウが死んでから数日が経った。

『我は旅に出る。我が友であるエルキドウと同じ死に怯えて生きるのだろうか。我はそれを望まない』

『……そう……永遠を望むのね』

『ああ、我は必ず不死の草を持って帰ってくる。リエル、貴様も来るか？』

リエルは首を横に振った。

『……ううん、私は残るよ。この国の宮廷魔導師だし、この国を守る責任が私にはあるから』

『……貴様は止めないのか？ 我の旅を』

『今回は許すわ。私も同じだもの、ただエルが愛し、貴方が王である故郷を放っておいては行けないわ』

『……そうか』

ギルガメツシユはリエルに3つの宝剣とギルガメツシユの財の中でも特別な物を渡した。渡されたリエルは驚愕していたが、ギルガメツシユはこう言った。

『いくら貴様とて1人では限界があろう。だからこれは私の旅路の間、貴様に使用する事を許す。宝剣は結界の触媒にも何でも使え』

リエルなら任せられる。

ギルガメツシユは恐らく、リエルの分も持つてくるつもりだろう。リエルは去りゆくギルガメツシユの背中を見つめながら最後の別れを口にした。

『……ギルガメツシユ』

『……?』

『必ず、帰って来なさい。私も、置いてかれるなんて許さないから』

『……戯け、死なぬわ』

旅路は三年だ。三年で必ず戻ってくる。

そう告げてギルガメッシュはウルクの街を去っていった。

「……………うっ」

目を覚ますと知っている天上があつた。傍らには涙を流しながらリエルが目覚めたのを喜ぶシドウリが居た。どうやら気を失っていたようだ。おかげで旅路のギルガメッシュの背中が見えた気がした。

「リエル様！ 目覚めたのですね……………！」

「…………シドウリさん、私どれくらい気を失ってました」

「丸2日です。ああ立ち上がらないで！ 今は夜遅くですし…………民達や文官の人達も眠っている時間帯です」

リエルがやっていた事はルーン魔術による作物の安定化だ。大地自身にリエル

の魔杖を繋げて、エルキドウの『民の叡智』エイジ・オブ・パピロンを再現に成功した。

リエルの原初のルーンを巨大な一つの文字として書き記し、その土地に癒しの力を分け与える事で作物の生産の安定化をしてきた。

並行世界に繋がれば魔力は無限にあるリエルなら可能な話なのだが、リエルも精霊の血を宿していても人の身では負担が大きい。

魔術回路が休みを取らずに働いて、その上、魔獣避けの結界を宝剣を触媒にして張り巡らせ、更に仮としての王の責務にいよいよリエルが倒れたのだ。

「……2日か……ごめんシドウリさん」

「謝る事ではありません。王が不在の中、私達を支えてくれているのはリエル様なのですから」

「……あと……何ヶ月後だっけ」

「8ヶ月と3日です。ギルガメツシユ王が帰ってくるのは」

既に二年と四か月が経過した。

ウルクの街は土地神のイシュタルが居なくなつた事により、作物問題や輸入、輸出に問題が多発する。王が居る事をリエルの幻術で誤魔化せては居るが、バレルのは時間

の問題だ。

ギルガメツシュが帰ってくる前に攻められたらウルク全体の兵を集めても5桁が精一杯だ。対して他国は6か7桁、いくら対集団戦に魔術を惜しみなく使えるリイエルでさえ勝てない可能性がある。

「シドウリさん……こんな時間まで私を看病してくれてたんですね。大丈夫なのですか？ 寝た方がいいですよ」

「大丈夫です。このくらい自由だった時の王に比べれば軽いものです」

「……シドウリさん。入ってください、今日だけでいいので一緒に寝ましょう」

「そんな、恐れ多い……」

「私が許してるんですから、それにシドウリさんに倒れてもらっても困りますから」

リイエルは掛けでいた毛布を広げ、シドウリを招く。

シドウリは恐る恐る毛布に入った。その瞬間、リイエルはシドウリに癒しと眠りの魔術をかけて眠らせていた。

「……実はもの凄い疲れてるのに、私の為にありがとうございます」

リエルは布団をシドウリに掛けて、魔杖を持ち文官達が働いている所に向かった。今は文官達も眠っている。それは嘘だ。単にリエルを休ませる為の嘘なのは分かっていた。

2日休んだ分の遅れを取り戻さないと、とリエルは再びウルク全体に結界を張り始めた。

4ヶ月が経過した。

ウルクでは、免れる事の出来ない他国からの宣戦布告を受けた。

国内での不作、外国から全く物が入ってこなくなったことが宣戦布告の合図だった。土地や作物はリエルの力でどうにか出来ても外国に関しては全く別問題だ。

……無論、ウルクの周辺国が敵に回ったことが原因だ。周辺国のいくつかではない。周辺国が全て、それも連合を組んで、ウルクに戦争を持ちかけた。

リエルが1番恐れていた事態だ。幻術や催眠による傀儡の魔術である程度の事はしていたのだが、とうとうそれが解けてしまったらしい。

こちらがいくら拒否しようと、『神から見捨てられた』とされるウルクの土地を擁護する国などあるわけがない。開幕の火蓋が切つて落とされたのは、当然の流れと言えた。

リエルは周辺国の近くに地雷の魔術を掛ける事でどうにか戦況を慎重に行動させる事が出来たが、それでも20万は下らない兵士がウルクに襲い掛かるのは時間の問題だった。

戦況は……当然ながら、ウルクの圧倒的不利だった。

こちらの持つ兵力は5桁、リエルの強化をした所で焼け石に水だ。数で圧倒されれば是非もあるまい。どの道以前不利なのに変わりないのだ。

「防衛戦……それで行くしかないわ」

リエルはウルク全体に巨大な外壁を二重に作り、兵達をそこに配置させた。リエルについては空から遊撃、全体の指揮はこの国の一番兵に任せた。リエルは軍師ではないし、恐らくウルクへの被害を最小限にする為にウルクから遠い場所から待ち構える事になるだろう。

「まあ、とっておきをあれだけ作ったから、恐らくは問題ないと思うけど……」

魔道具生成で兵士一人一人にこの時代では珍しい手榴弾のようなもの渡した。近づかれたら迷わず投げるように指示し、周辺国に対する威嚇にもなる。十全な準備は整えたつもりだ。

「……準備はできた」

リエルは一人。戦場となるだろう平原で、敵を待ち構えていた。

避難やら住民への説明やらに追われる文官達。

兵達を前線には上げられない。魔獣避けの結果は一度解除しなくてはならないからだ。ウルクに張った防衛戦用の外壁がある以上、無駄に魔力を消費できない。

戦闘力と呼べるものはリエル以外には人を襲う魔獣のみ。

だから、巻き込ませるのだ。故に防衛戦。魔獣は見境なく攻めてくるなら、両者を巻き込んで戦局を掻き乱そう。

この戦争に絶対に勝つ、そして……

「私達が愛した国を渡さない」

ギルガメッシュ、エルキドゥ、力を貸してね。

魔杖を強く握り、リエルは戦場へ向かった。

目の前には、人の海。大凡見果てぬ人の塊。向こうも焦れてきたのだろう、最大規模の戦力だった。人の波がウルクを襲えば、一溜りもないだろう。

数の暴力とはよく言ったもの、ウルクを取り囲んでもまだ余りありそうな戦力が、リエルの前には立っていた。数は黙示しただけで予想より遥か上の40万はいるだろう。

勝鬨のような雄叫びが鼓膜をビリビリと震えさせた。リエルはそれに臆す事なく、空に浮かんでいた。こんなもの、ギルガメッシュやエルキドゥの性能の競い合いに比べ

れば恐れるものなどなかった。何だか笑ってしまいそうだ。

進軍を続ける隊が、ピタリとある一点で止まった。

太陽を背に浮かんでいるリイエルの姿を見つけたのだ。

それを見た兵達は嘲り、憐憫、同情、怒り。舐められていると思っただろう。だが、数少ない兵士にはこう見えたのだ。

まるで、神の化身であると。

「私の名はリイエル。ウルクの宮廷魔導師にしてウルクを護る『星の巫女』。お前達を冥界へ送る女の名前だ。覚えておくがいい!!」

リイエルは魔杖を軍全体に向けた。

もう詠唱など要らない。対集団戦に於いて、リイエルの右に出るものはあの2人以外存在しないだろう。

そしてこれが、開戦の狼煙を上げるのだ。

出し惜しみなど、する訳ない。

『アナーザー・オブ・パビロン
私を繋ぐ世界の全て!!』

フンババの時に使用したりリエルの切り札。

空に浮かぶ無数の魔法陣から、流星群にも等しい攻撃が軍に襲い掛かる。それも雨のように降り注ぐ為、避ける事など無理な話だ。

「ぐあああああつ!!?」

「ほ、砲撃だ!! 全軍退避!!」

「ぐがあああああ!?! 腕が……! 腕がああああ!!」

戦場は阿鼻叫喚、地獄絵図である。光が肉体を貫き、風の刃が肉体切り裂き、炎の海が大地もろとも焼き焦がした。

今ので、20分の1くらいは削れたであろう。

今のは初手の奇襲だ。次はそうはいかないだろう。

打ってくる弓矢は自分の周りに張った結界で防ぎ、リエルは一方的に攻撃を続ける。

「接^{セツ}続^ト完了!」

魔杖から大量の魔力を引っ張り出してリエルは3万の群勢の周りに結界を張り、閉じ込める。

「な、なんだ!?!」

「閉じ込められました!!」

「今すぐ結界を破壊しろ!!」

兵達が結界に攻撃しても、びくともしない。

リエルは結界を徐々に狭めて、兵士達を圧殺する。それはまるで巨大なプレス機のように、囲まれた兵士達に逃げる術などない。リエル以上の魔術が使える人間はこの時代には存在しないからだ。

「あ………があ………!」

「あびやびや——あ」

「あが、あぎゆ、ごふ」

「あびや——た、たす、たすけ」

グチャ、と結界の中が見えないほどの血みどろと圧殺された兵士達の肉塊が転がっていた。唾然とする兵士達、リエルがまるで悪魔のように見えていた。

「うっ……ぶ」

吐き気がする。血みどろの戦場に潰した兵士の肉の感触が結界越しに伝わってきた。リエルは戦場に出るのに向いていないと自覚する。対集団戦に於いてリエルは最強の力を持っているが、リエル自身が人を殺すのに躊躇があったからだ。

リエル自身の優しさがそれを阻害する。だが、侵略されればもつと多くの人間が死んでいく。心を鬼にしてそれを無視し、さらに爆破範囲の広いルーンで人を殺していく。

(殺している……私が彼らを殺してる)

相手は血も涙もない侵略者だ。少しでも慈悲を残せば、逆にこちらが滅ぼされる可能性だつてある。それでも、それでも何の為に戦うのかの意義すら忘れてしまふような程、戦場は血に染まっていた。リエルは血が滲むほど魔杖を握りしめながら、次の術式を作り上げた。

兵が半数以上減つてから、リエルに異変があつた。

「ゴホツ……！　ハア……ハア……！」

リエルが吐血し出したのだ。

魔杖から魔力を引つ張り出して自身の魔力として術式を作り上げていたリエルだったが、魔術回路の酷使による身体への負担がいよいよ限界に近づいていた。魔獣寄せの魔術を使ってから身体から途方もない疲労感に襲われ、いよいよ空中に浮遊することさえ維持できなくなっていた。

「くっ……!」

既に戦闘開始から一時間が経過していた。

敵兵からしたら勝機だ。すぐ様兵達を突撃させる。

「つつ……はあああああつ!!」

リエルに向けて剣が、槍が、槌が、振り下ろされる。それらの衝撃をある程度の障壁魔術で躲しながら、魔杖を一つの黄金の長剣へと姿を変えて周囲にいた十数名を吹き飛ばした。

リエルの魔杖が並行世界から結果のみを引き摺り出すなら、「もしかしたら、リエルがこの剣を持っていた可能性」に接続し、その世界のリエルから戦い方、戦闘経験の起源すら譲り受けた。

「私が白兵戦が弱いといつ錯覚した!!」

魔力を回すだけで身体が軋む感覚に襲われる。だが、リエルは『強化』の魔術で戦

場を駆け抜け、黄金の長剣でなぎ払い、切り開く。

「くっ………！！ はあああああ！！」

障壁の対応が遅れて、矢や剣が身体に刺されるが、リエルはそれを意にも返さない。エルキドウとの性能比べの方がもつと痛かった。ギルガメツシユの剣技の方がまだ重かった。自分は断じてこの程度の傷で倒れる程柔ではない。

「ゴホツ………！ ハア………ハア………！ まだまだあ！！」

血を吐きながらも、限界だと知りながらもリエルは剣を振るう。魔力の生成も強化も身体が拒絶する程の痛みに気を失いそうになる。それでも剣を振るい、気づけばリエルは1000という屍の山を積み上げた。

「リエル様！！」

「つつ!? 貴方達………！ 防衛戦の筈では!!」

「戦力を半分割いて参りました。リエル様の奮闘により、兵士達にも勝機が見えたと

思い、我等五千の兵士が貴方に加勢しに来ました！」

馬鹿じゃないの、と罵る力もない。防衛に徹すれば死ぬ可能性は存分に減るというのに、私の為にわざわざ加勢してきてくれた事に文句すら言えない。それでも力を貸してくれたのは、私を信じてくれるからだろう

「……………分かったわ。……………つつ、『接続開始』!!」

リエルは身体が悲鳴を上げながらも、兵士全員に繋げて身体強化のルーンをかけた。かなり大量の血を吐いたが、今、気にする事ではない。

気を失いそうな激痛に身体を蝕まれながらもリエルは立ち上がり、兵士達の指揮を上げた。

「全員、生きて帰りなさい!!後方支援はこの『星の巫女』たるリエルが引き受けるわ!!今此処にウルクの民は健在であると!!ウルクの兵士としての意地を存分に発揮しなさい!!」

その怒号のような指揮に全員が雄叫びを上げる。

これが最後の戦いになるだろう。兵士は10万程度とは言え此方より数が多い。ただ、ウルクの民は此処に健在だと。あの王は必ず言った筈だ。

リエルは軋む身体に耐えながら、兵士達の後方支援として魔術を使い続けた。血を吐きながら、激痛に駆られながら、それでもリエルは最後まで立ち続けた。

「ハア……ハア……ハア……」

ウルクの兵士は三桁になった。

だが、最後の敵兵をリエルが斬り殺し、敵兵の全てを殲滅した。

勝ったのだ。この戦い、ウルクが勝利したのだ。

「……終わった……これで……私達の国は……」

全員が喜びに満ち溢れた。

アレだけの絶望を覆したのだ。ギルガメツシュ、エルキドウがいない中、リエルの力で国を守り抜いたのだ。最早戦場に血に汚れていない場所などないくらいの過酷な戦場を生き延びたのだ。

「……守り抜いたよ……エル、ギルガメツシュ」

安堵しながら、魔杖に身体を支えながら天を見上げた。

パチパチパチ

そこに水を差す拍手が聞こえた。

ウルクの兵士達はその方向を見る。青い巨大な弓に乗って、悠然と座りながら見下ろす女神が1人、そこにはいた。忘れはしない。エルキドウを殺した神の1柱。

「この場合、お疲れ様とでも言えばいいのかしら？　ウルクの人間達」

「イシユタル……!!」

「もう様は付けないのね。不敬だわ」

「エルキドゥを殺し、ウルクを滅ぼそうとした頭のイカれた神に今更敬語使わなければいけない方が頭イカれてるわ。今更貴女が捨てたこの地に何の用かしら？」

イシュタルは鼻で笑いながら口にした。

リイエルはイシュタルを目に移した瞬間、激昂し魔力が溢れ出た。自分の身体の痛みなど知った事ではない。エルキドゥを殺した張本人だ。今すぐに殺したいくらい憎んでいた。

「当然、ウルクを滅ぼしに来たのよ」

「はっ……幾ら神とは言え所詮一柱、私一人で十分。恐れるに足りないわ」

地上において神の法や権能が使えない中で、神一柱などリイエルには及ばない。イシュタルは戦と美の神であるが、エルキドゥやギルガメッシュと対等に張り合ったリイエルには及ばないだろう。

身体に負担が大きいが、自分が倒れる前にイシュタルを殺す自信がある。最悪、相打ちに出来るくらいの余裕がリイエルにはまだあった。

「ああ、安心しなさい。戦うのは私一人じゃないわ」

だがイシユタルはそれを否定した。

イシユタルは笑いながらリエルを見下していた。

「まだ気付かないのかしら。今、この場所で一匹たりとも魔獣が現れない事に」

「つつ!! まさか……!」

リエルは感知の結界でウルクを見渡す。身体の痛みなど気にしている暇などなかった。思わず目を見開いた。

外壁に魔獣が押し寄せてくる。まるでそれは狙いが定まったかのような動きにリエルは少なからず焦りが生まれる。今のウルクの兵士達は五千、今攻められたら守り切れないし、陣形が崩れたら更に崩壊していく。

魔獣を押し寄せない為に魔獣避けの結界を張ったが意味すらない。まるで何か統一性があるような動きにリエルはイシユタルに叫んだ。

「イシユタル!! 貴女一体何をしたあ!!」

「三女神達が誰がウルルクを滅ぼすか競い合っているのよ。まあ、私も貴女を殺す為になざわざ天界からエンリル神に許可を貰って持ってきたわけだけど」

「なにつ!? つつ……!!」

空が曇っていく。一瞬にして空は曇天に変わり、風が吹き飛ばさんとはかりに吹き荒れた。そして雨が降り戦場の爪痕を濡らし、血の海がまるで地獄を連想させる。

これは忘れもしない2年前の……

「絶望なさい。地を這う虫ケラが如何に群れようと天に届かない事をた一つぶり教えてあげるわ」

嫌な笑みを浮かべ、イシユタルが更に上に飛ぶ。

雷が轟く。風が吹き荒れて立つ事すらままならない。

曇天から現れたのは黄金の蹄、身体が、足が、胴が、頭が、全て黄金のような巨大な牛。

それは忘れもしない2年前に三人で討伐した……

「…………嘘でしょ…………」

それは史実には書かれていない存在。

二体目の『天の牡牛』がリエル達の前に絶望を与えに現れたのだ。

『人』は神の時代を終わらせ『天』は空を仰ぎ見る

『天の牡牛』
グガラナ

それは神々でさえ従わせる事の出来ない聖獣であり、時にイシユタルが厳しく躡れば、従わせる事が出来る神の暴獣。シユメル神話において、天災の魔獣であり、天界の聖獣である。

だが、それは三人で塵すら残さずに殺した筈だ。天界に二体目が居るなんてリエルは予想だにしていなかった。

「二体目のグガラナですって……!?!」

「蹴散らさない!!」

「つつ!!」

リエルはウルクの兵士、そしてウルクの街全体に強固な結界を張った。グガラナの豪雷や嵐と言う天変地異を引き起こしながらも進む暴獣。リエルの結界でも防ぎ切れずに兵士達は吹き飛ばされる。

「マァンナ!! 放て!!」

「っ……!!? (兵士達を……!!?)」

イシユタルが放つ矢は明らかにリエルではなく兵士達に向いていた。リエルは一瞬にして兵士全員に物理保護の魔術をかける。しかし、次の瞬間、ドクンツ!! と心臓の音が頭に響く程巨大な音に聞こえるくらいに揺さぶられた。

「かはっ……!!… あ……!!… ゴホツ……ゴホツ……!!」

リエルは大量の血を吐き出した。

身体からどれ程の血を吐いたのだろう。どれ程の魔力を使っただろう。身体は激痛に駆られ、目を瞑れば永眠してしまいそうだ。

「それが貴女の弱点よ。リエル」

「……弱……点?」

「貴女は精霊に愛され、半身として生まれた受肉精霊よ。けど、それ故に民を愛し、自分

の残り少ない力でさえ弱き民達を護るために無茶をする。その甘きこそ、貴女の最大の弱点なのよ」

イシユタルの言う通りだった。

後ろにいる兵士達がリエルの足枷となっている。それどころか既に限界のリエルに無理をさせてまで結界を張らせている。そうしなければ死んでもおかしくないからだ。

リエルの優しさを潰け込んだ最悪の一手は、イシユタルにとって最高の攻撃となつてしまっている。

どうしようもない。逃げようとしてもイシユタルはウルクの兵士達を狙い、リエルはそれを守るために無理をするだろう。

リエルは意を覚悟して兵士達に告げた。

「……貴方達、撤退しなさい」

それは、リエルの口から一番聞きたくない言葉だ。リエルを残して自分達は戦場から去る。リエルはとづくに限界だ。それを見殺しにして自分達の我が身可愛

さに逃げるしかない。当然兵士達は困惑する。

「リイエル様！　しかし……！」

「こんな事言うのは悪いけど、イシュタルの言う通り、貴方達は弱い。貴方達が束になつてもグガランナはおろか、イシュタルにさえ歯が立たない」

それは余りにも現実的で、正論だった。

イシュタルは曲がりなりにも豊穡と美、そして戦の神なのだ。グガランナは人の力で勝てる領域ではないし、神であるイシュタルに真つ向から挑んでも潰されるのが目に見えている。

「——今、私の事を思って動いてくれるなら、お願い」

リイエルはウルクの街と今ここに立っている戦場を繋げてワープゲートのようなものを作つた。走れば数秒で全員が撤退できる程の大きさで。

「——行って!!　早く!!」

その怒号にウルクの兵士は血が滲むほど唇を噛みしめながらも決断した。そのワーブゲートさえリエルの身体に激痛が走るくらいだ。結界を張る余裕など当然ない。

「つつ!! 撤退だ! 撤退せよ!!」

ウルクの兵士達はワーブゲートに飛び込むように潜り抜けた。

イシュタルのマアンナが光の矢を撃つが、リエルが魔杖を黄金の長剣に変えて、兵士達に当たる矢全てを切り裂いた。

マアンナの矢を全て切り裂いた頃には既にウルクの兵士達の撤退が完了していた。

「……チツ、逃げられたか。まあいいわ」

イシュタルの目的はウルクを滅ぼす事だ。リエルさえ死ねばギルガメツシユの居ないウルクの均衡は破綻する。魔獣達が押し寄せるし、グガランナは未だ健在。

「(……耳が……聞こえなくなっただけかな……)」

リエル自身、豪雷の掠れた音しか拾えなくなっていた。風やイシュタルの声も最早リエルに届かない。

「ハア……ハア……!! つ……! ハアアアア!!」

リエルは魔杖を黄金の長剣に変えたまま、自身に飛行の魔術をかけて、イシュタルを狙う。グガランナはあくまでイシュタルの手によって管理されている状態だ。

ならイシュタルさえ死ねばグガランナは暴走する。暴走した後は他国にでも転移させて時間を稼げばまだ勝機はある。

「甘いわね。私を狙う気持ちはわかるけど、そんな悠長に攻撃させると思う?」

グガランナが脚を上げた。

2年前は脚を上げる事さえなかったが、その脅威はギルガメッシュが口にしていた。踏めば豪雷、豪嵐、そして隕石に匹敵する衝撃波。

「つつ!!」

リエルは瞬間的に結界を張ったが遅かった。
かろうじて拾っていた音さえ、リエルから消えた。

バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン
!!!!!!!!!!

「キャツ!?!」

「な、なんだ!?! この揺れは!!」

避難していたウルクの民達でさえ聞こえた大きな轟音に、巨大な地震。正直な話、リエルが張った結界さえなければウルクはこの地震でさえ壊滅的な被害を及ぼしていただろう。

「た、大変だ!!」

「どうした!？」

「ウルクの兵士達が帰ってきたんだ!! さつき突然空間が歪んだと思ったら、そこからリエル様を助けに行っていた兵士達がいきなり現れたんだ!!」

「じゃあ! 戦争には勝つたのか!!」

「いや!! まだリエル様が、イシユタル様が連れたグガラナに1人で立ち向かってる!!」

「何!？」

そして、それは突然だった。

パリンツ!! と硝子が割れたような音がウルクに響き渡る。それは、ウルク全体を守っていたリエルの結界が消えたと言う事だ。

そしてその理由は二つある。

今の地震に結界が耐えれなくなったか。

リエル自身に何かあったのか。

又はその両方か。

「シドウリさん!!」

「離してください!! まだ……! まだ戦場にリエル様が……!」

「貴女一人が言ったところで何になると言うのですか!! リエル様を困らせるだけです!! イシュタル様は我らを躊躇なく狙ってきたのです!! 貴女が行っても足手まといにしかありません!!」

「つつ!!」

結果が割れてから、リエル自身が生きているのかさえわからない。だが、今行った所でリエルの邪魔にしなければならない。戻ってきた兵士達が必死にシドゥリを止めた。

「リエル様……!!」

砂煙で随分と周りが見えない。

リエルがかるうじて張った結果は砕けてリエルは吹き飛ばされたのは目に見えたが、砂煙で辺りが全く見えないのだ。イシュタルはマアンナの矢でここら一帯を吹き飛ばそうと考えたその時、突如イシュタルの目の前に宝石が現れた。

カツ!! と割れた宝石から閃光が出た。

イシュタルの弱点である宝石に一瞬でも目が眩んだせい、その閃光をモロに見たイシュタルは目を抑えていた。

「あああつつ!? 目が……!!」

今の一撃で左腕と片目を失った。

頭から血が出て銀色の髪は血に染まり赤くなっている程だ。だが、まだリエルは倒れなかった。この一瞬、この一瞬を狙って右手に持つ黄金の長剣でイシュタルの喉元を狙う。

「つつ! 甘いわ!!」

しかし、それを読まれていたのか。

マアンナが剣の太刀を止める。グガラナにやられた一瞬の隙でさえ、止められてしまったのだ。

「グガランナ!!!」

グガランナが口を開くと嵐がリエル目掛けて襲いかかる。

イシユタルが躡けたグガランナはイシユタル本人のみ一切ダメージを受けない。嵐はイシユタルすら巻き込むが、イシユタルには通用しない

「つつ!!! ハアアア!!!」

リエルはそれを魔力砲で吹き飛ばし、イシユタルに距離を詰めた。グガランナの攻撃を吹き飛ばしたなら、イシユタルと一対一だ。

しかし、リエルが剣を振り出した瞬間、

ドクンツ!!!と心臓の鼓動が身体から魂を引き剥がすかのように音を立てた。

「がっ……!!!!ああああっつつ?!?!?」

それは、リエルにも誤算だった。

身体のダメージが深刻な状況の中、リエルは魔術を使い続けた代償で全身の骨が折れたかのような激痛が走り、身体の魔術回路は幾つか断線し、身体の皮膚から血が吹き出す。

だが、それが決定的な隙だった。

片目が見えないリエルの死角からマアンナの矢は既に充填していた。

「マアンナ!!!」

「つつ……!!!」

それに気づいた時にはもう手遅れだった。

充填されたマアンナの矢は放たれ、リエルの胴体を引き摺りながらも貫いたのだ。リエルが持っていた魔杖は手元から離れて、

「カハッ…………!!」

数百メートル程引き摺られて胴体を貫いた。

かろうじて自分にかけて物理保護など紙装甲にも等しく意味をなさなかった。

今の一撃は間違いない致命傷だ。

「……………ま……………だ……………」

リエルは地に倒れ、起き上がる事さえ出来なかった。

胴体には魔術でも塞ぐ事のできない程、大きな穴が開きそこから止め処なく血が流れ落ちる。けれどリエルはまだ生きていた。身体を引き摺りながらも魔杖のある方向へ片腕で這い蹲る。

「……………まだ生きていたの。しづといわね」

地上から降りたイシュタルが這い蹲るリイエルの頭を踏みつける。最早勝敗も格の違いもついた。リイエルが死ぬ事によりウルクが滅ぶ事が決定したイシュタルは笑う。ゴリツ、ゴリツと頭蓋骨を踏み潰さんとばかりに力を入れる。

「……………あ……………」

「んっ？ 何？ 聞こえないわ。もつとちゃんと喋って頂戴。ああ、頭を踏みつけられてちや喋れないわよね」

イシュタルはリイエルの髪を掴んで持ち上げる。

面白そうな顔をしながらも泣いて許を請うリイエルの姿を想像しながらも、リイエルが口にした言葉に耳を傾けた。

「……………『接続……………崩壊』」

——その言葉と同時に、イシュタルが気付かなかつたリエルの切札、既に千切れた筈のリエルの左腕が爆発した。

「なっ……!! っああ——!?!」

さつき左腕を失った時に、密かに魔杖で繋げて準備しておいた切り札。魔杖を離していても繋がっている以上、持たずともその力を発揮する。

至近距離の爆発。イシュタルの体が吹き飛び、顔面から少くない血が流れていた。顔を抑えて膝を着いている姿が目に入った。

「神なら……特にアンタなら……慢心するよね」

「つつアンタ……!! 美の象徴であるこの私の顔に……傷をつ!!!」

イシュタルは右手で焼かれたような痛みが走る顔を押さえていた。顔の半分程に軽度の火傷を負ったのだ。美の象徴である自分の顔を傷つけたその不敬に怒り震えるイシュタル。

逆にリエルは痛みで思考が上手く回らない、零れ落ちる血、僅かながらの動揺をしながらも、怒りに震えるイシュタルにリエルは何もできない。血を流し過ぎて、魔術

を使えば命を枯らす。

だから、アレが今出来る精一杯だったのに、殺せなかった。リエルは見上げて、口元を歪めて笑う事しかできない。

「ザマア……ミロ……お、似合いの……顔、にな……つたわね」

「つつ……!! マアンナ!!」

イシュタルはマアンナに乗り、空高くからリエルを狙う。

否、正確にはリエルの死体を残さない程の威力で、この一帯を全て消し去るつもりだ。

「(ああ……もう……身体が……冷たい……)」

身体は血を失い、体温を奪っていく。

激痛で指一本動かせる気がしない。

「(……私は何、してたんだっけ……?)」

考えている間にも、身体は深く、深く。重力に押し潰され、飲み込まれるような勢いに逆らうこともせず、リエルは諦めたように流されていた。

「(眠いなあ……………)」

酷く、疲れている。喉の奥が焼け付くように何かを叫ぼうとしていたが、そんなこともどうでもよく感じてしまっていた。

意識など要らないくらいに思考を放棄したい。今はただ、泥のように眠っていたい。リエルの意識はここで途絶えた。

声が聞こえた。

何か懐かしい声が聞こえた。

『貴様の歌声は何物にも勝る美酒のようだ。良いぞ。貴様にこの私の財となることを赦そう』

気が付けば、私はそこに居た。

そこには……誰だっけ？

顔が見えない。まるで思考がモヤにかかったように働かない。

『えっ、普通に嫌です』

『そうかそうか。ならば私の元に……はっ？』

それが私と××の始まりだった。

……名前、××なんだったかな。思い出そうとしても顔が見えない。

××××

『こらー！ 待ちなさい！』

『フハハ！ だが断る！ 今日には劇を見に行くのでな！』

『仕事サボるんじゃないやありません！ シドウリさんが過労死しちゃうでしょうが！！』

××
|

！××を止めて！！』

『なっ××……！ 我が友を使うのは狡いではないか！』

『知るがー！ ならせめて仕事してから行きなさい！』

××
××

それから私は××と××をいつも追いかけて居た。

あれ？ 私は誰を××追いかけて居たんだっけ……？

×

『ほう……『世界』と来たか。その名は重いぞ』

「今更何言つてんの？ 星を見定める王、の宮廷魔導師ならそれくらいの覚悟がなく
ちや、笑われるでしょ？」

それから私は誇りを持った。の背中を追い続けた。

確か……王様だった……けど、名前が分からない。

×××

×××××

「×、××！ 今日飲もう！ シドウリさん達も明日くらいなら休日にするくらい許して
×××××くれそうだし！」

「フハハハ！！ 良いぞ！ 今日は最高に良い気分だ！ 我が蔵からとっておきを出して
やろう!!」

「飲み比べと行くかい2人とも？」

「良かろう！」

「いやそれ絶対××が勝つじゃん!？」

それから私達は誰にも負けなかった。

フンババにもグガランナにも負けなかった。

あの2人の名前が思い出せない……

「×××、お前は1人ではない。我も1人になる事はない。貴様は我が生涯で最初の友であるのだからな。いずれ遠い未来で、また会おう友よ」

それを優しく、そして辛くないように×××は約束をした。

「××、私達は貴方を愛してる。だから、だからね……！ いつかまた、明日を見に行こう……！」

私はいつまでも忘れないように明日をまた生きる事を約束した。

誰……？ 誰だったかな……？

「……×××……リイエル……ありがとう……僕も……2人……を忘れない……大好き……だよ」

私と××××は××××と未来の約束をした。

何か××××大事な事を忘れてる気がする。

忘れてはいけない。大事な約束を……

「……リエル……」

「……なに……王様……」×

私を抱き締めたまま、××××は口にした。

一体誰だった……？ ××××私は……誰に抱き締められた？

「貴様は、貴様だけは……我を置いて死ぬな」

あの時、……私と王様は泣いていた。

「約束するよ……」

ああ、そうだ思い出した。

あの時、私に約束させた人の名前は……

ギルガメッシュ」

そうだ。そうだったよ。

思い出したのだ。私の起源ルーツが……

私の歌が王に届いたから、今の私はここに居る。

私の力が認められたから、私は2人と肩を並べた。

私を信じて託してくれたから、今の私は背負っているのだ。

世界の理も、友の約束も、ウルクを守る事も、

そしてギルガメッシュを置いて死なないと。

「……漸く、気づいたようだね」

世界が真っ白に変わった。

そこには何も無かった。自分の世界はいつも空っぽだった。

「君は一体何なのか。何者なのか」

私は歌が好きだった。

ただそれだけだったのだ。

歌う事に意味なんてなく、歌が好きだったからそれしかなかった。

けれどギルガメッシュが色を与えてくれた。エルキドゥが筆を持たせてくれた。それは絵具のように私の心を彩るような刺激的な毎日があったのだ。

ギルガメッシュとエルキドゥと共に肩を並べあつて、世界を背負ったのだ。それは重くとも支え合つて、繋ぎ合つて、それでいて辛くなかった。誇りに思えた。

私が今、ここに居るのは……

「うん。全部分かったんだ。私はギルガメツシュとエルキドウの側に居たから、今の私の全てがあるって、気付けたんだ」

もう全部分かった。

リイエルと言う一人の人間を認めてくれた王がいた。

リイエルを親友と呼ぶ兵器がいた。

片方は無知にして私と同じかもしれない存在、神の兵器として生まれながらも、私と共に空を見た大切な友達。

片方は傲慢で、自由で、横暴で、食えない王だった。それでも気高く、神すら恐れな
い王が居た。

2人が私を認めてくれたから、今の私はここに居る。

「私は……ギルガメツシュの側に居たい。ギルガメツシュと一緒に世界が見たい。だから私は……ギルガメツシュと約束した事を無かった事になんかしたくないんだ」

振り返ると、そこには懐かしく感じた。

大事な約束をしたもう一人の『人間』

『心』を手にし、私とギルガメツシュが約束したもう一人の友が居た。ゆらゆらと柵引く緑色の長い髪、宝石のような金色の瞳、天の鎖としてギルガメツシュとリエルと共にあつた存在。

「私はまだ生きるよ。約束はまだ先になつちやうね」

「構わないさ。ギルを一人にしたくないのは僕も同じさ」

リエルは大事な人に大事な約束をしていた。

それを邪魔する神が居る。いや、神が人と共にあるなら、あの神はこの世界に存在してはいけない神だ。

だが、神の時代である以上、天の法には逆らえない。民達は怯え、恐怖してしまう。今
の人間はグラガンナも私利私欲で持ち込んだあの女神に逆らえない。

だからリエルは考えた。

この先をどうすればいいか。

「私は今から、大馬鹿な事をするよ？　ギルガメツシュでさえ驚く程の大馬鹿を」

「ハハハ……！　良いんじゃないかな？　それが僕たちらしい在り方だよ。きつと」

お互いに笑い、リエルは手を伸ばした。

そうだ。いつも大馬鹿やらかして、私が追いかけて、捕まえて、それでいてまた繰り返し。けれど偶に一緒に馬鹿をやらかして、笑い合う。

それが私達の在り方だった。私達らしい選択だったのだ。

「エル、力を貸してくれる？」

恐らくは最後になるだろう。

意気込んでも風前の灯のような命だ。大馬鹿やらかしても後など殆どないだろう。約束は守れない。けど、無かったことになんかさせない。

ならば燃やすでしょう。最後の命の蠟燭が切れるまで、最後まで醜く生きよう。それが、リエル私の在り方だ。

ギルガメツシュ、そしてリエルの友であるエルキドゥは手を取った。

「勿論さ。リエル」

2人が手を繋ぎ合わせると、白い世界は何処か懐かしい金色の光と共に消えていった。

イシユタルのマアンナが最大出力まで魔力を溜めている。

生きしぶといリエルでさえ、この一帯すら消し飛ばす対山宝具には耐える事すら出来ないだろう。

「……………何？ この歌は？」

それはまるで幻想的な歌だった。惹き込まれるような優しくも可憐で、美しい声で歌われている。まるで魅了されたかのように大地が、空が、風が音を止めるようだ。

リエルではない。リエルを見ても口すら動いていない。イシユタルは歌が聞こ

える方向を見た。そこにあつたのはリィエルの魔杖である『白ユニき世界パリスの一つ星』だ。持ち主が何もしていないのに浮かんでいたのだ。

あの魔杖から歌声が聞こえる。

それも、何十、何百もの声が重なって紡がれた歌にイシユタルでさえ聞き惚れてしまふほどだ。

「……っ!? なっ!? この私が聞き惚れたですって!? 認めるもんですか!! マアンナ!!」

それは美の象徴からすれば一瞬の敗北。

イシユタルはマアンナの矢を撃つ方向をリィエルから魔杖に変える。ここでリィエルを殺すなど造作も無いが、屈辱だが自分でさえ聞き惚れてしまったリィエルの歌声に苛立ち、魔杖を先に破壊する為にマアンナを向けた。

しかし、その杖の後ろに誰かが立っている。

「……無粋な事を……しないでほしいわね」

いつの間にか倒れていたリィエルが浮いた魔杖を手にとった。

見るからに致命傷、なのにまだ立ち上がり魔術を使って浮いている。吐き出す血はもう無い。身体を走る激痛などもう忘れた。

何故死なない。何故立ち上がるのか。どちらにせよマアンナが狙う方向にリィエルが居るなら一石二鳥だ。

「マアンナ!! 全力掃射!!」

マアンナの矢はリィエルを定めて放たれた。

しかしリィエルは避ける素振りすらなかった。

ただ、リィエルは叫んだ。

自分の友の名を……!

「^{エルキドゥ}天の鎖!!」

マアンナから放たれた矢は天の鎖が完全に縛った。

それだけでは無い。全力を放ったイシユタルに出来た隙に天の鎖は捕らえていた。

イシユタルもグガランナも天の鎖に縛られて動けなくなっていた。

「なあつ……!!?」

イシユタルは驚愕した。

アレは自分が殺した存在だ。なのに何故、リエルが持っている？ 更には、何故グガランナを縛れる程の力を持つ？ 意思のない神造兵器如きに何故自分は縛られている？

訳が分からない。

あの小娘に何故これ程の力を持っているのか。

「貴女には……永遠に分からないでしょうね、イシユタル」

「たかが精霊の半身程度が、なんでこれだけの力を……!!」

リエルは笑った。

その理由はきつと永遠に手にする事は無いだろう。エルと私にあつた縁や絆が繋がっているから、エルが私を繋ぎ止めているから私はまだ立ち上がったのだ。

兵器に心は無い、なんて神の常識を覆した。

人が神すら凌駕した。なのに神はそれを認めない。

人間は神に逆らえない、それが今の世界の理ならば……

……私は叫ぼう。世界に届くように。

……あの、偉大な王のように!!

「天上の神々よ!! 今、この時をもって神代の時代は終わりを告げよう!! 此れより紡ぐは人の時代、神の要らない世界を我等は紡ぎ出す!!!」

此れより神の時代は幕を閉じる。

此れより始まるは人の時代だ。

リエルは考えた。神と人は共にあるべき存在だとエルキドゥが言っていた。それはリエル自身も同じ事を考えていた。だが、神は気まぐれにしか人を見ない。故にイシユタルのような傲慢な神や、三女神と言う人間を滅ぼす事を楽しむ神が生み出してしまったのだ。

そしてそれが神の傲慢さを招いてしまった。天界も冥界も決して人が自分から立ち入る事が出来ない場所だ。にも関わらず神は人間の世界で自由に生き、自由に殺し、自由によって我が物にしようとしている。

「(神の傲慢で……人を傷つける神が居る)」

神が人間を見下しているなら、リエルは神に頼らない。

共にあり続ける神を待ち、見下している神を……

『人の理』を持って裁きを下す。

「我が名はリエル!! 原初の精霊の半身にしてウルク一の宮廷魔導師!! 『星の巫女』に

してギルガメッシュと共に世界の理を背負った人の時代の開闢者よ!!」

これは禁忌に近い力だ。

原初の精霊の半身であるリエルに宿っている力は「惹き寄せる」事にある。惹き寄せると言う事はつまり「誰からも愛されて、誰からでも全てを手に入れる」と言う事が出来てしまう。自分と言う人間に惹かれてしまえば、相手を思うがままに出来る恐ろしい力だ。

—— 私は世界と共に在り

そしてリエルの歌は全てを惹き寄せ魅了する。人も、風も、大地も、空も、それは星でさえ魅了する。しかし、リエル一人では力が足りない。

—— 私は歌い、世界は踊る

故に『ユニバリス・ワシ白き世界の一つ星』は並行世界の全ての自分に接続し、並行世界にいる全ての自分が歌をこの場に届けている。

—— 私は星の灯火を人の時代に移し

惹き寄せるものは既に決まっている。ただし、それは世界を滅ぼしかねない最悪の一手、『星の巫女』として最後の願い。世界すら崩壊へ導き、抑止力すら動き兼ねない裁きの鉄槌。

—— 神の時代の最後の星となろう

—— ああ、そうだ。

もし、名前をつけるなら

あの2人と同じが良いな。

『神代^エの終幕^ヌを告げ^マる

ねえ、エルキドウ。ギルガメツシユ。

私ね。やつと……

人^エ理^リの裁^シき^ユ!!!
』

遠かった2人に追いつけた気がするよ。

それはリエルが惹き寄せた星の鉄槌。
グ・ガ・ラ・ン・ナ・の・数・十・倍・も・あ・る・巨・大・な・星・が、
今まさにイシユタルとグラガンナを捉えてい

た。

そしてそれは名を馳せる英雄の中で、リエルしか使う事の出来ない領域の魔術、他に使うのが可能だとするならば、『アルテミット・ワン原初の一』を持つ月の最強種である『朱い月』くらいだろう。

放たれたのは最早、宝具の枠に収まり切らない質量の塊。

世界すら崩壊しかねない禁断の力をリエルは使用したのだ。リエルの魔術回路の殆どは千切れ、壊死して、それでもウルクの街にリエルが使える最大硬度の結界を張った。

『朱い月』が放つのが『月落とし』ならば『星の巫女』の放つそれは『星崩し』と言えるだろう。

リエルが命をかけて紡いだ歌に惹かれて、落とされた星は本来なら存在しない筈の第二宝具。

そのランクは抑止力すら動きかねない『対星宝具』である。

原初の魔術を全て理解し、人々の絆を繋ぎ、幾多の世界に干渉し、幾多の世界から可能性を惹き寄せ、星さえも魅了する存在ならば、それは天上の神々を超える存在。

名付けるなら『星の最強種』^{タイプ・ステラ}とでも言うべきなのかもしれない。

そして、そのリエルが惹き寄せた星は……

イシユタルとグガランナには止められない。

天の鎖で抵抗する事も出来ないまま。

圧倒的質量でイシユタルとグガランナを押し潰した。

そしてイシュタルは人界で死んだ事により天界から二度と出る事は出来なくなつた。惹き寄せた星は奇跡的にもウルクに何一つ被害を及ぼす事は無かつた。それは偶然なのか、リエルの力なのかは知る由も無い。

イシュタルが天界に送還されたことによつて、人の時代の幕を開けた。神の時代は此れより終わり、人が世界の歴史を紡ぐのだ。

そしてその予兆に気が付いたのは、

「……………？」

ウルクから遠い場所に居たギルガメッシュ一人のみであつた。

『人』は彼方の『天』に歌を捧げる

—— 私は世界と共に在り

ねえ、ギルガメツシユ。

—— 私は歌い、世界は踊る

ねえ、エルキドウ。

—— 私は星の灯火を人の時代に移し

私ね……やつと

—— 神の時代の最後の星となろう

遠かった2人に追いつけた気がするよ。

『神代^エの終幕^ヌを告げ^マる

けど、私の役目はここで終わりよ。

神と人の時代を隔てて、少し疲れたわ。

だから、私は少し休むわ。

責務を投げ出して、貴方みたいに少しだけ自由に……

後は……そうね……

人^エ理^リの裁^シき^ユ!!!
』

貴方を……待ち続けるとするよ。

貴方が1人にならないように、星の上から貴方を待つよ。

これは別れではないわ。

約束したでしょ？ 3人で。

遠い未来でまた会おうって……

だからね……ギルガメツシユ。

ギルガメツシユの旅路は約束通り三年で終わった。流石に途方に暮れ、苛立ちを感じながらもウルクに帰っていった。

不死の草は狡猾な蛇に喰われてしまったのだ。リエルの分も取ろうとしたが、残念ながら手に入れたのは一つのみだ。

史実では奪われた筈の不死の草は2人分を目的としたギルガメツシユ叙事詩においてズレがあつたのだろう。

それでもギルガメツシユはここで使う事は無かつた。ギルガメツシユが不死になつてしまえば、リエルと一緒に生きられない。不死とは大切な誰かすら置いていってしまふ事をギルガメツシユは知ってしまったからだ。

持っていた2つの内、一つを不死の草を蛇に奪われ途方に暮れた英雄王は、仕方なく故郷へと戻る事になった。

ギルガメツシユはリエルを信じていたが、幾らリエルとて王不在の中、ウルクを守る事は不可能だと感じていた。

リエルは確かに強いが、他国との摩擦に土地神のイシユタルが消えた問題、国発展には流石のリエルでも無理があると思っていた。

渋々。渋々ながらも、諦めてはいたのだ。三年間自分がいない状態でウルクを守るなど、とてつもない無茶を押し付けた自分にも非がある。だから、例え他の国に都を移していようと、仕方がないと。

「……………むっ?」

ウルクに戻る道に誰かが立っていた。

「なっ……………!!?」

それは忘れもしない自分が旅をするきっかけを作った存在、神々によって命を落とす、遠い未来でまた会おうと約束した友。

「……エル……キドゥ……？」

「久しぶりだね。ギル」

そこにはエルキドゥが立っていた。

その隣にはシドゥリと呼ばれていた女性。数年が経ち、妖艶な雰囲気醸し出す美女となつた彼女はエルキドゥの隣に立っていた。

「何故貴様がここに……貴様は神の呪いによつて死んだ筈……！」

「それは、彼女から聞くといい」

エルキドゥは隣に目を移した。

シドウリは黒いベールで顔を隠している為、表情すら見えない。だが、ギルガメツシユには心当たりがあった。祭祀長であり、リエルが母親のように懐いていた人物。

「貴様は……確かシドウリ、だったか」

「……………」

「ギル……不死の草は使ったのかい？」

「いや……手に入ったのは一つ。帰ったらリエルと使うか考えていたのだが……それがどうしたと言うのだ」

「……………いや、まだ使わなくてよかったよ」

「……………？ それはどういう——」

パアン、と言う音が空虚に響き渡った。ギルガメツシユは、何をされたのかわからなかった。目の前の人物がそんな短慮ではないと知っていたから。そんなことをする人間ではないと知っていたから。

いつもリエルが言っていた。シドウリさんは優しい人で平気で誰かのために無理しちやう。だから王様はちゃんと見ていてね、といつも自分の事のように言っていた。

今の彼女からは優しきの欠片も感じない。感情は怒りとなり、激情に駆られている。

「……王の帰還を迎える者が、こんな不敬者とは。貴様、首を出す覚悟はあるようだな」

静寂に響き渡る音と、振り抜かれた拳。そして自身の頬の熱を以つてして、ようやくギルガメツシユは理解した。目の前の女性が、シドウリが、自分を殴った事を。いきなり殴られた事に少々戸惑ったが、その不敬は許せなかつた。

ただ、殴った彼女が何故泣きそうなのか分からないのだ。

「ええ、首など後で幾らでもくれて上げます!! けど!! 私はやはり、貴方を許せない

!!!」

「……何?」

出迎えにしては些か奇妙だ。

そもそもエルキドウが居て、シドウリがこの場所に居るのは何故か。国が滅んだならリエルが別の場所に移している筈だ。幾ら王ではないリエルでさえそれくらい的事は思いつく筈だ。

シドウリが一体何に許せないのか理解出来ないのだ。

「私は……貴方を殴る為に!! 貴方を叱る為に!! ウルクから貴方を探し続けた!!! それ……それがあの方が最後に私に託した事だから!!!」

最後、と言う言葉に何か嫌な予感がした。

ギルガメツシユの思考は、最悪の結論を導き出そうとしていた。エルキドウが居るのに見当たらない彼女に、怒りと後悔で泣き崩れるシドウリ。全ては、そう考えれば辻褃があう。あつてしまう。

「……………おい……………リィエルは? リィエルはどうした?」

そしてギルガメツシユの優秀な頭脳は、無情にも正解をはじき出す。更に極め付けはシドウリが持っている魔杖だ。エルキドウが居たせいか気付かなかつたが、シドウリが持っているソレはギルガメツシユがリィエルに渡した『白き世界の一つ星』だ。何故、それをシドウリが持っているのか。

「……」

「……」

沈黙。それこそが、答えに他ならなかった。泣き崩れるシドウリも隣に居るエルキドウも何も言わない。ただ悲しそうに、目を伏せるだけ。

「……何が、あったと言うのだ。答えよシドウリ!!」

嫌な予感がした。

ギルガメツシユは声を荒げざるを得なかった。約束した筈のリエルが、この3年に一体何があったのかどうなったのか。その疑問だけが、頭から離れない。答えてすらくれないのに苛立ちを感じてしまう程に。

「……ギル、疑問に思う事は分かる。だけど今は帰るよ」

「エルキドウ……リエルはどうしたのだ」

「……もう一度言うよギル、帰ったら全部分かる。僕が何故居るのか、今ウルクがどう

なっているのか。そして、彼女が何をしたのか」

ギルガメツシユは宝物庫からヴィマーナを取り出した。

一体何があつたのか最悪の予想がついていた。帰ったら全部分かるという以上、此処で聞いたところで理解出来ないかもしれない。ギルガメツシユはエルキドゥとシドゥリをヴィマーナに乗せてウルクに戻っていった。

「……………っ!？」

ウルクからあと数十キロと言う所でむせ返る程の色濃い血の臭いが漂った。ギルガメツシユも顔をしかめるほどだ。一体何人で殺し合いをすればこれだけの惨劇の後のような血臭がするのだろうか。

だが、問題はそこではない。

アレはなんだ。

どうしてあの場所にあれ程大きな山が存在しているのか。そしてその下敷きになつ

ているのは、すでに腐り果て、その血の神秘が大地に流れて血を吸い、赤い草木を生やしている。

アレは、イシュタルが引き連れた『^グ天の牡牛^{ランナ}』だ。アレは3年前、3人で殺した筈だ。アレが何故死体となってこの場所に存在するのか。

「アレは……シドウリよ、何故グガランナの死骸がこの場にある？」

「……アレは4ヶ月前、リエル様がたった1人でイシュタル神ごと倒したものです」

「何っ……!?! 幾ら我でも、アレを単独で倒すのは無理がある。まさかりリエルは、星でも落としたと言うのか!?!」

「……はい」

シドウリは肯定した。

ギルガメツシユはリエルの力を理解していた。「惹き寄せる力」に置いて、リエルは自分の持つ財より輝きを見せる。それが歌となって無意識のうちに使っていたのは知っていた。

だが、ギルガメツシユでも目を見開いた。

星を惹き寄せるなんて、規格外な事を出来るなんて誰が予想できた。

「フツ、フハハハハハハハ!! 流石は私の見込んだ女よ!! 我でさえ為すことの出来ない事をやって退けた!! 一体誰が予想した!?!」

ギルガメツシュは高笑いした。

リエルがこれ程の力を持っていたとは誰が思っただろう。世界を見定め、裁定を下し、自分と共に星を背負う覚悟を持つ彼女は文字通り、星を背負いイシュタルとグガラナを殺した。

「神か!?! それとも世界か!?! 誰がああなる暴獣をイシュタルごと殺れる!?! 全く持って私の斜め上の予想を裏切ってくれ!!」

リエルはギルガメツシュの約束通り、国を守ったのだ。

イシュタルと言う悪神からウルクの地を民を守ったのだ。グガラナを引き連れたイシュタルをたつた一人だけでリエルは守り抜いたのだ。

「ギル、降りるよ」

「むっ……？ ウルクまで数十はある筈だ。何故降りる？」

「いいから、行くよ」

「なっ……!!? ちよつと待てえええええ!!?」

エルキドゥはギルガメッシュの首襟を掴みながら、グガラナを潰していた山の頂点に空中から紐無しバンジーで降りていった。

「エルキドゥ貴様!! いくら我とて何も無しにこの高さから飛び降りるのは一度とはいえ冥界が見えたではないか!!」

「ギル」

「せめてヴィマーナをしまう位の時間を超越すがいい!! アレは存外に壊れやすいのだぞ!! 二度と飛べなくなったらどうするつも——」

「ギル!!」

「つつ!!?」

「前を見て」

「前をだと……？ 一体何があると言うの……」

そこにあつたのは大量の花と突き刺さった斧のような魔杖と、そして名前が綴られた石版だった。

それはまるで誰かの墓のようだった。

嫌な予感がした。ウルクに帰る途中に寄らなければならないのは何故か。今になつて分かつてしまったのだ。

何故、この場所なのか、優秀な頭は嫌でもその答えに辿り着いていた。名前がこう書かれていた。

『リイエル』

……そう書かれていたのだ。

「はっ……っ？」

ギルガメツシユは目を擦った。

痛くなるまで擦った。幻覚か夢か、はたまた旅路の疲れが目がおかしくなったのか。見違えている筈だと、そう思っていた。だが幾ら擦ろうが目の前の文字は変わらない。

「…………嘘だ。嘘だよな友よ…………」

「……………」

「…………リエルが…………死んだのか？」

「……………」

ギルガメツシユの問いかけにエルキドゥはただ沈黙だった。それが答えだった。現実が飲み込めず、立っている地面さえ歪んでいるような感覚、ただ無情にも沈黙を続けるエルキドゥ。

「頼む…………！ エルキドゥ！ 嘘だと言ってくれ!!!」

「…………ギル」

「…………いいえ、嘘でも間違いでもありません」

その現実を叩きつけたのはシドウリだった。

涙を拭い、墓の前で膝をつき、シドウリは真実を隠す事なく告げた。

「……4ヶ月前、リエル様はお亡くなりになりました」

それは最悪の現実だった。

ギルガメツシユは身体から力が抜け落ち、跪いていた。リエルが居たであろう世界は真つ黒に染まったようだ。白く、可憐に笑う彼女はこの世界から居なくなった。

悪い夢なら覚めて欲しかった。

「何が……何があったのだ!!」

激昂したところで、何も変わらない。そう知っていても、ギルガメツシユは声を荒げざるを得なかった。あの可憐な少女が、いつもギルガメツシユを叱る彼女が、どうなったのか。その疑問だけが、狂ったように頭を回り続ける。

シドウリは何があったのか全て話した。
4ヶ月前、リエルに何があったのか。

ウルクの街に一つのワープゲートが繋がった。

それは先程まで居た戦場から帰ってきた兵士と同じ、星が落ちる場所からリエルが繋がったのだろう、

「リエル様……!!」

ワープゲートから姿が現れた。

それは身体中の殆どが血で赤く染まり、背中には矢や剣の刺し傷、両耳は掠れるような音しか聞こえていない。右足の骨はは完全に碎けて片腕と片目を失い、更には腹部にマアンナの矢で貫かれ、吹き飛ばされた臓器。

「っ……………」

そんな中よたよたと歩きながらも、未だに生きていたリエルの姿だ。生きているのが不思議なくらいだった。

「リイ……エル……様」

「……シドウリさんか……ただいま……」

「つつ!! 喋らないでください! 医者の方を呼んで来ま——」

「無理よ……もう。無理なのよ」

「無理ってそんな……事……」

リエルは自分の死を悟った。

リエルは幾多の並行世界に繋ぎ、ギルガメツシュの財宝選びからその武器や薬を持っていた可能性に接続すれば、真名開放出来ずとも武器を手にし、薬ならギルガメツシュと同じレベルのものを引っ張り出せる。だが、それでも無理だとリエルは断言した。

「……城まで行かなくちゃ……」

「リエル様!!」

「シドウリさん……悪いけど一緒に来てくれないかしら」

リエルが喋れているのも、エルキドウの力で命を繋ぎ止めてるからだ。戦闘が終わ
り、魔術回路の殆どが断線した以上、繋ぎ止める時間も残り少ない。

「その身体で何をなさるつもりですか!? リエル様……!」

「あの場所に……私がやらなきゃいけない最後の役目があるから……」

ウルクの城の自分の工房に足がもたつきながらも向かっていた。するとシドウリは
膝をついてリエルの前に背中を向ける。

「……乗ってください。城の工房ですよね?」

「……血で汚れちゃうよ?」

「構うものですか!!」

「ハハ……じゃあお願い」

シドウリはリエルを背負って城の工房へ向かった。その時のリエルはシドウリ

がゾツとするくらい軽く、血も肉も失っていた。吐きそうなくらい恐ろしいリエルの現状に歯を食いしばりながら城にリエルを背負って急いで向かった。

リエルの工房は少し特殊だった。

シドゥリ自身、何度か訪れた事はあるが、巨大な魔法陣が地面に幾つか書かれているだけ、本や机、魔道具など一切ない。代わりにギルガメツシュが旅に行く前に渡した宝剣が3つ、結界の触媒として突き刺さっている。

魔術師ならもつと揃えているものだと思っていたが、ここまで殺風景なのは特殊と言わざる得ない。

「……………うっ……………」

「着きました。リエル様」

「……………ああ……………少し寝ていたわ……………ありがとう……………シドゥリさん」

リエルは魔杖にもたれかかりながらも立ち上がった。

この魔法陣はリエルにしか分からない。ただ、リエルは虚数空間にしまっただけである程度の道具をいつも取り出している。

「……接続……開放」

リエルが魔杖を地面に当てると、魔法陣から現れたのはギルガメツシユの中でも特別な財であり、旅路に行く際にリエルに預けたものだ。

光が一つに集い、現れたのは、

「……ウルクの大聖杯」

ギルガメツシユが持つウルクの大聖杯だった。

ギルガメツシユが旅路に行く際に渡した特殊な財だ。ギルガメツシユが持つウルクの聖杯は特殊で器の中に既に願望機としての機能が備わったものだ。色々あって少量しか中身がなかった状態で渡されたが、それでも使い切る事を許されたものだ。

「それでリエル様の傷を……！」
「ううん……無理……中身がないから……」

ギルガメツシュがリエルに渡した時に聖杯には中身があった。

精々、些細な願いを叶えるくらいしかなかったが、聖杯の中身である無色の魔力は確かにあったのだ。

だが、中身は無い。理由は分かっていた。

リエルは聖杯に一つ魔術をかけていた。もしも自分の思惑を超え、自分でもウルクを守る事が出来ないと判断した時、聖杯が自動的に願いを叶えるように細工をしていた。

リエルが落とした星はリエル自身でさえウルクを守れないと判断し、その結果、聖杯に願われた『ウルクを守れ』と言う願いが自動的に起動したのだ。

アレだけの質量がウルク周辺で起きたのに被害が無いのは聖杯の力だ。だが無色の魔力が枯渇してしまうほどにリエルの星の災害は酷かったのだ。

「……シドウリさん、よく聞いて」

「……リイエル様……」

「今……魔獣がウルクを襲ってるのは……恐らく三女神の1人が魔獣を生み出し……操っているからよ」

「三女神……ですか？」

「多少……予想は付く。私の予想でしかないけど、魔獣を生み出し、操れる存在なんて私には1人しか思い浮かばない……」

ここ数ヶ月で魔獣の数が劇的に増えた。

倒しても倒してもキリが無い程に、魔獣は増え続けている。凶暴な魔獣をこれ程の数生み出し、それを使役できる存在は1人……いや、一体と言うべきだろう。

原初の母にして、人界創生の神である存在は1人しかない。

「……ティアマト……私の予想ならそれが……蘇ろうとしている」

ティアマト。

古代メソポタミア神話に登場する原初の大地母神にして、『人類悪』の一つ。ティアマトは生み出した神々を愛したが、神々は母であるティアマトに剣を向けた。ティアマトは嘆き、狂い、新しい子供として十一の魔獣を産みだし、神々と対決し、戦いの末、ティアマトと十一の魔獣は敗れた。

神々は彼女の死体を二つに裂き、天と地を造り、これを人界創世の儀式とした。つまりは世界創生の神話を持つ原初の母と言える。

だが、彼女は人類に必要とされなかった。

生命を生み出す土壌として使われたが、地球の環境が落ち着き、生態系が確立された後に、不要なものとして追放された。並行世界でもなければ、一枚の敷物の下にある旧世界にでさええない、世界の裏側——生命のいない虚数世界に存在する。

それが世界の外側に蘇ろうとしているのだ。いや、正確には回帰すると言った所か。人類を愛すが故に人類を滅ぼす獣、それが『人類悪』だ。なんとも皮肉めいている。

「そんな……あり得ません!! ティアマト神はイシユタル神やエンリル神とは違い過ぎる程、格が違い過ぎます!! 世界を創生した神が蘇ろうだなんて……!!」

「……多分、三女神は何かを賭けて……ウルクを滅ぼそうとしているの……それはこの聖

杯か……世界の覇権かは分からないけど」

それならティアマト神が一人勝ちしてしまう。

これも推測だが、ティアマト神と同じ権能を持った神が存在している。三女神も分からない。自分が殺したイシュタルなのか、エンリル神なのか、冥界の女神かは分からない。

「つつ!! ゴホツゴホツ……!!」

リエルは血を吐いた。

もう原因は分かっている。エルキドウの繋ぎ止める力が切れてきたからだ。当然だ。既に死んだも同然、生きている方が不思議なくらいなんだから。

「リエル様……!!」

「……シドウリさん」

「何か……何が無いのですか!? 貴女自身が助かる術は無いのですか!?!」

シドウリは叫んだ。

どんな些細な可能性でもいい。これではいつもウルクを支え、王を叱り、偶に無茶をしながらも笑って、王の帰りを待つリエル様が報われないではないか。

だが、リエルは首を横に振り申し訳なきそうに言った。

「……ごめんね……私自身はどうしようもないの……」

「……っ！ そんな……そんなの貴女が報われないではないですか!? 王が帰ってくるのを、待ち続けているリエル様が……!!」

「シドウリ」

リエルは初めてシドウリを呼び捨てにした。

その事に戸惑ったシドウリはただ泣くしかなかった。それを母親のように頭を優しく撫でるリエルが居た。

「……泣かないの……これは別れなんかじゃないわ」

「ですが……ですがリエル様は死ぬより辛い事になる!! 私は……!」

「……シドウリ……私は死なないわ」

「死んだも同然になります!! 私は……! 貴女が聖杯の中身になって欲しくない!!」

シドウリは分かってしまったのだ。

今のリエルには守る術が無い。魔獣戦線も兵士が奮闘しているとはいえ長く持たない。守る術があるとするとするならただ一つ。ウルクの大聖杯の中身を満たし、ウルクを守護する者。即ち英霊を召喚する他ないのだ。

ギルガメツシユの文獻にあつた7つの人類悪に打倒するために用意された七騎の英霊、それを世界の意思ではなく人の身で召喚出来る儀式が存在する。

その名は聖杯戦争。

七騎の英霊が聖杯を奪い合う儀式だ。それを利用し、人類悪対抗の手段として呼び出すなら、七騎は殺し合いをせずに人類悪を倒す為にウルクを守護する形に持つていくのだ。

だが、中身が無ければ話にならない。

中身は調達しなければならぬ。

では中身となるのは何だ？

無色とまではいかないが、英霊を召喚するのに充分過ぎる魔力を保有し、純粋な魂を持ち、汚れない強靱な精神を持つ人間は一人しかいない。

もう答えは分かっていた。

「気づいていたのね……シドウリ」

リィエルだ。

リィエルが聖杯の中身となれば、それが可能となる。ありとあらゆる可能性に繋ぎ、その結果のみを惹き寄せる事が出来るリィエルにはその中身になり得る資格があつた。

「……私は……私は貴女の犠牲を踏み台に……ウルクを守りたいだなんて思えません

……」
「……そう」

静かにその言葉を呑み込んだ。

リエルはシドウリの事を優しく抱きしめた。シドウリが血に濡れようと構わなかった。リエルの友がギルガメツシュであるようにシドウリもリエルの事を大切に思っているのだ。

気付けなかった訳ではない。ただ、それは相手を傷付けると言う事なのだ。

「シドウリ……私の最後の我儘を聞いて……もらってもいい？」

シドウリは首を縦に振った。

泣いて言葉も出ないまま、ただ頷くしか無かった。本当は聞きたくない、けれどシドウリはリエルから聞こえる心臓の鼓動が徐々に聞こえなくなっていくのだ。

リエルの最後は変わらなかった。

せめて、リエルの最後を見送るくらいしか出来ない自分が恨めしくて仕方なかった。

「は……」

シドウリは覚悟した。

その返事がリィエルに届くと、リィエルは最後の我儘を口にした。

「私はもう……居なくなってしまう……ギルガメツシュを叱ってやれる……人が居なくなる……だから……貴女が……シドウリが……王様を叱ってあげて……」

リィエルが思い出したのはあの王の顔だ。

結局、願いは叶わなかった。自分を置いて死ぬなって言われてたのに、叶わなかった。だから、託すのだ。

ギルガメツシュを叱るのはいつもリィエルだった。

「……ギルガメツシュは……あの人は寂しがり屋だから……私が居なくなったら……後悔すると思う……だから……お願い」

「……リィエル……様」

「……………それと……………シドウリ……………」

リイエルは自分が長く愛用していた魔杖『ユニバース白き世界の二つ星』をシドウリに渡した。

それはウルクでギルガメツシユに認められた唯一の『巫女』たるリイエルが、シドウリに『巫女』の称号を渡したと言う事でもある。

「これを……………貴女に託す……………」

「……………わたしには……………貴女のようにはなれません……………」

「ならなくてもいいわ……………貴女に託すのは私の意思……………ウルクを守りたいと言うその想いよ……………それをどうか忘れないで」

リイエルはシドウリの額に自分の額を押し当てた。

もう、限界だ。リイエル自身の中にいるエルキドウの存在が消えかかっている事を理解した。

「リイエル様……………」

「もう……時間ね」

泣き崩れながらもシドウリはリエルを見送ると決意した。それがリエルに託された事なのだから……リエルの我儘なのだから。

「シドウリ……今までありがとう……またいつか」

またいつか……星の下でまた会いましょう。そう告げたリエルはシドウリから離れて聖杯の前に最後の力を振り絞る。

「『星の巫女』としての最後を……我が身を聖杯に捧げよう……」

リエルは片腕を掲げ、聖杯と繋がった。

魂が引き込まれそうになる。自分という人間が徐々に溶け合って消えていくのを感じる。

けれどリエルは踏みとどまった。

「だから……一時だけ……私は歌う。彼方の王に届ける為に」

『星の巫女』としての最後の歌を聖杯に捧げた。

それは優しく可憐で、何処か儂さを感じ、何処か寂しさを感じ、そして別れたくない後悔を感じた。

それは誰かに届いてほしいと言う願いだった。

「(ねえ……ギルガメッシュ……)」

私の役目はここで終わり、

「(最後まで……口に出来なかったけど……)」

神と人の時代を隔てて、

「(あなたが……いてくれてよかった)」

変わらなき意思を託し、

「(多分、私……あなたの事が………)」

世界を見守り続ける。

「」

蒼い瞳から溢れた涙を流しながらそう最後に呟くと、リエルは聖杯の前から消えていった。

身体も、血も、歌の音色すら全てが光り輝き、聖杯へと集まって、それは流れ星のように儚さを感じさせながら消えていった。

またね。

またいつか、
星の下で……

『天』は託された星を背負い『人』は世界に微笑む

シドウリはただ泣いた。

涙など枯れ果ててしまうほどに泣いていた。リエルが無力な自分なんかに託して、聖杯の中身として消えていったのに、悲しみしかなかった。

それでも……

『貴女に託すのは私の意思……ウルクを守りたいと言うその思いよ……それをどうか忘れないで』

リエルが守ろうとした事を無かった事にしたくなかった。シドウリは立ち上がり、左手を聖杯に掲げる。自分は余りにも無力で、リエルのようにはなれないだろう。

「——告げる！」

それでも、そんな自分にリエルは託したのだ。泣いてもいい、まだ弱くてもいい。だが、託されたからこそ折れてはいけけないのだ。次に自分が何をすればいいか分かった。リエルがそこまでの道を繋げてくれた。

だから、今自分出来る事をシドウリは右手にあるリエルの魔杖を触媒に詠唱を紡ぎ出した。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に!!」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ!!」

リエルが指し示してくれた道が無駄にはしない。紡ぎ出した詠唱は加速する。

「誓いを此処に!」

我は常世総ての善と成る者!

我は常世総ての悪を敷く者!」

シドウリはリエルに託された最後の巫女。

シドウリは星を背負う事はできない。非力な自分ではリエルに及ばない。それで

も、リエルが託したのは星を守りたいと思うその意思だ。故にシドウリは新たな詠唱を紡ぎ出した。

「我は星より世界を賜りし者、

人より星を授かりし最後の巫女」

シドウリを信じてくれたリエルを忘れない。

リエルが王を待ち続けて、ウルクを守った事を無駄にしない。リエルの願いは必ず自分が叶える。

『私はもう……居なくなってしまう……ギルガメツシュを叱ってやれる……人が居なくなる……だから……貴女が……シドウリが……王様を叱ってあげて……』

それが願いだ。

恐らく民達は最後まで王の事を思いながら国を守った偉大な英雄に敬意を表するだろう。けれどシドウリはそれを望んでいない。望んでいるのは、英雄の称号ではない。最後の最後に王に逢いたかったと願った一人の女の子だと知っていたから。

「汝三大の言霊を纏う七天

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!」

今でも胸が張り裂けそうだ。

リエルの魔力で英霊を召喚するのはリエルを利用しているようで狂いたい程、悲しさに押し潰されそうだ。

それでも、それでもリエルが託した事をシドウリが為さなければならぬ。託されたと言うのはそういう事だ。

膨大な魔力が魔法陣を通じて溢れ返る。

そこに召喚された幾多の英雄が姿を表す。筋骨隆々で盾を持つ兵士のような男、刀を携え見た瞬間に手練れと分かる侍みたいな女、その後ろに立つ巨漢の男、そして白い長髪でフワフワと花を連想させる男。

だが、シドウリが驚いたのはそこでは無かった。

召喚された英雄達の先頭に立つ人影に思わず目を見開く。

「……サーヴァント、エルキドゥ。召喚に応じ参上した。どうか無慈悲に使ってほしい」

そこに居たのは、2年半前に神の呪いによって死んだ筈のエルキドゥだった。それはリエルが触媒になった影響か、リエルがギルガメツシユの為に願ったのかは分からない。

それでも目の前にいるエルキドゥは紛れもなく本物だった。

どうして、エルキドゥが召喚出来たか分かってしまったシドウリは大声を荒げてみつともなく泣き叫んだ。

リエルの願いを叶える事とは言え、リエルを犠牲にした自分が許せなかった。ただ、ただ泣くしかなかった。

「これが……リエル様の最後でした」

シドウリは涙を流しながらも顛末をギルガメツシユに全て打ち明けた。ギルガメツ

シユはただ呆然と、世界が黒く染まっていくな。

「……無理もないよギル、僕も君と同じくらい悲しいよ」

エルキドゥはそれを見て、同情するしかなかった。

いや、同情しか出来なかった。エルキドゥが召喚された理由はリィエルだ。リィエルの力があるからここに居る以上、エルキドゥにはどうする事も出来なかった。

「……………あ……………」

涙が溢れた。

自分を待ち続けるが為にウルクを護り、神の時代と人の時代を文字通り命をかけてまで成し遂げた彼女に一体自分は何をしてやれたのか。

何もしてやれなかった。気付けなかった。

いや、気付けた筈だ。エルキドゥを失い、不死に縋る自分とは違い、彼女はきつと永遠を望まない事を。

死とは悲しく、生物全てが囚われてしまう物だ。けれど、死なないと言うのは、いず

れ誰かを置いて生き続けなきゃならない死より悲しい現実だと言う事に、気付けた筈なのだ。

届かない。届く筈が無かったのだ。

ギルガメツシュでさえ届かない高嶺の花に思えてしまう程にリエルが遠かったのだ。

アレだけの偉業を誰が成し遂げられる？

自分が任せた国を自分だったら護り通せた？

もし、自分が不死なんかに縋らなければ、

リエルは死ななかつたのか？

「あ……うあ……ああ……」

エルキドウを召喚出来たのはリエルが願ったからだ。

寂しいと思わせないように、支えになつてくれる存在がギルガメツシュの隣に居る事をリエルが願ったからだ。彼女は最後の最後まで王の為に在り続けたのだ。

ギルガメツシユには分からない。

分からない程遠すぎた。一体どうしてそこまで王の為を思えたのか。託されたシドウリにもギルガメツシユからしたら遠く、託したリエルの背中は余りにも遠すぎる。

追いつけない。追いつける気がしない。

リエルと言う一つの星に届く気すらしない。

「うああ……ああああ……」

ギルガメツシユの口から、獣にも似た呻き声が漏れた。

再びその場から崩れ落ち、地面を何も考えずに見下ろした。

「あああ……あああああ!!」

どうしてリエルはこんなにもウルクを思える事が出来たのだろうか。どうして自分が人柱になってまで守りたいと思えたのか。何故未だに帰らぬ王の為にここまで戦い、ここまで人として誇らしく在り続けたのか分からない。

狂っているのかもしれない。

ウルクを守りたいと思うそれは狂気の沙汰かもしれない。

それでもその在り方は美しく、一切の後悔すら残さずに誰かの為に次に託した。そんな在り方を誰が真似できるのだろう。

「あああああああああああああああああああああああああああ!!!」

漏れ出たのは、慟哭だった。

頭を抱え、涙を流し、喉が枯れてしまう程に叫びながら、絶望する。

自分は一体何をしてきた。大切だった彼女さえ死にゆく時すら見届けられず、何も出来ない無能の王の為に彼女は死んだのだ。

約束の為に酷い枷で縛って国を守らせて、手に入れた不死の草さえ最早意味などない。ただ彼女を置いていき国を守らせ、神の時代を終わらせて、国の為に命を捧げた彼女に自分は何もしてやれなかった。

何も出来なかった自分の為に彼女は死んだのだ。自分が不死に縋るから彼女を見殺しにしてしまったのだ。

「何故だ……何故そこまで我の為に、我なんかの為に!!」

ギルガメッシュはただ泣くしかなかった。

自分の人生で唯一の光だったリィエルが消えた世界に絶望し、今の自分には後悔しかなかった。無能の王に付き従えた偉大な巫女は最後まで国を想い、王に託した。

約束も叶わなかった。

自分が居たら、あの時自分が居たら、こんな結末は無かった筈なのに。千里眼で見通せば、こんな最後は無かった筈なのに……

「何故……何故貴様が命を落とす!?!不死に継る道化の我に……!!何故お前が死ななければならぬ……!!!」

バギィ!!

突如、鋭い痛みがギルガメツシュを吹き飛ばした。

ギルガメツシュが言葉を詰まらせ、空気を静寂にする。

ビクリと肩を震わせ、その目を大きく見開いた。

ギルガメツシュは頬の痛みを与えたエルキドゥを呆然と見ていた。

——その身体は、震えていた。

エルキドゥは、呼吸を荒くし、肩で息をしながらも、また殴りかからないように必死に抑えていた。

「……………フー、……………フー!!」

「っ……………エルキ、ドウ……………」

ギルガメツシュは、自分がずっと放ち続けてきた言葉を止め、出会ってから一度も見
た事の無いエルキドゥのその表情に驚いていた。

「……………エル……………っ!」

——エルキドウの瞳は、涙で潤んでいた。

エルキドウの、その冷たい目は、確かに怒りを帯びていた。それはリイエルを死なせた事に対してでは無かった。ギルガメツシュの胸元を掴み、持ち上げる。

「……全部、私の所為」だって……？ ……自惚れるなよ……ギル!!」

「……っ」

「っ……たかが、君一人の責任で、リイエルが死んだだなんてっ……！ リイエルが思っていた事はそうじゃないだろ……!!」

——ギルガメツシュのその言い方は、まるで。

自分がリイエルに託さなければ、リイエルは死ななかつたと。そう言っているみたいで。エルキドウは殴らずにはいられなかつた。

リイエルがどんな思いでウルクを守ったのか、帰りを待ち続けたのかは知らない。けれど、ギルガメツシュに託された事を誇りに思ったからこそ、リイエルはウルクの全てを守り切ったのだ。

「——馬鹿にするなよギル!! 僕の友達は、そんな人間を守りたい為に戦ったと言うつもりか!？」

守らせなければ死ななかつた? 確かにそうかもしれない。けれど、それでは、今のリイエルは何の為にウルクを守った? 無能の王? 不死に縋る道化?

違う。そんな王の為にリイエルが犠牲になったのなら、リイエルの死は一体何だったのか。リイエルは最後まで、そんな男の為に戦ったのではない。

「リイエルが……リイエルが何を想って守っていたのか……!! 君には分かる筈だろう!!」

ギルガメッシュだからだ。

いつもと変わらないギルガメッシュを待っていたのだ。傲岸不遜で天上天下、それでも国の為に戦い、エルキドゥと3人で笑い合ったギルガメッシュを、ずっと待ち続けていたのだ。

「立ちなよギル……! 君は王だ、リイエルが全てを捧げてまでその玉座を守ったリイ

エルの英雄なんだ……!!」

エルキドウの潤んだ瞳から涙は零れ落ちていた。

立ち上がらなければ、リエルが求めたギルガメツシユはこんな所で折れるはずがないと信じて守り続けたリエルが惨めに思えてくる。

もう分かっている筈だ。

「……ギル………立って………立ってくれ………!」

エルキドウではない。

リエルが待ち続けた人はエルキドウじゃない。今を生きる人達の上に立ち折れないと信じて託したなら、立ち上がらなければリエルの全ては無駄になる。

故にエルキドウは必死に懇願するように力が抜け落ちたギルガメツシユに言い続ける。

抜け殻のように、ただ呆然として何も見えていないギルガメツシユにそれだけしか今のエルキドウには伝えることが出来ない。

「……………っ……………」

ギルガメツシュは立ち上がった。

そこには王としての覇気は無く、失ってしまった悲しみに顔は酷く見えた。だが、それでも立ち上がらなければいけないのは分かっていた。

リエルが待ち続けた自分はここに帰ってきたのだ。

「リエル……………」

自然と、墓に突き立てられた斧のような魔杖に手を伸ばした。

どうしてこの時手を伸ばしたかは分からない。けれど、ギルガメツシュはそこに誰かが居た気がしたのだ。

その魔杖に触れた瞬間、ギルガメツシュの視界から世界が消えた。

「……………(´)は……………」

空も、地面も何も無い白い世界だった。見渡す限り何一つ存在しない空虚な世界だ。けれど何処か懐かしく思えてしまうような世界にギルガメツシユは困惑する。

「……………」

目の前に一つの扉があった。

装飾も色もなく、真っ白な扉が目の前にあった。それ以外何一つ存在しない。けれど、その扉の先に居る。

「そ(´)に……………居るのか」

ギルガメツシユは直感で分かってしまった。

この扉を開けたら待ち続けてくれた人が居る。こんな自分を支えてくれた高嶺の花

のような女が居る事を。

ギルガメッシュは扉を開いた。

「……………あ……………ああ」

そこは壁も無く、城も無ければ、国どころか地面さえ無い世界だった。けれど無限を思わせる程の星空に、優しく可憐で儂さを感じる懐かしい歌声、そしてその先には一人の女がいた。

あの時と変わらない長い銀髪に蒼い瞳と少女のような可憐さを持つ女が振り向いた。

「——おかえりなさい。ギル」

あの時と全く変わらないリイエルが居た。

柔らかな笑みでギルガメツシユに伝えた言葉、そこに皮肉は全く無く、何も言わないギルガメツシユを見据えて悲しそうに顔をしていた事に困惑していた。

「あ、あれ？ 何か間違えちゃった？」

何一つ変わらなくて、美しいままで。

会いたいと、望んでいた。それと同時に責められると思っていた。いや、責めてほしかった。それに例えリイエルに殺されるなら、それも良いかもしれない、そう思えた。けれど、彼女は責めなかった。

「……怒らないのか？」

「怒れないよ。私は貴方を置いていったから」

「……貴様の……所為ではないだろう」

「それでもだよ。約束を破った。ごめんなさい」

リエルはそれだけ言うと、少し悲しい顔をして苦笑していた。

「……は」

ギルガメツシユはその動きを止めた。一瞬、何を言われたのか分からなかった。泣きそうだった涙は消え去り、頭がぐらつく。リエルの謝罪にギルガメツシユはただ、呆然とした。

——今、なんて？ 言っただけ？

ギルガメツシユには分からなかった。謝らなければいけないのは自分の方なのに、何故彼女が謝っている？

その言葉だけは、どうしようもなく受け入れ難かった。言葉が出てこない。身体を震わすだけ。

「……我を、責めないのか……？」

「……責められないよ。私も貴方もエルの友達だったんだから」

エルキドウが死んでから、リィエルもギルガメツシュも辛かった。あのままではギルガメツシュは壊れてしまうと知っていたリィエルはギルガメツシュを送り出した。

確かに押し付けられたのかもしれない。けれどリィエルはそれでもギルガメツシュのあんな顔は見たくなかった。だから寂しさも在りながらも、ギルガメツシュの旅を止めなかったのだ。

「恨んで、ないのかっ……！　　我は、お前に、ただ押し付けた……！　　ウルクの危機にすら駆け付けてやれなかった……！　　それでも我を責めないのか……！」

「……うん。私が貴方ならそうしていただろうし」

「っっ！」

「それに、貴方は多分不死を得ずに帰ってくるって、心の何処かで分かっていたから……不死になるって事はエルの約束を無かった事にしてしまうから、いつか貴方がそれに気づくって分かっていたから」

死と生は表裏一体。死ぬから、生きていられる。生きるという始まりがあるからこ

そ、死という終焉が存在する。不死といえども聞こえはいいが、それは終わりがある者を置いていく事に他ならない。

リエルは不死になりたいと思わなかった。

けれど止めなかった自分にも責任があるから。

「ギル、聞いて」

リエルは真剣な顔になり、ギルガメッシュに近づいた。

「今、私は聖杯の中に生き続けているの」

リエルは聖杯の中身になったわけではない。

その魂は聖杯の中に留まり続け、ウルクの大聖杯は起動し続けている。聖杯戦争を関係なく、英霊を長く現界させる事は普通の聖杯では不可能で、巨大な力が働かなければ普通は無理なのだ。

「ウルクを滅ぼす三女神、魔獣の母ティアマト、どちらにせよ脅威である事には変わらな
い。今のままじゃエルが居ても勝てるか分からない」

ティアマト神については原初の母であり、生物の存在がティアマトの存在理由になる
程の脅威的な存在だ。神話の始めはティアマトから始まったと言っても過言ではない。
そんな存在が起動すれば……世界の終わりだ。

「今、ウルクは英霊達に支えてもらってる。けれど鍍金メッキはいつか剥がれる。だからギル、
貴方がウルクを支えてあげて。あの場所は私が愛した場所で、失くして欲しくない場所
なの。そしてそれが、私の最後の我儘」

リエルはもうウルクを自分で守れない。

だからこれは我儘だ。ギルガメッシュに守ってほしいと言うリエルの我儘だ。

「もし、もしね。全てが終わって、貴方がウルクを守らなくてもいいって、そう思える時
が来たら——」

王が居なくとも、今を生きる人間達が支え合える時が来たら。人の時代を築き上げた
リエルに何か意味があつたと伝える事が出来たなら。

その時は――

「私を聖杯から解き放つて」

それは、自分を殺せと言う意味だつた。

その言葉を聞いた瞬間、ギルガメッシュは目を見開いた。震える身体を抑えながら、
それを許したく無かつた。

「出来るわけが……ないだろう!!」

「……いつか、貴方にも私と同じくらい大切な友達が出来る。いつか、私と貴方とエル、
3人で生きる時が来る。貴方が死ぬ時は私も一緒に行きたいの」

ギルガメッシュはまだ生き続ける。

だが、全てが終わり、王としての責務が無くなり、人の世の始まりを見定める事が出

来たのなら。リエルもその役を終える時なのだ。

ギルガメツシュは分からなかった。自分を見殺しにした相手と一緒に死にたいなんて正気の沙汰ではない。狂気かもしれないだろう。

「何故……何故そこまで……」

今はまだ言えない。

本当は言いたいけれど、今の気持ちを足枷にして欲しくない。本当は待ち続けたくない。寂しくて、1人は悲しい。けれど、いつかまた星の下で会える時が来るのなら……
リエルは嘘をついた。

「友達だからだよ。ギルガメツシュ」

ギルガメツシュの身体が光り始めた。

それはリエルが創ったあの魔杖に残した僅かながらの力が失われているのだ。あの魔杖に込められた繋がる力は、聖杯まで繋がっているが、それももうお終いだ。

「繋がれるのは、ここまでみたいね」

「……………」

ギルガメツシユは何も言わなかった。

この別れは永遠の別れではない。遠い未来でまた逢う誓いだ。それを分かっていたから

「……………リエル、最後に一つ聞かせよ」

「？」

「貴様は我が……………我が王でよかったか？」

その言葉にリエルはクスツと笑いながら口にした。

「当然だよ。貴方なら越えられるって信じてるから」

額を当てて、リエルは当然の如く言った。

その言葉にギルガメツシユの目からは涙が溢れていても、笑っていた。これは最後の

んかじゃないって、分かっていたから。

ギルガメツシユはリエルを力一杯抱きしめた。

「——リエル、我は必ずお前を迎えに行く。だから、待っている」

遠い星だろうと、どんな所に居ようと必ず迎えに行く。

ギルガメツシユはまた遠い未来の約束をした。

「ははっ、待つてるよギルガメツシユ。星の下で、私は貴方を——」

最後に笑いながら泣いていた。

最後に告げたリエルの言葉が途切れ、ギルガメツシユの身体は白い世界から消えていった。

目を覚ますと、自分の右手にはリエルの創った魔杖が収まっていた。神々が用意し

た鎧はもう無く、人としての王の姿にギルガメツシユは変わっていた。後ろに立つエルキドウはギルガメツシユに問う。

「……もう、良いんだねギル？」

「……ああ、もういいさ」

それ以上の会話は、必要なかった。ウルクに向かつて歩き出すギルガメツシユとエルキドウ、託された巫女であるシドウリは静かに後ろへと付き添った。

「……どうするおつもりですか」

「決まっておろう。リィエルが成した事を引き継ぐ。神の時代は終わった。これより人の時代を築き上げる。我は、王なのだからな」

最後まで自分を友達と呼び、最後まで自分の国を守り続けた巫女が居た。自分が王でよかつたと心の底から言ってくれた人が居た。

だからもういいのだ。後悔なんてすることが惜しいくらいだ。

「民は、反対するでしょう」

「わかっている。シドウリ、エルキドウ、手を貸してもらおうぞ」

リエルが守り続けたあの場所を無駄にはしない。

三女神にティアマト神、異端の存在に人類史の崩壊、定められた未来を覆さなくてはいけない。

命をかけて守り抜いたリエルの行為を無駄にはしたくない。だから、千里眼で見える未来の絶望など覆して見せる。

「行くぞエルキドウ、シドウリ、今こそ王の帰還だ。託された物を手に出来たのだからな」

託された想いも、願いも我儘も、ギルガメツシユは全て受け止めよう。それが王の度量という物だ。

ギルガメツシユはもう失敗しない。

この先に何が起きようと、

「待っている。必ず——」

約束を違わないと誓ったのだから。

「行っちゃったな……」

私は未だに白い世界で立ち続けていた。

聖杯の中は何も無くて、自分が描いた星の空を眺め続ける。

「ギルガメツシユ……」

この気持ちは、まだ閉まっておこう。

今の私には似合わない。この感情も、胸の痛みも、愛おしく思えてしまうから。今はそれだけでいいのだ。

約束したのだから。

星の下でまた会えると約束したから。

だから……

「次逢う時は、必ず伝えるから……」

全く、厄介な人を好きになってしまったな。

これは、英雄の物語ではない。

国を愛し、彼女は戦ったかもしれない。

けれど、それは一人の王の為に、と。

彼女はただ待ち続けた。

彼女が彼の前から居なくなっても。

彼女は今も、変わらず待ち続ける。

ただ恋焦がれた女の子の物語だった。

設定集

星の巫女リエルのプロフィール

リエルとは

人間として生まれ、精霊として人を惹き、偉大な王と優しき友と一緒に明日の世界を約束した星の巫女。

神々により生み出された2人に比べたらちっぽけな存在かもしれない。

それでも遠い2人の隣を歩き、最後は人の時代を世界に示したウルクの宮廷魔導師として戦った。

私が愛した世界から消えたとしても――

私は星の彼方で彼を待ち続ける――

プロフィール

身長、体重 163cm、50キロ 出典 ギルガメツシュ叙事詩 地域 ウ
 ルク・バビロニア 属性 秩序・善 性別 女性 イメージカラー 銀・蒼
 特技 業務・魔術理解 好きなもの ウルクの全て 嫌いなもの 傲慢に天上から
 見下ろす神

人物：

優しくて人間味が溢れた女の子。長い銀髪に星のように輝く蒼い瞳、可憐さとギルガメツシュさえ見惚れる美貌を持ち、真面目で怒る時はしつかり怒り、笑う時は楽しく笑う。ギルガメツシュを叱る事も多々あってお母さんのような存在に見えるとの事。

やったねエミヤ！お母さん属性が増えたよ！！

最初の魔術師であるリエルは魔術構造を数秒で理解し、自分の魔術として扱う事が出来る。魔術を研鑽する魔術師にとって、リエルは魔術の原点を見ただけで理解し、あらゆる知識を持って同じ原点を再現するチート巫女。まあギルガメツシュの宝物庫にある全ての魔導書を理解したから是非もない。

判断力、知識量は凄いがギルガメツシュに振り回されていたせいか偶にやらかす。イシュタルの求婚の時とか、あの時は凄く後悔して寝れなかつたらしい。

もし召喚されたらマスターに従いはするが、人道に背く行為を命じられたら一切従わ

ない。そういう意味では魔術師と相性が悪い。召喚されたら自分で魔力を補えるから大したデメリットではないらしい。

聖杯に願う事は2人に会うか、受肉の2択。待つか、会うかは2人の内1人でも召喚されたらその時の聖杯戦争による。

正体：

『惹き寄せる力』を持つ精霊と人間の混血。正確に言えば半受肉精霊。

だが、自分が精霊だと言う自覚は全く無く、幼少期はただ歌う事が自分の喜びであり、登場してはいないが街角の花屋のお婆さんに育ててもらい、14歳にしてギルガメツシユに宮廷魔導師としての道を示され、住む場所を城へと移された。お婆さんには週に3回は会いに行ってた。

『惹き寄せる力』は精霊の中では異端であり、魅了とは違い『そのものを見ただけで勝手にかつ強制的に好き』と認識してしまうらしく制御かつ制限が出来ない。リエルは半受肉精霊である為、その力は歌う時のみ発揮していた。

『星の巫女』の名は『天の楔』と『天の鎖』に並ぶように民が吹聴したものだ。ただ本人は照れ臭いながらも気に入っており、ギルガメツシユやエルキドゥも似合っていると言われた。

同じ天の文字をつけるなら『天の誓い』と言うべきかもしれない。約束を守り抜き、誓いを守り抜いた彼女にふさわしい名前だ。

能力：

キャスターと言う枠組みで考えるなら全てにおいて一線を画す。ありとあらゆるものに繋がる魔杖を使いこなし、近接戦はエルキドゥと対等に渡り合え、遠距離戦では物量で圧倒するギルガメッシュに物量の魔術をぶつけて相殺する。更には宝石剣と同じように『並行世界から大気のマナを収束』が出来たり、魔杖の力を自分に繋げ、集めた魔力を我が物として使える。回路の強度はEXと言うべきだ。

Arts2 Quick Buster2

適正クラス：キャスター・ルーラー

☆5 (Lv90) HP14863 ATK11508

ステータス 筋力 耐久 敏捷 魔力 幸運 宝具 リイエル CB B

EX B EX

原初の

魔術師（EX） リィエルは神代における原典クラスの魔術を全て行使できる。それは未来の世界の魔術であろうが、魔術の原点を全て記憶している以上、どんな魔術でも基盤が見破られ、行使された魔術をそのまま返されてしまう。ソロモンが魔術を人の領域として築き上げたならリィエルは魔術の全ての原典を人の身で理解した同じく常識を超えた魔術師なのだ。

・味方全体の宝具威力をアップ（3T）& amp; ;宝具使用時のチャージ段階を1引き上げる（1T）& amp; ;スター獲得（15個）《チャージタイム7↓5》

精霊の

魅了

（D）（EX） この力に関してはリィエル自身が歌わなければ使う事が出来ない上に、精霊としての自覚が薄い為ランクは低い。しかし、それでも「ありとあらゆるものを惹き寄せる力」はランクが低くとも歌を並行世界上で束ねる事でランクが変わる。

・敵全体に中確率魅了付与（1T）敵全体の防御力ダウン（3T）2ターン後、宝具『エ神代ヌの終幕マを告げるエ人理リの裁きシユ』の発動をセット。《チャージタイム8↓6》 星の巫女（EX） ギルガメッシュに宮廷魔導師として命じられたリィエルの逸話がスキルになったもの、ウルクを防衛する為に戦士たちにリィエルの力を持たせる事で兵士達は一騎当千の力を発揮し、数の不利を覆した逸話はリィエルがウルクを愛し、ギルガメツ

シユとの誓いを守り抜いたと言うリィエルの最大の神話である為、ランクは規格外とされている。

・味方全員の（ウルクを愛する者）のNPを増やす（50%）。自身にガッツを付与（3T・HP1） 《チャージタイム8↓6》 道具生成（B） 魔術師の保有スキル、リィエルはある程度なら何でも作る事が出来るが、必要性を感じないものを造らない為、ランクはそれ程高くない。

・自身の弱体付与確率を少しアップ。 陣地作成（A++） 魔術師の保有スキル、自らに有利な陣地を作り上げる。 “工房”の形成が可能。 Aランクともなると「工房」を上回る「神殿」が作成可能となる。 リィエルの場合、ウルクの領域そのものを工房とする事で半永久的にウルクに結界を張り続ける事が可能だった。

・アーツ性能を少しアップ。 半受肉精霊（B） 虞美人と同じく自然界とマナを共有できる精霊種であるため、魔力を自らの体内に蓄えるのではなく、外界から無尽蔵に汲み上げることが可能。 リィエルの場合は惹き寄せる事によって外界から魔力を得る事が可能だが、それは歌を歌ったときにしか発動しない上に、意識的にそれを制御出来ない。 まあ魔杖があるから問題はないらしい。

■ ス ■ 自身に毎ターンNP獲得状態を付与（獲得量3%）

■ 星の^{タイ} ■

■ 強 ■

(■ ■) リリエルの中で唯一理解不明のスキル、神でもなければ吸血鬼ですらない。半受肉精霊とは言え人の身で天上すら届き、世界さえ1人で滅ぼす力を持つ存在が何故生まれたのか。ギルガメッシュもリエル自身も知る由はない。「世界が生み出した一つの存在であるにも関わらず、世界を滅ぼす力を持つ存在」と認知され「圧倒的な知識から圧倒的な不条理を覆す力は抑止力の干渉すら超えた異端な存在か、世界を見定め護る為に存在するにも関わらず、自身が望むものの為に世界すら敵に回す矛盾を抱えた十二カ」と言う意味合いらしい。ある意味世界のバグに近い。結局の所、スキルの詳細については未だ正確に判明はしていない。

・確率でスター獲得(5個)自身に『人類の脅威』特攻を付与(30%)

宝具：

『ユニバース・ワン
白き世界の二つ星』

* ランク：EX

* 種別：対界宝具

* レンジ：――

* 最大捕捉――

ギルガメツシュの宝物庫に持て余していた魔杖。

ギルガメツシュでさえ素材すら千里眼で見通す事が出来なかつた魔杖であり、その力だけ言えばギルガメツシュの『乖離剣エア』に匹敵する。

詳しく詳細は未だハッキリしていないが、ギルガメツシュの持つ乖離剣が『全てを破壊するもの』ならリエルの持つ魔杖は『全てと繋がるもの』だと言う。

宝具：

『^{アナザー・オブ・バビロン}私を繋ぐ世界の全て』

* Arts 宝具

* ランク：EX

* 種別：対界宝具

* レンジ：10〜200

* 最大捕捉：10000

『私の声は世界を繋ぎ、私の世界は私という可能性の一つ——』

真名開放したその能力は「ありとあらゆる世界や可能性に接続」する力。

それはつまり自分がこうしていたらというifの世界や、自分に起こり得た別の可能

性。即ち幾多の並行世界に接続し、自分がこの場所で「こうしていただく」という「ありとあらゆる結果や過程を現実につ張り出す」と言う事が可能とする宝具。

勿論、並行世界から大気中の魔力を取り出して持つてくる事や、グラガンナに「こういう攻撃を並行世界でしていた」と言う結果を引っ張り出して魔法陣を多数、しかも詠唱なしで出現させる事も可能だ。

これは魔術とリエルは称しているが、後世ではこう名付けられる。

「並行世界の運営」、即ち第二魔法である。

余談ではあるが、リエル自身は並行世界を移動出来ず、あつたであろう現象や過程、もしくは並行世界の大気中のエーテルを引きつける事しかできない為、リエル自身が魔法使いと言われるとそれは違うらしい。

・味方全員の攻撃力アップ（3T）& amp; 敵全体に超強力なダメージ& amp; 自身にNPを少し増やす（10%）

第二宝具

『^エ神代の^ス終幕を^マ告げる^エ人理の^リ裁き^{シユ}』

* B u s t e r 宝具

* ランク：EX

* 種別：対肅正／対星宝具

* レンジ：測定不能

* 最大捕捉：測定不能

—— 私は世界と共に在り

—— 私は歌い、世界は踊る

—— 私は星の灯火を人の時代に移し

—— 神の時代の最後の星となろう

存在しない筈のリエルの第二宝具。

リエルの最初の精霊としての本質が「惹き寄せる力」であったことで、リエルはありとあらゆる全てを惹き寄せる。「惹き寄せる」と言う事はつまり「誰からも愛されて、誰からでも全てを手に入れる事」が出来てしまう。自分と言う人間に惹かれてしまえば、相手を思うがままに出来ると言う規格外の力を持つ。

リエルはそれを無意識のうちに歌にする事で発揮する事が出来ていたが、自分の意思で使用出来るものではなく、あくまで歌うときのみそれが発揮されていた。

リエルは幾多の世界の自分と繋がり、幾多の並行世界で歌うリエルの声を一つの世界に収束させる事によって、星という巨大なものまで惹き寄せたのだ。

だが、強大すぎる力のせい、魔術回路が殆どが壊死している上に威力が強すぎてリ

リエル自身もその惹き寄せた星から守る術は無いらしい。

・神性特攻を付与（200%）& a m p 『星の脅威』特攻を付与（200%）& a m p ; 敵全体に超強力な攻撃& a m p ; 自身に即死付与【デメリット】

メリット

・単体でもクソ強い。

・ギルガメッシュとエルキドゥが居る時、絶大な力を発揮する上にエルキドゥのNPの問題とギルガメッシュのスキルの為のスター獲得の問題を埋めている。

・周回でも高難易度クエストもどちらにも運用できる。

・キャストークラスで珍しい攻撃型のサーヴァント。宝具もA r t sやB u s t e r に変わるから組み合わせ次第では面白い。

・星の脅威（ビーストや吸血鬼）に対する特攻が場面で刺さる。

デメリット

・呪い、火傷攻撃には弱い。弱体耐性や無効がない上に回復手段を持ち合わせていない。礼装はアトラス院がベスト。

・ギルガメッシュとエルキドゥが居ないと十分な力を発揮しない。

・最大宝具の使用条件が2ターン後だから使い所が難しい。

会話集

召喚時

「サーヴァント・キャスター。真名はリエルよ。星の巫女と言えば分かるかしら……？まあ、よろしくねマスター」

通常会話

「私の歌が聞きたいの？ふふつ、じゃあ周回が終わった後にマリーとアマデウスと一緒に歌ってあげる」

「あまり無理はダメよマスター。貴方は私と違って人間なんだから。えっ？私に言われたくはない？私無理してるかしら……」

「これでも神代に生まれた魔術師だもの。教え方が上手いのは魔術の全ての原典を知ってるからよ。少しずつ教えてあげるわ」

「少し疲れたわ。周回も楽ではないのね……まあギルに比べたらまだ優しい方だわ」

聖杯にかける願い

「そうね……受肉かしら。受肉した後には約束を果たしたいから、あの2人が召喚されるのを待ち続けたいかな？まあ現代を見てみたいと言う欲もあるけど」

好きなもの

「好きなもの? そうね……ウルクは当然として、子供とか可愛い動物とか好きよ。意外かしら? えつ、猫カフェというものが現代にはあるって? 詳しい話を聞きたいわ」

嫌いなもの

「うーん。名指しならイシユタルだけど、イシユタルの器の子は嫌いになれないとか。と言うよりあのイシユタルをあそこまで抑えられてるのは凄いなと思うわ。まあ、でも好き勝手やる馬鹿な神は嫌いよ」

イベント

「騒がしいけど……また新しい出会いの予感がするわ。少し楽しみね」

誕生日

「誕生日おめでとうマスター。今日はマスターがしたい事を手伝ってあげるわ。プレゼント? ……ふふ、今は内緒。生まれた時間にちゃんと渡すわ」

ギルガメツシュ(子ギル)

「……………嘘でしょギル。いや貴方にこんな可愛い時代があるなんて……! どうして子供の頃に出会えなかったのかしら……!! まあこれを見たら成長する過程を知りたくないというか……………」

ギルガメツシュ（弓）

「この頃のギルはまあ我儘だったしね。何となくだけど帰ってきた気分だね。まあ、エルと3人で組んだら怖いもの無しだし、また3人で時間を過ごせるなんて思わなかったわ。ありがとうマスター。……久しぶりにバターケーキでも作ろうかしら」

ギルガメツシュ（術）

「ハア……必死に目を逸らしちゃって。私は気にしないって言うのに。あの人が真面目になって、私も大人になったから会う事に未練があつたりするけど、私は私がかつたからウルクを護つたのに。まあ、その時に多分私はあのギルを好……やっぱなんでもないわ。乙女の秘密よ」

エルキドウ

「マスターありがとう。エルを召喚してくれて、私と戦つたりいろんな所に連れ出した思い出が多い私の大切な友達なの。約束、果たせそうで嬉しく思うわ。2人が揃えばどんな敵も倒せる気がするの」

イシュタル

「……普通に嫌いだよ。まあ好き勝手やる女神の代表だし。パーティーを組んだら狙っちゃいそうなもの。あつちは怯えてるようだし、出来る限り同じパーティーに入れないでほしいわ」

エレシユキガル

「あの神は好ましいわ。私が冥界で絶望した時に慰めてくれたし、冥界を繋ぐ鏡をくれたの。アレだけ優しくしてすっかりとした女神はあの馬鹿女神とは全く違う所ね。今度お茶でもしようかしら」

ジャンヌ

「わあ、可愛らしい聖女さんね。真面目そうでしたっか、でも少し迷いを抱えて、それでも強く有り続ける……ああごめんなさい。私にもそういう存在が居たから、少し思い出しただけよ。これからもよろしくね」

『両儀式』

「何というか……私と性格が少し似てるかしら。まあパーティーの時はお互いにやりやすかったし、えっ？あのパーティーでなんか負ける気がしない？どう言う事なのマスター？」

アナ（メドゥーサ）

「大人っぽく振る舞っているように見えるけど、やっぱり子供ね。あの子には花が似合いますわ。今度、花の冠でも作ってあげようかしら。私昔に母親の代わりをしてくれたお婆さんに教えてもらったの」

絆L v I

「私と友達になりたいの？ふふ、まだ駄目よ。ギルやエルと同じくらいの心の強さがないとね」

絆Lv2

「中々、男前になってきたじゃないマスター。あつ、今のはギル達には内緒ね。あの人なら嫉妬しそうだし」

絆Lv3

「ん……ああ何でもないわマスター。ただ、懐かしい人と貴方が少しだけ重なっただけよ」

絆Lv4

「大丈夫？無理はしないでね。私も貴方に倒れてもらうのは心が痛むもの。自分の限界以上を考えても空回るだけよ。私も手伝ってあげるから」

絆Lv5

「ウルクに居た時もここまでの友達はこの2人以来よ。マスター、貴方はこの星の巫女リエルが認める友達だもの。だから、頼りたい時は遠慮せずに言っつてね。私も力になるから」

絆礼装

礼装：未来への星の誓い

レアリテイ：☆4

コスト：9

詳細情報

そこに描かれているのは3つの拳が合わさっている情景だ。1人には赤い刺青のようなものがあり、1人には腕が鎖に巻かれていて、1人には腕に蒼のラピスラズリが埋め込まれたブレスレットがある。

それはまるでいつかまた会おうと言う別れにも見え、遠い未来への約束のようにも見える。この絵を見て分かるのは約束した3人しか居ないだろう。

スキル：リエル「キャスター」装備時のみ、味方全体の弱体耐性をアップ（30%）
B u s t e r、A r t s、Q u i c kの攻撃力アップ（8%）

幕間の物語

貴方を待つのを終えた日 前編

場所は召喚部屋、触媒は自分自身の縁、召喚サークルに石を投げ入れ詠唱を開始する。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷しく者。

汝 三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

詠唱が終わると召喚サークルが虹色に回り出す。

そこに姿を現したのは一人の女性。長い銀髪に星のように輝く蒼い瞳、可憐さと思わず見惚れてしまうほどの美貌を持つ女の人だ。

目を開けて、召喚された女性は告げる。

「サーヴァント、キャスター。リエルよ、星の巫女と言えば分かるかしら？」

カルデアに召喚された星の巫女リエルは朗らかに笑いながら知っているか質問する。

「リエルさん！ 召喚に応じてくれてありがとうございます！」

「あら、あの時のカルデアのマスターさんじゃない。私で良ければ力を貸しましょう」

カルデアのマスター、藤丸立香は召喚サークルからリエルを呼び出した。絶対魔獣戦線バビロニアで共に戦った時に縁が結ばれ、既にイシユタルやケツアルコアトル、エレシユキガルにエルキドウ、何とシドウリさんまで呼び出せていた。

英雄王に子ギル、そして賢王も既に召喚され、ウルク出典のサーヴァントはリエルが最後になっていた。どれだけ石を注ぎ込んだかは聞かないでおこう。

「……ねえマスター」

「賢王なら東のルームに居ますよ」

「まだ何も言っていないんだけど……」

「顔に出てました」

少し顔を赤くして睨むリエル。

リエルの全盛期は17歳だ。現代で言えば高校2年生、恋というものを意識し始める思春期でもある。ギルガメッシュ叙事詩のリエルの伝承は自身を聖杯に捧げた後、その聖杯はギルガメッシュが死ぬ前に聖杯を壊す事で魂は解放される筈だった。

だが、聖杯は壊されずにギルガメッシュの財の中に眠っていたのが本来の叙事詩だ。

リエル程の素質があれば『冠位』グラントにまで昇華される筈だが、それがされなかったの

はギルガメツシュが聖杯を壊せずに過労死してしまった事にある。故に魂は永遠にギルガメツシュの財の中の聖杯に眠る。永劫と言う長い年月をただ待ち続けた。それでもギルガメツシュと会う事は叶わなかった。

それが本来の叙事詩の結末だった。

永劫と待ち続けた彼女の魂は死後の世界に届く事が無い以上、英霊の概念に昇華される事はない。

スカサハに似てはいるが、全くの別物だ。自分で死ぬ事すら出来ないと言う意味ではスカサハと同じ。ただ魂がそこにあり、マーリンのように世界を眺める事も出来ず、魂という意識に形は殆どなく、ただ星の下で悠久を過ごしたら普通の人間では発狂どころではない。

魂には限界があるし、摩耗というものが存在する。聖杯の中で不死になろうとそれは変わらない。だからリエルは聖杯の中でただ迎えに来るのを待つ為に、聖杯で眠り続けていた。

リエルは賢王のギルガメツシュを探すべく、カルデアを歩き始めた。

たつたつた、と何かが近づいてくる気配を感じて、音のする方に視線を向けた。そうして、彼はゆつくりと目を見開いた。

「ギル!!」

「……………」

夢を見ているのだろうか、そう思って。けれど、それがすぐに錯覚だと理解もした。そんな、そんな彼女を見たギルガメツシユの胸に広がるのは、静かな絶望であった。

「やつと……………やつと逢えた……………」

久しぶりに話したかった。自分が居ない中でウルクはどうなったのか、エルキドウはカルデアに来てからどうなのか、色々とまた逢って話したかった。

だが、

「……………えっ?」

リエルが伸ばした手をギルガメッシュは振り払った。

それに対して動揺を隠せないリエルがいた。何かを間違えたのか。賢王のギルガメッシュはただ静かに悲しそうな眼をしながら、少しの怒りを目に浮かばせながらもリエルに告げた。

「ギ……………?」

「……………今の貴様に話す事はない」

自分が伸ばした手を振り払われた事に困惑する。一体何が間違えたのか。一体何故振り払われたのか理解できないまま、リエルはただ固まった。

「……………済まん」

ギルガメッシュらしくない謝りをしながら、そう言って賢王は背を向けてリエルから離れていった。ただ、振り払われた手を見ながらただ何がいけなかったのか理解でき

ないまま、涙が溢れ落ちていた。

「むっ?」

「んっ?」

英雄王のギルガメッシュとエルキドゥはただ呆然としながらも歩くリイエルを見つけた。2人が声をかけるとリイエルは俯きながらも足を止めていた。

「おお、貴様も召喚されたのか、リイエルよ」

「久しぶり、リイエル。君もマスターに召喚されたんだね」

「……………」

リイエルが顔を上げると、ポロポロと涙が溢れ落ちていた。

それにギョツとする2人。リイエルは無言のままエルキドゥの胸に顔を埋めて泣きついた。

「……？ どうしたと言うのだ。貴様らしくない顔をしておって」
「リエル、どうしたんだい？ 悲しい顔をして」

2人は心配し、リエルに声をかける。だがリエルは泣いていて声すら出せないでいた。英雄王のギルガメッシュは大丈夫なのに何故賢王であるギルガメッシュはリエルを払い除けたのか分からない。

だから無意識にギルガメッシュではなくエルキドゥに泣きついた。

食堂でギルガメッシュとエルキドゥ、リエルは座り、リエルはチビチビと紅茶を飲んでいた。エミヤの作った紅茶なせいか、ギルガメッシュは要らんと一蹴し、エルキ

ドウはココアを貰った。

一体何があったのかをリイエルは話した。

「成る程、賢王の我が貴様を拒絶した、と。」

——ギルテイ死罪だエルキドウ。早速賢王の我を潰しに行くぞ」

「ギルだけにかい？」

「誰が上手いことを言えと言った戯け。幾ら我とて我が友を泣かすとは万死に値する」

「ちよちよ、ちよつと待った！ 物騒過ぎるしマスターさんに怒られるからダメ!! 私

は、何で賢王のギルが私を拒絶したのか知りたくて……」

「……まあ、あのギルは僕も避けているからね」

このカルデアでは「我にエルキドウと話す自由はない」と語り、距離を置こうとしている。それはエルキドウの死をきっかけに、賢王として成長した彼にとって、それは許されざることであると見なしているからだ。バビロニアのレイシフトでも未だに杉の森には行ったことがない。

エルキドウも「自分はただのシステムであるべき」「きつと彼と一緒にいたら、また共に冒険の旅に出て、彼を連れ出してしまおう」と遠慮している。そこは英雄王のギ

ルガメツシユを連れて冒険の旅を誘っているからエルキドゥは気にはするが大した関係ではないのだ。

「まあ……大体は理解した」

「本当かいギル？」

「恐らく、リエルを拒絶と言うより、果たせなかった事への悔恨がリエルと我自身が逢ってはいけけないと思わせているのだろう」

「悔恨？」

「我も賢王時代の記憶は持ち合わせている。その中でリエル、貴様自身と約束した事があったであろう」

「……………そう言う事ね」

ギルガメツシユとリエルが約束した事はギルガメツシユが聖杯のリエルと話した際に『必ず迎えに行く』と約束していた。

だが、賢王ギルガメツシユの結末は『迎えにいけないかった未来』こそ本来の叙事詩である為、ギルガメツシユはリエルを拒絶したのだ。特異点ではリエルの魂が眠るウルクの聖杯は消えて、リエルは死後の世界と契約し、英霊に昇華したのだ。

だが、それは稀中の稀で特異的にならなければ、リイエルと賢王ギルガメツシユは会う事は2度とない。だから賢王は避けたのだ。正確に言えば、自分に対する戒めのようなものだ。

「……馬鹿みたい」

「リイエル、一応とは言え同等の存在が目の前に居るのを忘れるな戯け」

ベシツとチョップされた。

大した痛みはないが、頭を押さえながら軽く睨む。ギルガメツシユはギルガメツシユと言うべきなのだろう。葛藤しているのもしょうがないのかもしれないが、私が許してゐるなら問題ないのに。

「……ギルのバーカ、過労死して剥げちゃえ」

「剥げぬわ、そして同じ事を2度言わすな戯け」

再びチョップされた。今度は痛かった。

「……………らしくないわね」

「むっ、貴様かイシユタル。何用だ、我に首を差し出す覚悟は出来たと言うことではあるまい」

「物騒だわ!?」 じゃなくて、あの子の事よ。アンタは頑なに避けてるけどあつちはそれで泣いたのよ? ただでさえ私と戦った時すら泣きもしなかつたあの子が」

わざわざイシユタルが賢王ギルガメツシユの前に立つ。イシユタルと賢王ギルガメツシユは関係上最悪なのだが、見たら殺しにかかるエルキドウのような感じにはならない。あくまで王、度量も器も大きくなって王など務まらない。

ため息をつきながら口を開いた。

「……………我が友を傷つけたのは認めよう。だが、よもや貴様がそれを言いに我の前に来るとは思えん。何故貴様が奴を構う? 殺されたせいで会う度にトラウマに怯えていると雑種から聞いたぞ」

「うっ、てかそれはしょうがないでしょ!? アンタも一回星に潰されてみれば分かるわ

よ!!」

「……で、2度も問いが必要か？」

「……まあ、今はこの依代のせいで性格が引つ張られるのよ。反省くらいはしてるつもり。まあ、だからと言う訳ではないけど、私を負かしたあの子のあんな顔見たくないだけよ」

「フン……」

イシユタルを無視してギルガメツシユは仕事に戻った。

ギルガメツシユ自身も理解している。本当は傷つけたくはなかった。だが、リエルの死をきっかけに賢王となり、リエルを迎えに行く事すら出来なかった自分にその資格はないのだ。

約束を破った自分にリエルと言う存在は遠すぎる。

ギルガメツシユでさえ唯一届かなかった高嶺の花のような彼女を自分は愛してはいけないのだ。

2人の関係は未だ拗れたままだ。

……何処かで覗いていた夢魔が視ていた。

星の巫女リィエルと賢王ギルガメツシユの関係を1番知られたくないロクデナシに
知れ渡った事を2人は知らない。

「おやおや、コレはまた面白……少し悲しい事が起きてしまったね。ようし！ この私
が一肌脱いであげよう!!」

ロクデなしの夢魔がハッピーエンドを作る為、鼻歌を歌いながらカルデアを歩き始め
た。

この後、盛大にギルガメッシュに殺されかける事になるのを彼はまだ知らない。

貴方を待つのを終えた日 後編

星の巫女リイエルは特異な存在だ。

その例えの代表が出典だ。ギルガメッシュは神に創られた星の抑止力を背負わされ、『天の楔』として世界を見定める半神半人。エルキドゥは神々によってギルガメッシュを諫めるために造られた『天の鎖』。この2人に関しては神から造られた存在である為、強さも納得出来る。

だが、リイエルは精霊である事は判明しているとはいえ、どんな精霊から生まれた受肉精霊なのか判明していない謎の少女なのだ。

『惹き寄せる力』を持つ精霊に名前はなく、邪精霊と言うには邪な雰囲気を持つような存在でもない。精霊の世界ですら異端な存在は一体どこからやってきたのか。

それが関係しているせいか巡り会う事はすれ違いで終わってしまう。

それはバッドエンドかも知れないが、それが現実だ。

ならば、ハッピーエンド好きの夢魔はバッドエンドで終わらせない。

理由は簡単だ。

「ハッピーエンドが見たいから☆」

理由は本当にクズでロクデナシだ。

「リエルさん！」

「任せて」

一瞬で構築された魔方陣から大量の魔弾を射出される。

それだけで敵が一掃されていく。破壊力、判断力はギルガメッシュ叙事詩の中でも最高位の存在であるリエルにとって、この程度造作もない。圧倒的な物量、全知たる慧眼はギルガメッシュ、戦闘力、天性の勘、戦場を駆け抜ける圧倒的脅力に関してはエルキドゥが上だ。

「エル、行くわよ」

「ああ、分かったよ」

マスターである藤丸立香はリエルとエルキドゥと一緒に種火周回にレイシフトしていた。因みに英雄王は「何故雑種の手伝いをせねばならん」と拒否し、隣にいたエルキドゥが代わりに行く事になった。

「……………」

「リエル、大丈夫かい？」

「えっ？ ああ、大丈夫よ」

リエルは最近、やけにブーツとして上の空だ。

別にブーツとしながらも敵を倒しているけれど、何というか空元気に見える。判断力、思考力、聡明さならギルガメッシュの次にある彼女だが、あれこれ考えているけど纏まらないから力任せに攻撃し、それでも倒せている状態だ。

「エルキドゥ、あれ大丈夫なの？」

「問題はない……と言いたいけどアレばかりは時間との問題だしね」

エルキドウも最初は渋々だったが受け入れるのに時間を要した。賢王ギルガメツシユはかつての友を乗り越えて進んだ事を許せない以上、関わる事はないだろう。

「ハア……」

「リイエルさん、大丈夫ですか？」

「ん。大丈夫よマスターさん。そっちは怪我してない？」

「は、はい大丈夫です」

藤丸立香^{マスター}でさえ気付いているリイエルの空元気な振る舞い。まあ気を遣わないように元気なフリをしているようだけど、気を抜くため息をついている。

「フムフム」

それを後ろから見るロクデナシが一人。

当然周回で王の話をしたマーリンはリイエルやエルキドウと同じく種火周回で来た

のだが、マーリンの場合いつも乗り気じゃなかったのに今回ばかりは少し乗り気だ。

空元気なリエルの後ろ姿を見ていると、首筋にジャキツ！ つと言う音が聞こえた。エルキドウが腕を剣に変えてマーリンに向けている。

「あまり不埒な視線を向けない方がいい。貴方は油断ならないからね」

「おや酷い。私はあの空元気な少女を励まそうとしているのに、ご不満かな？」

「彼女に手を出してみるかい？ 胴体と首が離れても構わないなら別にいいけど」

エルキドウは今回ばかりはマーリンを警戒していた。

マーリンはリエルと同じ『冠位』^{グランド}の素質を持っている。リエルの強みは魔術もそうだが、ギルガメツシュの宝物に関わった事でありとあらゆる原典の武器を持っていた。自分を引き出せる事だ。

リエルはギルガメツシュに下賜としてあの魔杖を選んだが、並行世界では英雄殺し、龍殺し、神殺し、聖人殺し、数え上げればキリの無い程の武器を手にしていた。

ギルガメツシュと同じく弱点となる原典を引っ張り出し、あらゆる敵の弱点を引き出せると言う事だ。

逆にマーリンは対照的な存在で、実質的不死身であり、アーサー王のように『人為的

に王を作り上げる』と言う世界有数の『英雄作成』キングメーカーであり、世界すら欺く幻術の使い手。その力はあのティアマトさえ夢に引き込み、眠らせると言う規格外な事をやって退けた。魔術も剣の腕も超一流、リエルが力をなす魔術師ならば、マーリンは心を掌握する魔術師だ。根本的な違いと言えるだろう。

だが、性格については趣味で人をかき乱すクソ野郎なので、エルキドゥは今回ばかりはリエルに悪影響と思い、警戒していた。

「ヤケに好戦的だね。今の彼女を私がかどうか出来る方法を知っていると云うのに」

「……信用ならないね」

「結構さ。信頼があるなら信用は不要さ。何せ私は夢魔だからね」

夢の中を渡り歩く悪趣味な悪魔。

夢魔と人間の混血であるマーリンはハッピーエンドが見たい為に動く。エルキドゥはリエルをあのままにするのは少し嫌だと感じている。互いにリエルの問題を解決したいという意味では利害は一致している。

「…………ふああ」

リエルは目を擦り、ベッドから起き上がる。

サーヴァントに睡眠は必要ないが、最近のモヤモヤした感情がストレスになり、眠る事に躊躇が無くなっていった。

上半身を起こすと、リエルはカルデアが用意した部屋ではない事に気付いた。

「っ!？」

敵襲に反応出来なかった。

幾らなんでも気が抜け過ぎだ。辺り一面には何も無い空間、星空しかない白い世界。それはリエルが永遠と居続けたであろう場所。

「聖杯の…………中？」

「(づ)明察」

リエルが振り向くと、そこに居たのはマーリンだった。

マーリンの十八番である夢へ引き摺り込む病魔としての力をリエルに使った後、結界を張っていたであろう聖杯の保管庫に侵入し、無断でレイシフトを使い、リエルを聖杯の中に閉じ込めた。

カラカラと笑いながら近づくマーリンにリエルは警戒しながら片手を向ける。魔杖は無いし、呼び出せない。マーリンの策略か知らないが黙っているほどリエルは気が長くない。

「……何のつもりかしら。同じ『冠位』に選ばれる私が気に食わないからとか言うつもりじゃないわよね？」

「いやいや、そんな訳ないさ。私も目的があってやっているが、私個人の私怨や感情は一切ないよ」

「こんなもの……っつ!？」

聖杯から抜け出そうと外部に干渉しようとするが、弾かれた。

魔杖が無い今、リエルの繋がる力は強くない。とは言え、抜け出せるほどの干渉は可能な筈だ。だが、外部に干渉した瞬間、まるで雲を掴むような感覚に襲われる。

「結構苦勞したんだよ？ 聖杯に君を封じ込めた後、外の世界を夢の世界で閉じ込めて、内部干渉が出来ないようにするのは私でも骨が折れる作業だったよ」

「……何が目的？」

「さてね？ ウルクの聖杯の時は君の魂があつたから聖杯の中でも長く存在したけど、今の君はサーヴァントだ。魔力も1日したら限界を迎える」

「つつ!!」

それはつまり座に帰ると言う事だ。

冗談じゃない。やっとギルガメッシュに会えたのに、やっとエルキドゥに会えたのに、やっと想いを伝えられると思つたのに、何も無く座に帰り、悠久の時をまた過すごさないといけないなんて……

「ふざけるなっ!! 夢魔のロクデナシ!!」

「精々、迎えに来るのを期待して待つてるといい。じゃなきや、君はサーヴァントとして死ぬからね」

「待つ——!」

魔術で拘束しようとしたが、時既に遅く……いや、最初から幻術で話していたのだろう。今の自分は聖杯の中、自力で抜け出そうと内部から干渉するが、触れようとしているものに触れられない感覚で出る事は難しい。いつそ第二魔法を行使して、聖杯を壊そうと考えるが、魔術王の聖杯が内部から暴走したら大変な事になりかねない。

リエルは魔力を出来るだけ外部に漏らさないように、誰か助けに来てくれる事を信じて待っていた。

「……ハア……よもや夜が明けるとはな」

賢王ギルガメッシュはカルデアに来てから、現場を指揮している。七つの特異点が消えた後の空白の一年、魔術協会の報告は勿論レイシフトについてや、サーヴァントの確認、機材の確保に夥しい数の書類整理、それはウルクと変わらず忙しいものだった。

「流石に我も疲れた……寝るとするか」

賢王が宝物から取り出したベッドに身体を沈めようとした時、部屋の扉が勢いよく開き、肩で息をするマスター、藤丸立香がギルガメツシュの元に走り込み、部屋に押しかけた。

「ギルガメツシュ王!!」

「……雑種、今の我は機嫌が悪い。寝間に押しかけたその不敬、貴様一体何をもって償う」

「リィエルさんが……リィエルさんが居ないんです！ カルデアの何処にも!!」
「つつつ!?!」

賢王は立ち上がり、マスターに近づく。

リィエルが突然居なくなっただと？ あり得ない。リィエルは突然居なくなるような人間じゃないし、座に帰るにしてもマスターに一言も言わずに帰るなんてあり得ない。

ギルガメツシュは徹夜明けの頭を目一杯回しながら考える。

「居ないとはどう言う事だ……」

「他のキャスター達に調べて貰いましたけど、カルデアにリエルさんの魔力は感知できない上に、消えた後の痕跡すら無いんです!!」

「となると……高位のキャスターかアサシンに大体絞られる筈だ。情報抹消の力を持つアサシンでリエルを襲う程の私怨を持つような輩は居ない。ならば……あの夢魔か」
「マーリン……!　　そう言えば今朝から見当たらない!？」

マーリンならばリエルに気づかれないで消える手腕があるだろう。腐っても『グラント冠位』。ギルガメツシユより英霊としてはマーリンの方が上だ。夢の世界を渡り歩き、夢の中で感情を喰らう人の皮を被ったエイリアン。非人間なら罪悪感もギルガメツシユへの恐怖心も無く、リエルを連れ出す事が出来るだろう。

「王様、千里眼は?」

「……ノイズで見えん。マーリンが何か細工したな。雑種、令呪を使いマーリンを呼び出せ」

「はい!　　令呪をもって命ずる!　　来い!　　マーリン!」

令呪が赤く光り、マーリンが呼び出される。

しかし出てきたのはマーリンではなく、一枚の紙だった。令呪による干渉が効かない例外はBBやギルガメッシュの他にも少数居る。マーリンも例外ではない。

「紙？」

代わりに出てきたのは折り畳まれた紙だ。ギルガメッシュは拾い上げ、広げる。そこにはマーリンが書いたような字でこう書かれていた。

『面白そうだから手を出しちゃった☆』

ブチッ!!!!

賢王の顔は見た事のない程、青筋を浮かべ精神が蝕まれるような圧倒的な静寂。それがどのくらい続いただろうか。

実際にはおそらく数秒といったところなのだろうが、藤丸立香には数分以上にも感じられた。もし本当に数分間も続いていたら発狂していたかもしれない。

「来ると思ったよ賢王様、リエルの事だろうか？」

「我を今すぐバビロニアにレイシフトさせよ!! 奴の事だ、大方リエルを隠した場所くらい分かるわ!!」

「はいはい。藤丸くん、ついて行ってあげて。幾ら賢王と言えどマスター無しじゃキツいだろうから」

「分かりました」

2人はリエルを探すべく、バビロニアにレイシフトした。賢王は既にリエルが何処に居るか分かっていた。それは最後にリエルと別れを告げたあの場所しかない。

マーリンは後で殺す事を決意したが、リエルがカルデアから消えたのが分かったのは半日前だ。急がないとリエルを維持している魔力が消え始めてしまう。

「ハア……ハア……」

何度も干渉するが綻びが少し出来ただけだ。綻びから結界を破る程の魔力は無い。

あつたとしても使い切つて外に出てもカルデアとは限らない。

「……………くっ！」

魔杖の魔力供給無しで長い時間粘つたが、リエルに単独行動のスキルはない。マスタアの藤丸が近くに居なければ魔力の維持が出来ない。このままでは確実に消えてしまう。

「つつ……………ギル」

もう待つのは嫌だ。

待ち続けるのは寂しい事だ。悠久の時を生きるのは果てしなく辛い事だ。やっと会えたのに、すれ違つてサヨナラなんてしたくない。

「ギル……………！」

魔力体であるリエルの体が徐々に薄れてきている。

時間にして18時間、綻びを作るのでさえこれだけ時間がかかったのだ。マーリンが嚴重に結んだ結界に内部から干渉して綻びを入れるだけ、偉業とも言えるが魔杖による魔力供給も出来ないリィエルにとってこれが精一杯だった。

「ギル……………助けて……………」

ウルクで一度も弱音を吐かずに守り続けたリィエルから溢れた小さな本音。消えていく身体に恐怖を覚えながら、涙が流れはじめた。魔力が無くなっていく。

ギルガメッシュに伝えられない事がまだ沢山あるのに……………。

「……………弱音など、貴様らしくないわ戯け」

突如、白い世界に罅が入る。

「我との約束を忘れたつもりか？」

そこから聞こえた懐かしい声。

青年のギルガメッシュより少し低く、リエルが待ち続けていた存在。来て欲しかったが、来ると思わなかった。自分のせいで私が死んだと思っていたから。もう関わる事すら無くなってしまうのかと思っていた。顔が涙でぐしゃぐしゃだ。もう一度だけ、ごく僅かな可能性に期待していたリエルにとって、1番に来て欲しかった相手。

「迎えに来たぞ。リエルよ」

賢王ギルガメッシュがリエルの前に立っていた。

数分前の事だ。

ギルガメツシユはヴィマーナを取り出してウルクから外れた土地。イシユタルとガラランナを星で潰し、リエルが最後にギルガメツシユと約束を告げた場所に向かった。その場所の名はカラヴィ、星の墓場と象徴としてシドウリが名付けた場所だ。

「やあ、待ちくたびれたよ」

ラスボス気取りにその場所に立つマーリン。

バビロニアにレイシフトした後、マーリンはこの場所でリエルを閉じ込めていたのだろう。夢の世界に綻びが生じる程、リエルの干渉は強かったのが予想外だった為、マーリンが近くで修復していくしかなかったのだ。

まあ、そんな事情はブチ切れの賢王と、聖杯を勝手に持ち出されて勝手使われている事を知ってブチ切れの藤丸と仕事に追われて忙しいダヴィンチに更に仕事を増やしたロクデナシに一切容赦をする気がない。

「藤丸、やれ」

「令呪をもつて命ずる。マーリン、その場から絶対に動くな！」

「なぬっ!?! ちよつ、それはズルいんじゃないか!?!」

「令呪をもつて命ずる。王様、宝具開放」

「フツ、分かつておるではないか」

一氣に令呪を使った藤丸。

だが仕方ない。このロクデナシのせいで色々大変になっているのだから。もはや手加減無し。出張ってきたラスボス感も強キャラの伏線も全力で無視。

『————矢を構えよ。我が許す』

「えつ、う、嘘だよね。いや確かに悪い事をしたと思ってるよ? けど、ほら。来るって分かつてたから……」

『至高の財を以つてウルクの護りを見せるがよい、大地を濡らすは我が決意!!』

「ちよつ!?! 待つて! 本當に待つて!! 幾ら不死身の私でもギルガメツシュ王の宝具は!!」

ギルガメッシュの号令で弩に装填された財によるウルク城塞からの遠距離爆撃。ギルガメッシュのみならず、神代を生きたウルクの民の総力までもが結集された驚異の砲撃。「王の財宝」を弩に装填し放つ使い捨てだが、ギルガメッシュの財宝の中には当然不死殺しが混ざっている。

一見不死身なマーリンだが、それを打ち込まれたらどうなるか。

『メラム・デインギル王の号令!!!』

だがそんな事一切気にせずにギルガメッシュは宝具を向ける相手に対する0・1割の敬意と9・9割の殺意をもって最大威力をマーリンに叩き込んだ。

「……これが、リエルを閉じ込めた聖杯か」

「ふあい」

マーリンは宝具を打ち込まれた後、天の鎖で縛り顔面が見る影なく腫れ上がるまで殴

られていた。まあ今回ばかりは藤丸も止めるつもりはなかった。

聖杯の中にリエルを閉じ込め、何重にも張られた結界の中に夢の檻を仕掛けている。ティアマトの時と同じくらいの強度を成しているが、外部からの干渉はかなり弱い。恐らくわざとマーリンがそう作ったのであろう。

「……雑種、そのロクデナシを連れて先に行け。其奴なら敵に遭遇しても回避できるであらうからな」

「……一時間待ちます。それまでに来てください」

「よからう」

藤丸はマーリンを引き摺ってカラヴィを降り始めた。

ギルガメッシュは膝をついて、結界を破り聖杯に触れる。そこから聞こえたのは、リエルの泣き声だった。

ずっと悲しかったのだろう。

ずっと寂しかったのだろう。

もしかしたら泣いていたのかもしれない。

それでも変わらぬ自分を待ち続けてくれた女が居た。あの時の約束は皮肉にもこの

状況と同じ、いつか辿っていたかもしれない聖杯に眠る彼女を解き放つギルガメッシュ
叙事詩の最後の1ページの神話。

「……………弱音など、貴様らしくないわ戯け」

それはずっと叶わなかった。

叶う事のなかった最後の神話。

「我との約束を忘れたつもりか？」

いつも可憐で星のように輝く蒼い瞳で、綺麗な声で歌っていた彼女をもう離れたくな
い。約束はこの時、果たされたのだから。

「迎えに来たぞ。リエルよ」

ギルガメッシュがリエルを迎えに行く最後の神話。

最後のページにはそうであって欲しいというウルクの願いが込められている。神話

の終わりは悲しいが2人の永遠の別れだった。けれど、もしも最後の1ページが書き加えられたなら……

ハッピーエンドで終わってほしかった、とある人は言っていたのかもしれない。

「……長い間、待たせてしまったな」

賢王とリエルは藤丸達の所に歩いて向かっている。ギルガメッシュがリエルの魔杖を持ってきてくれて魔力の心配もなくなった。だから少しだけゆっくり歩いていく。

「……少し、寂しかった」

「……そうか」

「でも……迎えに来てくれるって、信じてたから。迎えに来てくれた時は嬉しかった」

形はどうあれ、賢王としてのギルガメッシュはリエルを迎えに行く事が出来たの

だ。リエルは悠久の時を経て、ギルガメッシュに会う事が出来た。ギルガメッシュがリエルを解き放つ事が出来なかつた過去は確かに存在した。

けれど、いいのだ。

賢王としてのギルがリエルを想ってくれていた事は理解出来たから。リエルにとつてはそれだけで充分だったのだ。

「ギル」

てくてくと歩きながら、再び背後からリエルの声が。今度は一体何なんだと思いつながら賢王は背後を振り返ると――両手を広げて飛び込んでくる彼女の姿があった。

予想外の事態に少し動揺するが、不意打ちにも関わらずリエルの身体をしつかりと受け止めることができた。

「いきなり危ないであろうが……戯け」

「ごめんね。でもね、私どうしても伝えたいことがあったのよ」

長い間、ずっと伝えられなかった言葉。

永遠に伝えられるはずの無かった事だったが、この物語に存在しない最後の1ページがあるならば、最後のシーンの相場は決まっている。見せ物じゃないけれど、物語の終幕になる。

「迎えに来てくれてありがとう」

「約束……だったからな」

「あともう一つ」

「？」

頬は林檎のように赤くなりながらも、最後に伝えたかった小さな言葉を静かに耳元でリエルが伝えたかった愛をギルガメッシュに囁いた。

「私ね、貴方の事が——」

それが、2人の最後の神話だ。

君たちに幸運がありますようにと、星空が2人を祝福してくれているようだった。

幾千もの星を眺め、星の彼方にて待ち続けたリイエル。

最後に約束した願いを拾い、迎えに来たギルガメッシュ。

その2人の手が重なった長く短い時だった。

イベント会話集

リエル バレンタインイベント

———
誰かがいる……

———
———
マスターである藤丸立香はカルデアの廊下を歩いていた。

「あつ、マスターさん。止まって」

後ろから声がしたので振り返ると、そこには紙袋を持ってとてとと近寄るリリエルだった。紙袋には綺麗な包装で包まれたものが多く入っていた。

▶？どうしたのリリエルさん？

もしかしてまた王様達が？

「はい、これ。今日はバレンタインなんでしょう？」

リリエルは藤丸立香に紙袋に入っていたチョココレートの中で、少し大きめの箱に包まれたものを渡す。それはウルクでシドウリさんが用意してくれたバターケーキにチョコレートがトッピングされている。

「もし量が多ければマシユちゃんと一緒に食べて構わないわ。まああの子にはあの子で友チョコくらい用意してるんだけどね」

紙袋の中、全部チョコレート？

▶？誰に渡すつもりなの？

「そうねえ、先ずエルとギルは当たり前だけど、小さなギルくんとあの人にも、渡すつもり。あとは友チョコでエレシユキガルとゴルゴーン、ケツアルコアトル、シドウリ、さつき言ったマシユちゃん、『式』さん、あとは……まあ余ったらイシユタルにでもあげるわ」

大分作ったな。と心の中で呟く藤丸。

リイエルはウルクでは料理上手、シドウリさんにバターケーキを教えてもらったものがあるが、歳が離れたお婆さんに料理を振る舞っていたのもある為、家事はだいたい何でも出来る。

▶？成る程、賢王には特別なんだね。
流石、リイエルさんだね。

「ちよつ?! そう言うのは言っちゃ駄目!! 私だつて、全盛期で召喚されてるから貴方と同じくらい歳のなんだし……その……恥ずかしい……つて言うか……」

リリエルは俯いて指が不規則に動き回ってる。

こう見ると恋する乙女に見えて、藤丸でさえ恥ずかしくなってきた。リリエルが可憐で儂さを持つ一端を垣間見た気がした。

▶？可愛いですよ。リリエルさん。

これが萌えと言う奴か。

「あのねえ……!! マスターさん揶揄うのはやめて……! 私だって、そっちの方面には疎いんだから……その……ああもういいからニヤニヤしないでさっさと自室で食べなさい!!」

顔を真っ赤にするリリエル。

ただ照れ隠しでマスターを自室に繋げた転移門に押し込んだ。全く、恋愛に関しては魔術より難解だと誰が予想していたか。

ただ廊下で跪いて顔を押しさえる。

ただ顔が真っ赤になっていると鏡を見なくても分かってしまう程熱を帯びていた。

「全く……魔術より、この感情の方が難解よ……」

マスターの居ない廊下で一人呟いていた。

『星の可憐な乙女より×1』を

プレゼントボックスに送りました。

【チョコレートを渡した会話集】

子ギル

「わあああ!! ありがとうございますリリエルさん! わざわざ食べやすい大きさに作

られてるし、とつても美味しいです!! ホワイトデーに期待しててください!!」

ギル（弓）

「ほう、バターケーキにチョコとは。あの頃は偶に作っていたよなあ。ふむ、美味しい。しかも現代のコーヒーや紅茶の味にも変わっているとは面白い。良い献上物であったな
リリエル」

エルキドウ

「バターケーキかい？ リリエルの作る物は美味しいからね。えっ？ バレンタインデーで異性にチョコレートを渡す？ 現代の極東は不思議な事をするんだね。うん、あの頃を思い出すよ。ありがとうリリエル」

エレシユキガル

「えっ？ 私に？ バレンタインって異性にチョコレートを渡すってマスターから聞いたのだけれど……。えっ？ 友チョコ？ 友達に贈るチョコレートですって？ ……こんな私を友達と想ってくれているの？ ……そう、ありがとうリリエル。今度、お茶会でもしましょう」

ゴルゴーン

「むっ、何のようだ？ 何？ チョコレートだと？ 私にか……？ ……酔狂な人間も居たものだな。まあ、いいだろう。女神の捧げ物としては上々のものと見える。有り難く受け取ってやろう」

ケツアルコアトル

「ハ―イー！ 私、リエルにプレゼントがあるのデース!! あら？ リエルも私に同じチョコレートを、じゃあ交換しましょう!! 友チョコって何だか楽しい催しなのデース!!」

シドウリ

「リエル様？ ……これは、チョコレートですか？ バレンタインの友チョコと言うものですね？ なら私も用意しております。これが私の友チョコです。……ふふ、なんか照れ臭いですね」

キングウ

「……何のようかな星の巫女？ ……何これ？ チョコレート？ バレンタインだからチョコを送る？ はっ、やっぱり旧型の考えは理解が出来ないね。……まあ、渡してくれただけ感謝してやるよ。……その、ありがとう」

『両儀式』

「あら、私にチョコレート？ バレンタインは異性に贈るものなんじゃ……友チョコねえ。有り難く受け取るわ。こんな夢のような存在を友達と思ってくれているなんて、嬉しいわ」

イシユタル

「げっ……何のようかしらリエル。はっ？ 私にチョコレート？ 毒でも入ってるんじゃないでしょうね!? これ余ったからくれてやる、ってアンタ私の時だけギルガメッシュみたいじゃない!! い、いや別に文句はありません……はい……」

賢王ギルガメツシュ

「むっ、何の用だリエル。我は今忙しいと言うのに……。何？ チョコレートだと？ ああ、雑種どもの言っていたバレンタインと言う奴か。……。ほう。宝石箱のように

色々入れたのだな？ 着いてくるがいい。私の部屋で一緒に食べるとしよう、我直々にココアくらいなら出してやる。何？ 少し恥ずかしいだと？ 全く……愛い奴め」

F a t e / Z e r o 編 約束を果たす刻まで

それぞれの始まり

メソポタミアの時代、神々が存在し、怪物が猛威を振るった時代を続けた王がいた。王は友と出会い、巫女と出会い、怪物を倒し、友と別れ、巫女と共に約束した。

彼方にこそ約束した三人の英雄達。

バビロニアの神話に相応しい三人の英雄。

神々により生み出され、星を見定める為に王として君臨した男が居た。

『英雄王』名をギルガメッシュ。

王を諫める為に生み出され、友として王の隣に立ち共に世界を見た兵器が居た。

『天の鎖』名をエルキドゥ。

王に出会い、宮廷魔導師として2人の隣を歩く為、国を愛しては護り抜いた巫女が居た。

『星の巫女』名をリィエル。

三人は約束した。

遠い未来であってもまた巡り合う。また三人で明日の世界を見ようと約束した。

コレはそんな三人が彼方の約束を果たす為に紡がれる物語である。

★★★

「F○c k!! まさか生徒に聖遺物を盗まれるとはな! ああ苛立って仕方がない!!」

ケイネスは内心苛立っていた。

時計塔鉱石科の君主^{ロード}、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは第四次聖杯戦争の参加者としてサーヴァント召喚の聖遺物、アレキサンダーの布を手にかけていた。だが、生徒のウェイバー・ベルベットに聖遺物を盗まれ、ウェイバーは冬木へ先に向かわれたのだ。

「落ち着き……そうだ、まだ聖遺物として残されたものはある。だが、この英雄は英雄ではなく兵器としての一面が強い。天才たる私とて、御し得る事が出来るか些かの不安はある」

聖遺物はもう一つあった。

古代メソポタミア文明を記された石版の近くから見つかった金色の鎖の破片。その聖遺物から察するに召喚されるのは、その鎖に関連した人物達か、本人か。恐らくは本人の方が強いだろう。

古代メソポタミア、ギルガメッシュ叙事詩出典で鎖に関連する存在とえば、3人にまで絞られる。

英雄王ギルガメッシュ。星の巫女リリエル。そして……

「天の鎖、エルキドゥ……クラスによつては御し得ない存在ではあるが、これ以外の触媒では些か弱いか」

ケルトに関連する触媒ならあるが、2択を取れば神代の時代を生き延びたエルキドゥの方がケルト神話に登場する英雄より知名度も高い。ケルト、アルスターと考えれば当たりはクーフーリンだが、それ以外の英雄、例えるなら女王メイヴなど戦闘に向かないサーヴァントと言うのも召喚される危険性がある。

「いいや、だからこそだ。これは試練！私にとっては試練なのだ！」

一流の魔術師、鉱石科の君主ロードとして名高い彼の聖戦は聖杯戦争が始まる前から始まっているのだ。そう言い聞かせながらも、高らかに覚悟を決めた。

「何を迷う事がある！ このケイネス・エルメロイ・アーチボルト、一流の魔術師としての自負を此処で曲げる訳にはいかない！ 呼び出そうではないか！ 神代の時代を生きた英雄を！」

ケイネスにとって聖杯戦争は魔術師の誇り高き儀式であり、魔術師としてのプライドを貫き頂点に立つ為の聖戦。ならば、召喚する英雄を御し得る事こそ始まりに過ぎないのだ。

更にはソラウとの婚約もあり、彼女も連れて行く。

男として情けない姿は見せられない。そんな思いを抱きつつ、ケイネスは戦場である冬木へと向かった。



素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝 三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

遠坂の工房にて2人の男が立ち尽くしていた。

右手に令呪を宿し、聖杯戦争に勝利し根源へと到達すべく、究極のサーヴァントを呼び出す為に此処に詠唱を完成させた。

呼び出されたサーヴァントは紛れもなく一級のサーヴァント。その風格、その王氣、紛れもなく最強のサーヴァントだ。

「勝ったぞ綺礼、この戦い我々の勝利だ！」

そして目の前のサーヴァントに対し、一礼する。

英雄王ギルガメッシュ、かつて世界の全てを手に入れた男、原初にて君臨した王を呼び出した遠坂時臣は内心、狂喜乱舞だが常に優雅を心がけながらも敬意を持って目の前の王に一礼する。

「招きに応じていただき感謝致します、王よ」

「……ふん。そんなちっぽけなもので雑種ごときに呼ばれたかと思うと腸が煮えくり返りそうだ」

「この度は私共の行う聖杯戦争に王の力をお借りしたく、召喚させていただいた次第に
「ハイごます」

「なぜ我が貴様なんぞのために力を貸さねばならぬ。我は王だ。力を貸すかどうかは我が決める」

「大変失礼致しました。おっしやる通りかと」

遠坂時臣が謝ると、ギルガメツシユは不機嫌な顔をしたまま腕組みをした。王として人を見る価値があるギルガメツシユにとってこの男は好かない。従うつもりはないが、遊興もない為男を殺して座に帰ろうと宝物庫を開けようとしたその時。

「!？」

突然、驚いたような顔を見せ後ろを振り向き窓を見た。

時臣は焦った。何せ傲岸不遜である王が自分たちの前で驚いた顔を見せたのだから。しかしその顔を見せたのは本当に一瞬。一瞬驚いた顔をして呟く。

「もしや……お前なのか？ 我が友に……まさか……」

そう言つてギルガメツシユは『宝物庫』に手を伸ばす。無くなっている。自分が生涯

「では……失礼します」

そう言つて時臣は一礼し出て行つた。

部屋に独りとなつた王は友との軌跡を振り返りながら独り言を漏らす。

「……よもや我だけでなく彼奴らまで召喚されているとはな。運命とは実に気まぐれなものよ」

だが面白い。

そう呟きながらもギルガメツシユは聖杯戦争の幕を開けようとしていた。

★★★

彼女は分からなかつた。

何故ここにいるのか、何故裸にされているのか、何故口をガムテープで塞がれているのか、何故縛られているのか、何故こんな目に合わなければならぬのか。分からない事だらけだ。

「みたせ、みたせみたせ、みたせ、みたせ、みたせと」

分かるのはここが暗くてジメジメしていて、自分が裸で縛られていて、それをしたのが学校からの帰り道で彼女に道を聞いてきたこの青年だと言う事だけだ。

「だけど満ちた時をはきやくする♪」

だけれど、変な歌を口ずさむその青年が道を聞いてきた時と同じ笑顔を浮かべたまま何か準備している。それが分かればコトネにとって十分すぎた。

「ひっ……！」

青年は真っ赤な血で何かの陣を書いていた。

その周りに居たのはお母さん達の首や身体がバラバラにされて既に死体となり、死体を弄びアートと称した地獄が目の前に広がっていた。

「あつ、起きたー?」

「まずこのメスでコトネちゃんのおなかを切つてねー、腸つて解る? 解んないか? お腹の中にある大事な物なんだけどね、その腸を引きずり出しまーす。そして、それをこの板にくっつけて鍵盤代わりにしたら出来上がり! わくわくするでしょ!」

その瞬間、少女の頭の中は恐怖で埋め尽くされた。

青年の手に持つメスが少女に向けられていた。腹を切り裂かれて腸を抉り出される。それがどれほど痛いのか、どんな状況になるのかまだ子供の少女には予想が付かない。

「いや……いや…… たすけ……て!!」

「んー、無駄だよ? この場所には誰も居ないし、もう夜中だよ? こんな場所に人が来るわけないしねー」

そこには死ぬ未来が見えた。

助けを呼ぼうにも夜中の3時、誰もが就寝している時間帯に少女の叫びは届かない。ニヤニヤとしながら青年はメスを少女の腹に向けた瞬間、

『止めなさい——不届き者』

とても冷たい声が聞こえた。

メスがお腹に触れようとしたその瞬間、バチッ！　と言う音がメスを弾いた。咄嗟の事で弾かれた青年は驚いて尻餅をつく。少女も一瞬何が起きたかわからなかったが、頭の中で声が聞こえ始めた。

『——生きたいですか？』

「えっ……？」

『母を失い、父を失い、絶望に苦しめられて尚、生きたいですか？』

少女の両親は殺された。

この目の前の青年に殺された。優しかった母も父も居ない。生きる希望なんて湧かないだろう。少女には酷な選択だ。それでも、少女は叫んだ。

「しにたくなあ……しにたくないよお！　わたしはいきたいよ!!」

少女は生きたいと叫んだ。

右手が熱くなる。まるで焼印を押されたかのような激痛が走るが、それよりもこの場の恐怖が勝る。

だが、聞こえた事に不思議と恐怖は無かった。

『ならば告げなさい、貴女にはその資格がある。私の名は——』

縛られながらも少女はその言葉に耳を傾けた。

唯一の助かる道はこれしかない、小学生くらいの年齢の少女は直感で理解した。

「あつれ、何だったんだろ？ 今の……静電気？」

青年は再びメスを持って近づく。

さつきはメスがまるで何かに弾かれたような衝撃に手首を軽く痛めたが、それ以上に、少女がやるべきことは決定した。

縁は彼方から結ばれた。

紛い物とは言え召喚陣は存在する。

そして右手の痣が赤く浮かび出した。
条件は揃った。

本来なら選ばれない筈の少女に彼方から繋がった英雄の残滓から聞こえた声を信じて少女は力強く叫び出した。

「たすけて！　リィエル!!」

ゴオツ!!　と血で描かれた召喚陣に魔力が吹き荒れる。召喚に大した魔力は必要ない。聖杯からバツクアツプされ、未だ『座』が存在せずとも、存在する触媒はこの世界の近くに存在する。

待ち続けるのも、もう疲れた。

だから、自分から彼に会いに行く事を決意し、『宝物庫』から一つの財が消失した。

だが、それでも逢いたいと思うのが罪だと言うなら、多分私は戦う為に呼び寄せられたのだ。

長い透き通った銀髪で星のように輝く蒼い瞳に純白の羽衣が目を惹きつける。パチツと眼を開けると少女の前に現れた。

「初めましてマスター、召喚に応じ参上しました」

「ま……すたあ……?」

少女は聖杯戦争の事を良く知らない。

召喚されたリエルは頭を軽く撫でて「今はわからなくていい」と告げて、メスを持った青年の前に立つ。

「COOOOL!! スゲーやつ! まさか天使を召喚しちゃうなんて、やっぱりこの世界は面白すぎるっ! 神様がこんなイカしたサプライズを用意してるなんて俺、想像もしてなかったっ!」

「貴方が私のマスターをこんな目に合わせた人?」

「そうそう、俺さあ。悪魔を召喚しようとしたんだよねえ、その為には怨嗟とか色々必要じゃん? だからその子を人間オルガンにして色々試してみようと——」

「もういいわ。そんなに悪魔が見たいなら会ってきなさい。——地獄でね」

「へっ?」

リエルが手を振りかざすと青年は燃えた。

地獄の業火の再現、再生と破壊を繰り返すその炎は本人の魂が燃え尽きるまで消えない。厳罰には火刑、火刑の意味は罪深き者に与える神に捧げる意味合いを持つ。

「ぎゃあああああああつ!! 熱い!! 熱い!!」

「そのまま残り少ないこの世の生を懺悔し、悔い改めなさい。命を玩具にするその冒瀆はこの私が許さない」

「嫌だあああああ!! 死にたくない!! だってまだ俺はあああああつ!!」

命を冒瀆する者。

リエルが最も嫌うものだ。イシュタルのような人間を下に見る存在が嫌いな彼女にとつて、この男は生かす価値もなかったのだろう。

指を鳴らしてこの場所から別の場所に繋げた。この男は1時間もすれば死に絶えるだろう。

「悔い改めなさい。それが貴方の罪よ」

リエルは冷たい眼をして、繋げた空間へ男を吹き飛ばしていた。翌日、殺人鬼であつた雨生龍之介は翌日焼死体となつて発見されたのは別の話だ。

「おかあ……さん……おとお……さん……」

拘束を解いたリエルは少女を拘束台から下ろし、母親と父親の亡骸の近くにまで寄つた。少女には分かつていた。もう2人はこの世に居ないのだと……。

リエルは少女の前で膝をついた。少女の目線と同じ高さで肩を優しく掴んで告げる。

「マスター、貴女はこれから辛い生き方をしなければいけないかもしれない。両親を失つて、この先に絶望があるかもしれない。けど、それでも私がこの世界に居る間、私は貴女を護るから」

生きる者への味方として、リエルは少女に誓つた。

母親を、父親を失って悲しくて死にたいと思っっているのかもしれない。だが、現実には残酷にも2人を甦らせる事は出来ない。

「だから、今は好きナだけ泣きなさい」

ほすつ、とリエルの胸元に少女の顔を寄せると、少女は耐え切れずに泣き叫んだ。もつと早く召喚出来ていたらなんて考えても無駄な話だ。辛くとも受け入れなければならぬ時だつてある。

だが、それでもリエルは少女の味方をしようと決意した。そして、少女を抱き寄せながらもこの部屋の窓に振り向いて呟いた。

「まさか、貴方達まで召喚されるとはね。ギル、エル」

運命とは面白いものだ。

そう呟いたのち、リエルは泣き疲れて眠った少女を抱き抱えて、この部屋から外へと進み始めた。

「ギル、エル、約束は必ず——」

あの時の思いは今も昔も変わらない。

だからこそ、リィエルはここに存在するのかもしれない。星の巫女リィエルと少女コトネの聖杯戦争は今、幕を開こうとしていた。

★★★

「サーヴァント・ランサー、エルキドゥ。キミの呼び声で起動した。どうか自在に、無慈悲に使って欲しいな。マスター」

ケイネスの予測通り、エルキドゥの召喚に成功した。

溢れ出るような魔力にその存在感を前に怯む事なくケイネスはエルキドゥに質問した。

「ランサー、貴様に問う」

「何だい？」

「聖杯にかける願いとは何だ」

そう、サーヴァントが招かれる原因は聖杯にある。未練があつたり、果たせなかつた事を聖杯を使って望みを叶えると言う事が聖杯戦争に召喚されるサーヴァントだ。むしろ願いが無いと言われた瞬間、信用ならないサーヴァントに背中を預けなくてはならない。ケイネスは魔術師としては大胆な所はあるが、基本は冷静なタイプだ。

「うーん、そうだなあ。ギルやリエルが居るなら、受肉したいかな。彼らと僕は明日を見る約束をしていたから」

「明日を？ どう言う意味だ？」

「あの2人は、僕が神の呪いによつて死ななければならぬ時に、僕を生かそうと懸命に呪いを解く方法を探してくれたんだ。けど、僕は結局死んでしまった。でも死ぬ前に約束したんだ、もしまた出会う事が出来たならその時は明日の世界を共に生きようつて、約束を」

「あら、ロマンチックじゃない」

ソラウは少しだけ羨ましいと感じた。

それは女として、憧れるような約束が死んで英雄となっても続いている約束、確かにロマンチックな話だ。

「ふむ、良いだろう。私はケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ。私達の槍として、お前を我がサーヴァントとして認めよう」

「よろしく頼むよ。マスター」

そして、エルキドゥは握手をした後に空を見上げて眼を見開いた。遠くからでも分かる、この懐かし感覚が胸を満たす。

「まさか、2人も召喚されているなんてね。ギル、リエル」

運命って面白いものだね。

そう呟いてエルキドゥはケイネスと共に聖杯戦争の幕を開こうとしていた。

原初の英雄達は来たるべき時に備える。

リイエル達はあの後森の中で仕方なく野宿をし、朝になった後に質屋に持っていた寶石を何個か売り出して資金にした。身分はとりあえず、暗示で騙し戸籍を軽く作って工房に必要な家を買った。因みにここまでで3日で揃えた。ギルガメッシュやエルキドウもそうだが、リイエルも規格外だ。要領が良すぎる。

「現代って神秘の代わりに科学が発展したようね」

「リイ……キヤスターさんははじめて？」

「ええ、そうね。この街を見たのは初めて」

家を構えた後、服を買って現代の街を歩いていた。

それは単純に興味があったのと、必要最低限のものを買う為、服に食材に寝具などは当然ながら必要だ。特にコトネはまだ子供で、両親を失ってしまい心を閉ざしてしまっ

ている。

リエルがそれを癒せるかと言えばまだ分からない。ただ暗示で記憶を改竄するのは酷な話だ。リエルはいつか消えなければいけないのだから。

「人も多いし売ってるものも最新型、ウルクじや『てれび』とか『くーらー』とか無かつたしね。現代って科学文明は凄いのね」

「ウルクってどんなどころなんですか？」

「遠い昔の国よ。まだ電気が発展してなかったくらい古い時代」

まああの時代は神秘が存在し、誰もが生きる為に働き、神様や王の恩恵、カリスマによつて動いていた時代だから現代とは似つかない。『王』も居なければ神秘も薄い。そんな世界は懦弱と言わざるを得ないが、知恵を磨いた叡智の結晶なのだろう。

「マスター、食べたいものはあるかしら？」

「ん、んーと、あれ」

「たい焼き屋？じゃあ行きましょう」

コトネとリエルは手を繋いでたい焼きを買う為に店に並び始めた。

★★★

「ここが日本なのね!」

「アイリスフィール、あまりはしやぎ過ぎないでください」

「ごめんねセイバー、でも私嬉しくってね」

アイリスフィールは柄にもなく日本の街を歩いて興奮していた。彼女は聖杯の器としてアインツベルンの城から出た事が無い。箱入り娘と言われたら肯定される。

それは聖杯アイリスフィールの器にとって仕方ないのだ。当たり前だが始まりの御三家は人類がいずれ立ち向かうであろう厄災に寄越す世界の抑止力カウンターを模して生み出した儀式であり、マキリは令呪、遠坂は霊脈、そしてアインツベルンは聖杯の器を生み出す為にホムンクルスを生み出すのだ。その先に願うのは第三魔法ヘヴンズフィールか根源アムランツクレコードの到達かは今はまだ知る由もないが。

「ねえセイバー、アレは何かしら?」

「アレですか？たい焼き……と言うものらしいですが」
「良かったら買って食べない？セイバーも一緒に……」
「…分かりました。では行きましょう」

若干の呆れは有るが、暗い表情をされるのはエスコートする騎士として失格だ。アイリスフィールは城の中で少しだけ暗い表情をしていたからこそ、仕方ないと思いつつもない焼き屋に並び始め……

「あつ」

「ん？……つつつ!？」

イレギュラー
異常事態と遭遇した。

★★★

日本の冬木に到着し、事前に予約したホテルの階層で魔術工房を作るケイネスの後をつけて興味深そうに見るエルキドウがいた。エルキドウは魔術自体は殆ど使えない。

兵器としての爆発力が高い為、魔術に変換するのは効率が悪い。とは言えリィエルから教わった魔術、基礎程度は使えるくらいだ。リィエルのありとあらゆる魔術を見てきた故にある程度の魔術は理解出来るようで、見ていて飽きないのだ。

「成る程……現代の魔術はこうなってるのか……中々興味深い」

「神代の基盤の当て付けのつもりかランサー。貴様が生きていた時代からすれば矮小に見えるかもしれぬが、私はそこらの魔術師の上位に位置する者だ」

「それは間違いないとボクでも思うよ。この神秘が薄れた時代でこれだけの事をやれる魔術師はそうそう居ない」

この時代では魔術より技術でどうにか出来てしまう為、多大な神秘はこの場所では見る影もない。神代の時代と一緒にしたら比較するまでもないのは事実だ。

「貴様の時代に居たのだろう。魔術師の中でも原点であり頂点に君臨した魔術師、星の巫女が」

「うん。そして恐らくは召喚されている」

「英雄……いや、兵器としての直感であるならば考慮せざるを得ないが、星の巫女リィエ

ル、そして英雄王ギルガメツシュとはな……」

流石にケイネスも頭を痛めた。

英雄や騎士と言った名を残した人物は神秘が蔓延し、この時代ではあり得ない力を奮っていた。アーサー王伝説やギリシヤ神話、神を連なるオリュンポスの時代では神の力すら記される。

オリュンポスと比べたらと言う訳ではないが、バビロニア神話に出てくる神や魔獣も大概だ。豊穡と戦の女神イシュタル、天の牡牛グガランナ、森の守護獣フンババなど、神が存在し力を奮っていた時代を経った一人の魔術師が終わりを告げ、神の天罰として星を降らせたと言う。そして人の世を築き上げた始まりの英雄、原初の王だ。

「しかしその神話は本当なのか？」

「本当さ。——じゃなきやウルクはギルガメツシュが帰る前に滅んでいた」

リエルは星に止まらない小惑星を落とした神話。女神イシュタルを諫める為にリエルが命をかけてイシュタルを天界に封印したと言う。

ギルガメツシュが帰ってきた後、王の帰還を果たしギルガメツシュが過労死した後に

ウルクは後を追うように滅んだ。聞いた話、リイエルは精霊に近い存在であり、第二魔法に近い原理で世界に名を残した原初の魔法使い。

「マスター、お願いがあるんだけど」

「……言ってみろ」

ケイネスはその言葉を聞いて苛立ちを感じながらも、ランサーが言った弁明を聞くため息をつけてそのお願いを聞き入れた。



近くの喫茶店に入り込みココアとカフェオレを頼むリイエル。コトネ達の前には令嬢を思わせる白いコートに身を包んだ女性、アイリスフィールと黒いスーツのSPが漂う格好だが、さながら姫を守る騎士のようなセイバーが座っていた。

「……？ キャスター、このキレーなおねーさんとしりあい？」

「あー、知り合いと言うか、倒すべき敵と言うべきか……」

聖杯戦争は基本的に殺し合い。

血生臭い事実を子供のコトネに伝えるべきか否か、少し悩みながらはぐらかした。

「キャスター、貴女は何故私達とこんな場所に入った？」

「……暇だったから？」

「そんな理由で誘ったと言うのか？随分と危機感のない、私達は敵同士なのは重々承知な筈だ」

その言葉にリエルはため息をつく。

確かに殺し合う相手に変わりは無い。だが、今はまだ昼間、太陽が出ている時だ。にも関わらず目の前のサーヴァントは血気盛んだった。

「まさかと思うけど夜に戦う聖杯戦争で真つ昼間から始める気だったの？今はまだ時じゃない、それともその仮マスターさんの待ても出来ない血の気の多い子だったら謝罪するわ」

「貴様……私を愚弄する気が！」

「()店内、叫ばない」

ぐつ、とセイバーが大声で叫んだのを他の客が注目している。その視線からゆつくりと渋々ながら座る。どうやら冷静さや風格はリエルの方が上のようなのだ。まあ当然と言えば当然だ。唯我独尊天上天下の始まりの英雄王ギルガメツシュの宮廷魔導師であり旅路をしていたギルガメツシュに代わって国を支えた最優の持ち主。騎士王と言えど送ってきた人生の濃さが違う。

と言うか唯我独尊の英雄王に出会い頭から反抗していたリエルはある意味物事を客観的に見るギルガメツシュの俯瞰に近いのだ。

「別に何かしようなんて思っていないわ。偶然会って単純にお茶しましょうと誘っただけだし。どの道、聖杯戦争の勝利者は暫定とは言え決まってるし」

「何………?」

「まあ、そこら辺は置いてマスター、美味しい?」

「うん」

それは良かったと頭を撫でる。

コトネは聖杯戦争の危険性を知らないから目の前の二人の前でも平然としながらパフェを食べている。セイバーからしたら「こんな幼子が……」と思うことはあるが、キャスターが洗脳しているわけでも無い。それだけは分かる事だ。恐らくはこのキャスターは善性寄り、騎士に近い精神を持っているようにも感じる。

逆にセイバーは顔を顰める。

騎士王が認める騎士のような精神と見た目からの高潔さは英霊の上位に位置する存在。それでいてセイバーの出す風格より上を感じる。言ってしまうえば同族嫌悪に近いのかもしれない。

もしこの英霊が自分のいた時代に居たら……悲劇を覆す事が出来た。出来た筈と言う確信があつた。

「（私が召喚された原因はあの人だし……それに多分私の親友も召喚されてる。後は……マスターの事かな）」

「えっと、キャスターさん？」

考えこんでいると白いご婦人、アイリスフィールがキャスターに話しかけた。

「ん？何でしょうマダム」

「一応参考までに聞きたいのだけど、貴女が聖杯に懸ける願いについて聞いてもいいかしら？」

「聖杯に懸ける願い……特には無いですよ？」

その言葉にセイバーは目を細める。

直感からして嘘はついていない。それは分かる。だが、聖杯戦争に呼び出されるサーヴァントと言うのは未練や後悔、聖杯によって叶えたい理由がある願望を持って召喚される。

それを持っていないこのキャスターはいったい何なのだろうか。

「なら何故貴女は召喚されたの？」

「私は……余興かな？いや、違うな？娯楽……？いやそれもなんか違うし……まあマスターが襲われてたからこの子によって召喚されて助ける事が出来たなら後は余興を楽しもうかなと思っただけから？」

約束だからと言ってしまえば真名の足掛かりになる可能性がある為言わない。まあ

実際、彼と会い、友と会い、その後についてはまだ何も考えていない。

「全部建前ではないか」

「寧ろ願いを言ってしまったら真名がバレちゃうからね。そう言う貴女は願いと云うか……いや、人々の願いが収束した何かを持つてるようだけど、それを手放したいと思つてゐる。違う?」

「つつ……!?」

リエルの指摘は的を射ていた。

リエルは僅かながら感じ取つていた。本質的に言えばギルガメツシュに似ているのかもしれないが、そこは比べようがギルガメツシュに劣るのは必然。ハッキリ言つてまだ小娘、王の風格はあるが王であるその重圧に耐え切れる器ではない。

「まあ、そう言つた英霊はある程度該当するけど、私からしたら貴女より隣にいるマダムさんの方が興味あるわ。一種の世界、いや限定された理想郷の内包なんて興味深いわね」

「!?」

「？」

アイリスフィールは軽く驚愕する。

キャスターの瞳は魔眼ではないが、本質を見抜く事には長けている。当然と言えば当然かもしれない。リエルは原初の世界に存在した魔術師であり、あらゆる魔術の基盤を知っている。つまり、あらゆる魔に関する事に関してはギルガメッシュと同じ、原典を手にした女、かつて全ての魔術を手に入れた魔術師とも言える。

「まっ、深く追求はしないわ。後世に生まれたソレは私も初めて見たから」

「キャスター、たべおわった」

「クリームついてるわよ。拭いてあげるから動かない」

持っていた紙ナプキンでコトネの口元を拭くキャスター。

カフェオレを飲み、会計伝票を持って席を立つ。これ以上は夜に行くものだ。殺しあう相手の事を一々理解しても情が湧くだけで意味はない。

「お互いに悔いのないように。私達はもう行くわ」

「いいの？はなしがあるんじや」

「無いから、それにマスター暇そうだったし、いいわよ」

マスターと手を繋ぎ、店を出る二人。

その後ろ姿にアイリスフィールとセイバーは親子みたいだと思いつつも、あれ程の英霊が相手だと言う事に気を引き締めていた。



「…………やはりな」

英雄王ギルガメッシュは宝物庫に眠る2つの財を見つめていた。ギルガメッシュの宝具は無限にも及ぶ原典の宝具、だがその中で一際輝きを放ち、ギルガメッシュが真の英雄、来たるべき厄災に抜くと決めた宝具は3つ。

その内の2つは友が残したもの。

故に友に通用することはあり得ない。若かりし頃に肩を並べたあの頃を思い出すこの状況、英雄王としての友とぶつかり合ったあの日々、目を瞑れば目蓋の裏にしかと焼

き付いている。

「此度の聖杯戦争とやら、運命に導かれたように思えてならんのが気に食わんが、これもまた王の務め」

ギルガメツシユは世界を背負う王。

誰かに指図されたような上からの意図的な導きがあるように思えるのが多少気に食わないが、約束の三人は揃った。

「精々、我を楽しませてもらうとしよう」

恐らくは次と無い圧倒的な遊興であり、二度とない遊興だ。楽しまなくては愉悦する機会がない。神々に生み出されし兵器、星に生み出されし精霊、唯一無二とも呼べる宝に会うこの高揚感にギルガメツシユは酒を煽りながら笑っていた。